

マジカル☆ストリーマー

ぬおーっ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔法少女ちゃん（16）が顔出し生配信やってバズるお話。きりのいいところでエターする。供養。

目次

第1話	1
幕間：揭示板1	27
第3話	36
幕間：揭示板2	63
第5話	70
第6話	93
揭示板3	130

第1話

空一面を覆う太陽が、墓標のように林立する摩天楼をまばゆく照らし出していた。ビル群の窓はことごとく砕け散り、都市を網目のように走る高架道路は崩落し、瓦礫の雨を降らせている。かつてオフィス街を満たしていた人々や車両の喧騒は見るともなく、ガラガラと崩れ落ちる音だけが遠雷のように、虚しく響いている。

「あはっ、やったわ」

そんな廃墟の一角に、二人の少女が倒れ込んでいた。爆破でもされたのか、すり鉢状に抉られたアスファルトの窪地。空を覆い尽くす太陽の光は廃ビルに遮られ、少女たちに届かない。

唐突につぶやいたのは半分になった少女だった。歯車と螺子と何かの皮膜で形成された特殊な一对の翼を持つ彼女は、下腹部から下の部分が消失している。すでに流れる血も失くしたらしく、脊椎と臓物の一部が露出している死に体だが、惨状とは裏腹な晴れ晴れした笑顔を浮かべている。首元には留め具の壊れた古い首輪が転がっていた。その隣に寝転ぶセーラー服の少女は、ぼうっとした瞳を彼女に向ける。

「私は命の使い方を選んだ。他の誰でもない自分の意思で。だから私は畜生じゃない、人間なの。人間だって証明できたの。あなたもそう思うでしょう、あーちゃん？」

「……」

「あなたの見せ場はもう少し先みたいね。半端な魔力の使い方をしちゃって、情けない」

彼女は紫色の唇を吊り上げながら、震える手先をセーラー服の少女に伸ばした。

「まあ、あなたにはあなたのやりたいことがあるでしょう。せいぜい、好きな、死に方を……」

言葉は唐突に途切れ、続きが紡がれることは永遠になかった。もとより瀕死を通り越した臨死状態で話していたのだ。

開き切った瞳孔と目を合わせ、セーラー服の少女が呆然とつぶや

く。

「私のやりたいこと……好きな、死に方……」

——

「ふにゃっ」

頬杖からずり落ちてキーボードに頭突きをかましたことで、かなち奏地小舞は目を覚ました。ネットサーフィンの最中に居眠りをしていたらしい。

薄暗いワンルームマンションの一室。敷きっぱなしの布団とパソコンデスク、壁には留め具の壊れた首輪がかけられた殺風景な部屋が、小舞の居室だ。

小舞は打ち付けた額を涙目でさすり、涙とよだれを手で拭う。痛みが引いてくると、シワだらけのセーラー服を気にも留めず、デスクトップPCのディスプレイへ無気力な瞳を向けて、怠惰な趣味の時間を再開した。

多数のタブとウィンドウを開いてザッピングしているのは、動画サイトにおける閲覧数トップの動画や、SNSで無数のいいねを押されたいわゆるバズり投稿だ。

世間には素晴らしい人々が溢れている。彼ら彼女らは各々の分野に特化した技術や知識を活かし、常人から見れば神業にしか見えないスゴ技や思いもよらない発想を毎日のようにネットへ投稿して、「すごい」「面白すぎる」「神」「尊い」「天才」「かわいい」などと称賛を受けている。

小舞はフォローしているネット上の偉人たちによるコンテンツを日夜消費し称賛するの生きがいにしてきたが、ふと思った。

「私もチャホヤされてえ」

誰かがいい思いをしていれば自分もそうなりたいと思うのは人情だろう。小舞もネット上で何かを成し遂げることで称賛されチャホヤされ、存在を承認されたいと考えた。

小舞は日々を懸命に過ごしている。成り行きで押し付けられた課

外活動を小学生の頃から九年は続けているし、その活動に伴う窮屈な決まりごとを律儀に守りながら、とても真面目に頑張っている。その頑張りを誰かに知ってもらってえらい、すごいと言われてみたかった。

「まあ無理やな」

しかしすぐに諦めた。ここで本気で考えもせず諦めるのが常人と偉人の差かもしれない。小舞も長く続けてきた課外活動の腕前には並以上の自信がないでもなかったが、ハナから無理だと決めつける凡俗な思考が奮起を許さなかった。

追い打ちをかけるように、きらびやかな配信サムネイルが目に入る。

『こんにちはっ、デスヘイズです！ 初見さんいらっしやーい。あ、テレビ見て来てくれた？ ありがとう！』

「この成功者がっ、チャホヤされやがって……！」

サムネをクリックすると、膨大なコメント量によどみなく対応する有名配信者、デスヘイズが映し出された。小舞も嫉妬で歯ぎしりしながら「ヘイズたああん結婚してええ」などと打ち込み有象無象の一部と化す。

有名配信者デスヘイズはいわゆるネットアイドルの頂点の一人だった。当初はゲーム実況配信を主軸とするありきたりなストリーマーだったが、かわいらしい鈴のような声と純朴な性格が注目を集め、高いトークスキルに加え歌い手レベルの歌唱力、配信で使う画像素材を自作するイラストの腕前など、甚だしいマルチタレントを発揮し一躍有名となった。面白いかわいいう能と三拍子そろった奇跡の配信者として、チャホヤされない日はない。

ネット上でチャホヤされるにはそれほどの才能が必要になるのだ。「ちくしよーかわいすぎる……天地をひっくり返しても敵わん……ん？」

そのように情けない嫉妬を拗らせていた小舞に発破をかけたのは、たまたま関連動画から目に入った動画サムネイルである。

かわいらしい子猫のサムネだった。再生してみると視野に入れた

だけで胸がキュンキュン言っただけで爆発しかねない愛くるしい子猫たちがわちやわちやする内容だったが、ネット上のかわいい動物データを網羅する小舞には分かった。

「無断転載やん！」

それはSNS上に投稿された人気の動物動画を寄せ集めた、転載精神の塊めいたおぞましい動画だった。調べてみると無断転載専門のチャンネルらしい。

きつと低評価と否定コメントの嵐だろうと思いきや、小舞はコメント欄を見て愕然とする。

コメント(3947)

『かわいい』『癒やされる』『かわいいの詰め合わせ助かる』『危うくかわいさの過剰供給で心停止した』『成仏』

「こいつら！　かわいけりやなんでもいいのか！」

著作権に唾を吐きかけるような内容の割に高評価の数とチャンネル登録者数は紛れもなく人気者の範疇だ。人々のあまりの単純さに小舞は呆れ、腹が立ち、唇を尖らせてから、ハッと気づいた。

「待てよ、これ……案外ちよろくね？」

その動画に特別な技能は何も使われていない。たとえば歌ってみたや踊ってみたジャンルのような優れた歌唱と舞踊の技術もないし、MAD、作ってみた、切り抜き、自主制作映像などの職人芸もなく、デスヘイズを含む人気配信者たちのようなカリスマやかわいさ、尊さのかけらもない。ただ保存したGIFをつなげているだけだ。

にも関わらずチャンネル登録者数は十万を超え、コメントは賛同者で溢れ、投稿者はかわいいの伝道師として崇め奉られている——チャヤホヤされている。

「こんなので人気なら……私だって人気者になれる。絶対なれる！」

かくして小舞は立ち上がり、ワンルームから外へ駆け出した。こんな酷いコンテンツがウケるなら自分だってウケていいはずだよなという極限まで後ろ向きな動機によって、小舞は一步を踏み出したのだ。

小舞は人気者になりたかった。

――

【魔法少女】 初配信！ 悪鬼退治するよ！ 【シャタードアース】

「えーとこれでいいのかな？ 声聞こえてますかー、ってまだ誰も来てないか。1コメ来るまで待機待機……」

コメント

：聞こえてるぞ！

：1コメ

：1コメニキどんまい

：本物の魔法少女と聞いて

：告知から来ました

：ガチで香楼のあの子？

「結構来てはるやん!? ああ、SNSから来てくれたのね、ありがとー！」

小舞はスマホにちらちら目をやりながら、コンパクトなアクションカメラのレンズへ愛想を振りまいた。大枚をはたいて買ったそのカメラはすこぶる好調で、スマホの配信画面には小舞の幼い顔貌と流れるコメントがなめらかに映し出されている。

「んっ？ んん?!」

同時視聴人数を見てみると三桁から四桁へ推移しつつあった。想定を遥かに超える人数に目を疑い、ほどなく目を逸らした。リアクション芸よりもまずは初配信の内容を充実させるのが優先だ。

ビル風にセーラー服をはためかせていた小舞は、つま先で二度地面をタップする。すると華奢な肢体が光に包まれ、小舞は踊るようにひらひらと身体をそよがせた。

輝く粒子は徐々に土色の板となって身体へ装着され、さらにその上からスカイブルーを基調に緑と白を添えた装甲板が覆いかぶさる。肩口から爪先までを覆う重厚な鎧姿だが、奇妙なことに守りを固めるのは左半身のみだ。右半身は黒いインナーと申し訳程度の手甲のみが装着され、無骨な左半身と柔らかかで色白な肌色の右半身がコントラ

ストを成している。

発光の終わり際、左右非対称のバランスをとるように最後の変化が始まる。小舞の右手に棒状の光が束なって、身長に倍する長さへ伸びると、金属的な光沢を放つ長柄のハンマーが姿を現す。それをバトンのようにくるくる回しながら身体をスピンさせ、柄を地面について決めポーズ。遅れて耳元に弾けた光は星型のイヤリングへと収束し、幼気な相貌に一欠片の大人っぽさを添える。そうして顕現したのは、アシンメトリーな鎧とハンマーを装備した、魔法少女である。

「魔法少女『シャタードアース』です！ あーちゃんって呼んでくださいー！」

：本物だあああ

：悪質な騙りかと思つたらマジもんで草

：くっそかわいい

：変身初めて見たんだけど、めちやくちやかわいくない？

：芸術点が高すぎる

：ドヤ顔かわいい

：これは推せる

「えへ、えへへ」

称賛八割のコメント欄に小舞はみつともなく破顔した。これこそ求めていたものだ。

小舞にはネット上の偉人たちが誇るような技能、技術、発想力、その他あらゆる一般的な才覚が欠けていたが、たった一つだけ自信のある分野があつた。魔法少女の能力である。

魔法少女。異界からのエネルギーに同調し、同じく異界からのエネルギーに依拠する怪物たちを滅する特殊能力者だ。

小舞は七歳の誕生日にシャタードアースとして活動を始め、それなりの期間活動してきた。本当は爪先でタップしたりステップを踏んだりする必要もなく、ゼロコンマ数秒でバトルドレスへ変身できる。すべては自分をかわいく見せるため、ひいてはネット上でチャホヤされるため、付け焼き刃で覚えた光のダンスだった。

：おいヨダレたれてんぞw

：ふにや顔好き

：何この生き物かわいい

：股間がエツツツ

：魔法少女のバトルドレスってなんでいちいちエロいの？

「えへへ、え、エロ!? いえあの、変身後の格好はどうしてもいじれなくて……あまりそういう目で見ないでいただけると……」

：もじもじ

：ああ（悶絶）

：恥じらい良いぞ、良いぞ！

：もうそういう目でしか見れなくなった

：変身シーンの切り抜きを頼む

小舞は半身になつてもじもじ髪をいじりながら、顔を赤らめた。チヤホヤかわいいは大歓迎だがそっちの方面は専門外だ。ごまかすように咳払いして本来の流れに戻る。

「ごほん、えーまずはこの配信チャンネルの目的ですが、みんなにチヤホヤされ……もとい、魔法少女の実態を知ってもらうことにあります！」

：本音漏れてるw

：実態とは？

：初の魔法少女配信者だもんな

「そう、実態です。みなさん魔法少女についてどれくらいご存知で？」

：放課後とかに色々頑張ってる

：231事件の英雄

：メスガキ

：うちの先生は究極のボランテニアって言ってたよ

：協会の秘密主義が過ぎるんだよ

「誰がメスガキだコラア！ おほん、まあそうですね、秘密主義というか暗黙の了解があるせいで、ぼんやりとしか知らないと思います。そのぼんやりを晴らしてはつきり実態を知ってもらうのが、配信の目的になります」

暗黙の了解とは、『魔法少女の活動が広く知られてはいけない。魔

法少女の尽力はあくまでも陰で密やかに行われるべきである』の二点だ。

説明するとコメントはそれを破って大丈夫なのかという旨で埋められた。

小舞は満面の笑みでうなずきながら、

「んなもんクソ喰らえなんですよね〜」

ハンマーの石突を床に叩きつける。

「誰一人理由の知らないかび臭い決まりをね、こちとら九年も守ってきたわけです。隠し事できる自信ないから友達も作らずに、放課後も休日も魔法少女活動をずーっと頑張ってきた。だから——ほめてほしいんです！　頑張ってるねって認めてほしいんですっ！」

笑顔の圧力と心からの叫び。真剣な声音とは裏腹に内容は幼稚そのものだ。

頑張りを認めてほしい。頑張っている自分を承認してほしい。いかにもわがままな子供らしい欲求を、しかし笑うコメントはなかった。

：正直でよろしい

：いくら魔法が使えると言っても子供だからな

：うちの娘も新人の魔法少女だから、苦労は察するよ

：大人でもずつと一人で頑張れるやつは少ない

小舞は心が軽くなった。理由もわからないまま生真面目にルールを守り、与えられた役割を必死でこなしてきた頑張りが、たった数行の文字列で報われた気がした。

こみ上げる気持ちと鼓動を深呼吸で抑え込み、小舞はチャホヤの余韻に浸る。

「えつとじゃあ、ずつと話すのもあれですし、とりあえず普段の活動を見てもらいましょう」

小舞はアクションカメラのアームを鎧の取っ掛かりにセットすると、窓際に近づくような軽い足取りで屋上の縁へ歩み寄る。

「魔法少女は、^{まじよう}魔性存在と呼ばれる悪いものを退治するのが役目です。これから探しに行きます」

行きます、と言ったときには身体が傾き、

「あつ、高所恐怖症の人は注意です」

埃っぽい繁華街へと身を投げたのだった。

――

：警告おせええ

：ヒエツ

：酔いどめポインター用意よし！

：スパイダーマンみたいな移動方法してんなお前な

：これすごい貴重映像なんじゃ

小舞はビルやマンシヨンの壁面を走り、建物間を飛び跳ねながら移動していた。画面には宙空を疾駆する映像と、時折遠いアスファルトの地面に小さな人影や車両がポツポツと映される。

さすがにながらスマホは危険なので、視界の端で目についたコメントだけ拾っていく。

：なんでわざわざ壁を？

：屋上を跳ねて移動する忍者スタイルでいいじゃん

「忍者スタイルは、うっかり給水塔踏み抜いて怒られたことあるんでもうやりません」

：どこ向かってんの？

「大雑把に敵の気配がするあたりを見て回ってます」

魔法少女は悪い存在を退治するのが役目であり、今は標的を上空から探している。

あまり長くなると画的に良くない。早く見つかるよう祈りながら空を駆けていると、駅前にそれらしき気配を見つけた。

西日に染まる古びた駅舎が、帰宅ラッシュの雑踏を吐き出している。その流れの傍ら、風雨に黒ずんだベンチにうなだれる中年の男性に、小舞はまっすぐ近づいていく。人々は小舞の格好に一瞥を向けるも、足は止めずに通り過ぎていく。小舞の存在は地域のおなじみになっっていた。

「もしもーし。ああ、アタリですね」

男性に呼びかけ肩を揺さぶると、うつろな目を剥きよだれを垂らす形相があらわになる。

長引かせるのも気の毒だ。

小舞は手刀を構え躊躇なく男性の胸へ突き入れた。

「今から退治始めますまず取り憑いた悪鬼を引きずり出します魔性存在に種類はありますが九割方人に取り付く悪鬼ですねコイツはよくいる憎^{ヘイトレッド}悪タイプの悪鬼です」

!?

：早い早い早い

：こいつ敵のことになると急に早口に

ずるりと抜いた手には黒いヘドロのような澱みが握られている。男性の胸には衣服の乱れも傷もなく、穏やかな顔で眠りに落ちる。

小舞は澱みを掴んだままもう一方の手でハンマーを回転させ、石づきで地面を突くと、

「で、異界に引つ張つて実体化させたら退治開始です」

世界が裏返った。色彩がなくなり、遠近感が乏しく、ただ白と黒の濃淡によつてのみ構成される異空間へ変じる。

同時に小舞の手から黒い澱みがずるりと抜け出し、管状に伸びる。実体のない煙のように揺らいだかと思うと少しずつ光沢を帯び、黒光りする一本の触手へ変化。触手の両端がめりめりと裂け、中から同じような無数の触手が粘液と共に吐き出され、さらにその先端から新たな触手が現れる。

増殖した触手はほんの数秒でのたうつ触手の塊と化した。建物の二階に匹敵する巨体。変異の仕上げとばかり、ぬめりけのある触手の表面が臓物のごとく蠢き、裂け目が生じる。それらが一斉に開いて現れたのは、舌のない乱杭歯と粘液に塗れた口だった。

だしぬけに、触手が伸びる。

跳び退る小舞。小舞の立っていた地面に触手が食いつく。触手の退いたブロック敷きの地面は、乱杭歯に抉られぽっかりと穴が開いていた。

「はい、このように悪鬼は暴れるとすぐ危険です。それと異界じやなきや実体がなくて倒せません。だから戦いの前にこつち^{異界}へ来る必要があるんですね」

小舞以外の色が喪失した異空間に、常人の気配はない。通行人からは小舞が突如消失したように見えただろう。間違つても一般人を巻き込まないよう、戦いは隔離から始まる。

と、説明しながら画面を見るとコメントが止まっていた。

一瞬ヒヤリとするが、このスマホとカメラは協会を脅して改造させた特別製だ。異空間からでも配信ができるのは事前に確認している。実際、配信映像自体はきちんと流れていた。

首を傾げながら小舞がスマホとカメラをいじっていると、ようやくコメントが流れ始めた。

：言ってる場合か

：こんなのにな勝てる訳ないだろ！

：想像の五百倍おぞましい外見でちよつと放心してた

：配信はいいから逃げろ！

「心配、してくれるんですか……？　ほんとに……!?　えへ、えへへ」
最後に身の安全を心配されたのはいつだったろう。小舞はにやけづらが抑えきれない。

幸いにもカメラは悪鬼の方を向いており、小舞の気持ち良さそうな笑顔は写っていない。

「えー、ぶっ心配ありがとうございます。だけど逃げるわけにはいきません。悪鬼は魔性存在の中で一番弱いんですけど、放っておくとさつきの人みたいに被害者が出ます。最終的には魔人や魔獣に成長して——231事件みたいになるわけです」

コメントがまた止まった。フリーズではなく、231というフレーズに視聴者が困惑していることには察しがついた。三年前に起きたそれは鮮烈な記憶を人々に刻んでいる。

「なので、さっさと倒してしましましょう」

数年前の記憶に蓋をして、小舞がハンマーを構える。重厚な鎧に守られた左半身を前に半身となつて、身軽な右半身でハンマーを支え

る。

悪鬼の巨体から触手が伸びた。槍のように伸び来るそれを、小舞は避けようとしなない。それどころか肩から突進する。一人称画面で見れば玉砕にしか見えず、コメント欄がまた止まる。

無論小舞に特攻の意図はない。触手が鎧に触れる寸前、青い鎧の表面に散りばめられた緑と白の装甲板が曲折を始める。それぞれが大陸と雲を模した装甲が、触手による噛み付きを弾き、いなす。

鎧を信頼し触手の槍衾に突っ込む小舞。驚くほどあつさりとハンマーの間合いに接近し、小舞は高々とハンマーを掲げ、

「えーいー」

悪鬼の数メートル手前の地面へ叩きつけた。

ブロックに亀裂が入る。それに連動し、悪鬼の真下の地面が唸りを上げ、割れた。

そこから出てきたのは幾つもの鋭い岩塊だ。研磨されたような杭状の大地が剣山を為し、悪鬼の身体を下から満遍なく突き上げる。

串刺しのまま宙空で固定された悪鬼は最後のあがきなのか、触手を一本小舞の方へ伸ばす。小舞が無造作にハンマーのひと振りで払いのけると、悪鬼の巨体がぐずぐずと崩れ、光の粒子となって散っていった。

石突を地面に突き、同時に世界が色を取り戻す。藍色のグラデーションがかかる空と、喧騒と雑踏に塗れた駅前がそこにあった。

道行く人々の注目を集める中、小舞は誇らしげに胸を張る。

「退治、もとい浄化完了です。魔法少女の活動について、皆さんわかっていただけました？」

すごい、強い、かっこいい。

そんな称賛を期待した小舞だったが、あまりのコメント量にアプリが処理落ちを起こし、配信はそこで強制終了。興が削がれた小舞はため息をついて、明日エゴサすればいいやと自分を慰める。

画面を意識して愛想を振りまくのに疲れた。一身にチャホヤを浴びる人気者にはなりたいたいけど媚びを売り続けるのは無理そうだ。明日からはもつと気楽にやろう。

今後の方針を考えながら、思い出したように変身を解除してセーラー服に戻る小舞。

ぼんやりとチャホヤの余韻に浸りながら進む彼女には想像もつかないスピードで、魔法少女の衝撃映像が電腦世界を駆け巡り、激震を走らせていた。

――

小舞が初配信の反響を実感したのは翌日、いつものように登校して教室に入った瞬間だった。

あくび混じりにのろのろと入ってきた小舞は、クラスメイトの女子たちに取り囲まれる。魔法少女活動で忙しい小舞はクラスでの付き合いを最低限にとどめており、彼女らとの仲は良いとも悪いとも言えない。

奇妙な歓迎に目をぱちくりさせていると、代表して委員長が口を開いた。その目は好奇心できらきら輝いていた。

「奏地さん、昨日の配信、拝見しました」

「えっ」

「貴女がああ魔法少女であることに我々は驚愕と好奇を覚えています。差し支えなければお話を伺ってもよろしいですか？」

「う、うん、いいけど。えー、リアルの知り合いに見られるのはなんか恥ずいね……」

ほんのり顔を赤くする小舞に、女子たちがずいと距離を詰めた。

「恥ずかしがることないよ！ 昨日の小舞さんすっごくかつこよかったです！」

「魔法少女があんなに怖いのと戦ってるなんて知らなかったの！ 無事に済んで良かったの！」

「ぶっちゃけ付き合い悪いチビだなーとか思ってた悪かった。ああやって私達を守ってくれてたんだな」

「おい今チビつつつたやつ前に入る良い度胸してやがる」

「謝っただろ!？」

女子たちは純粋な憧憬に満ちた眼差しを小舞へ注ぎ、口々に称賛の言葉を浴びせた。その中に聞こえた禁句にきつちり報復をしてから、小舞はチャホヤされる夢見心地からふと我に返る。

「しかし昨日の今日でみんな耳が早いね。元々興味あったとか？」

「何をおっしゃいます。今や世界中があなたの配信に注目していますよ」

「はい？」

「こちらをどうぞ」

委員長が差し出してきたスマホを受け取る。表示されたネットニュースサイトのトップページを見ると、小舞は思考が止まった。

『魔法少女シャタードアース、配信者デビュー』

『スターシリーズの一角が配信業界へ参戦！』

『OMGは取材拒否』

『香楼の女神が広報活動か』

大手サイトのアクセスランキング上位が軒並み昨日の配信の記事で埋まっていた。内容はどれも配信のあらましと小舞の発言を伝え、今後の活動に注目が集まって云々などの文言で結ばれている。加えて、サイトと連携するSNSのトレンドワードにもシャタードアースの単語が踊っていた。世界中が小舞の動向に釘付けになっている。

「いや怖いよ！ 配信から十二時間ちよいでこれかよ!?!」

「好都合でしょう。世界中の不特定多数があなたの行動を褒め称えています」

「たしかに嬉しいけど怖いって!」

スマホを返しながら小舞は身震いする。確かに多くの人々に魔法少女たちの頑張りを知ってもらい、褒めたり持ち上げたりしてほしいと望んでいた。存在と功績を承認してほしかった。ただ、あくまでもローカルに活動してきた小舞が突然世界規模で耳目を集めているとなれば、嬉しいより先に恐怖が来る。面倒な構ってちゃんである。

「ねえねえ奏地さん！ 私魔法少女になれないかな？」

「次の配信の予定はあるの？ 予定空けておくの!」

「香楼の女神……もしかして奏地さんが231事件の……?」

「あわわ」

「こら、あなたたち——」

当惑している間にも女子たちは勢いを止めず、小舞を質問攻めにする。委員長が止めに入ってもほとんど効果がなく、小柄な体軀も災いして小舞はもみくちゃにされた。授業を挟んで休み時間のたびに同じような騒ぎが起こるので、終業のチャイムが鳴るなり小舞はそそくさと「忙しいからまた明日！」と教室を出ていった。

配信の影響は小舞の想像以上に大きい。

帰り道でそのことをしみじみ実感していると、携帯が鳴った。それが反響を示す二つ目のイベントだった。

着信名はOMG、魔法少女協会。世界中の魔法少女たちの生活と活動を支援すると言われている国際的な組織だ。

顔をしかめて通話ボタンを押すと、老婆の声が聞こえる。

『シャタードアース。あなたは暗黙の掟を破りましたね』

「はい」

『はいじゃないですよ、まったくあなたという子は』

小舞は掟破りに微塵の後悔も覚えていないので、謝罪の一つもない。とはいえOMGには学費や生活費の面で世話になっているし、本当に困った時まるで役に立たない駄組織であることを差し置いても、一応小舞が九年間所属している団体だ。反抗はせず、あくまでもしおらしくお説教を聞いておく。

が、お説教がある話題に触れると、小舞は反抗期を爆発させることとなった。

『そもそも、魔法少女が目立つてはいけない掟がなぜ出来たとお思いですか?』

「分かりません、なぜですか?」

『カッチョイイからです』

聞き間違いかと思いきや、そうではなかった。しわがれた老婆の声はもう一度繰り返す。

『カッチョイイんですよ。世界にはびこる人類の敵を、人目に触れず始末する。そうすることで人類を守護し、以て発展へ寄与する。感謝

も報奨も求めずただ奉公と貢献にのみ身命を捧げる——まさに縁の下、内助の功の極み！ 誰に認められずともひたすら尽くす健気さ、愚直さ！ これをカッチョイイと言わずしてなんと言います。そうこのかつこよさに比べれば、頑張りを褒められたい認められたいなんて汚らしい俗物の発想——』

「くたばれ」

小舞は自分でも驚くほど冷たい声で別れを告げ、着信相手を着拒してから帰路についた。魔法少女の伝統の理由がまさかそこまでしょもないものだったとは。少しでも真面目に説教を聞こうとしていた数分前の自分をひっぱたきたい気持ちに駆られた。

イライラを抑えて帰ろうとしたところ、すぐに携帯が鳴る。着信は非通知設定。電源を落としてやろうかと考えるが、生来の真面目さに背を押されて通話ボタンを押した。

『そんなに怒らなくていいでしょう。冗談ですよ、半分くらいは』
「残り半分は何さ」

『それはあなたが知らなくてよいことです。じゃあ何のために掛けて来たんだって思いました？ ええごもつともですね、さっさと本題に入りましょう』

小舞は大きくため息をつく。こののらりくらりとした語り口は苦手だ。変に話が広がらないように黙って続きを促す。

『配信は問題ありません。人の迷惑にならない程度に好きにしてください。他にもやりたいことができたらどうぞ思う様楽しんでいただいて結構。我々はそのための協力を惜しみません』

「……同情ですか？」

『否定はしませんよ。あれからすでに三年経っている。あなたはいい加減報われるべきだ。それに、秘匿がなくとも障りがない裏付けがとれましたからね』

「はあ」

前半の意味は分かったが、後半はつかめなかった。おそらく知らなくてもいいもう半分の内容が関わっているのだろう。

深追いしても教えてくれないのは明白なので生返事を数度繰り返

して切り上げた。足早に帰宅し、セーラー服を着替えもせず靴下だけ脱ぎ捨ててPCデスクの前に座る。

事後承諾の形にはなったが、協会からのお墨付きを得た。これからは力の限りやる方も見ている方も楽しめる配信者生活を送ろう。思う様好きなように生きるのだ。

そうしてPCを立ち上げた小舞は、心置きなく本格的な配信JK魔法少女生活をスタートするのだった。

――

【雑談】魔法少女シャタードアース【するよ！】

「あーあー、音量大丈夫？ あい、じゃあやってきましょう」

コメント

：音量ちょうどいい

：いい感じ

：待機人数あげつねえ

：リアル魔法少女キター

：OMGが妨害してきそう

：後ろに何か転がってる

：今日はバトルシーンなし？

：かわいい

：女神！

「OMGとはさっきナシつけて来たんで大丈夫。後ろの丸いのはただの靴下だよ。バトルシーンはねえ、分かんない」

二度目の配信で小舞を出迎えたのは、軽く万を超える同時視聴者数だった。配信チャンネル登録者数はすでに五十万を超えまだ増え続けている。下から上へ流れていくコメント欄は瀑布のごとく流れ行き、すべて読むのは難しい。

急激な人気の上昇は小舞の承認欲求を飽和させ、むしろ小市民的恐怖に頬が引きつった。こいつら何が楽しくて見に来てるんだろう。

：ナシつけるて今日日間かねえな

：脱ぐなら洗濯カゴに入れなさいよ

：バトルはなくてもいいけど変身だけ見たい

：エチチなバトルドレス見たい

：女神様、ご機嫌うるわしゅう

「エチチな……はっはーん、やけに人が多いと思っただらそういうこと。
この変態！ すけべ！」

：ありがとうございます！

：罵倒助かる

：いけないとは分かっても興奮するんだ許してくれ

：最低なやつ多くね？

：女神様をそんな目で見るな！

：赤面かわいい

：赤くなってるんぜ？

「なってるんぜ！ それときつきから女神女神言ってる人、ヨイショし
過ぎて逆に嬉しくないから！」

小舞は好色なコメントを逐一罵倒しつつ、目についた質問に答え
る。

「今日は力場が安定してるから、悪鬼退治は多分ないかな。だからみ
んなのいろんな疑問に答えちゃう。なんだっけ、現役魔法少女だけど
なんか質問ある？ ってやつ」

小舞には何の取り柄もないが、魔法少女としての能力と知識につい
てはひとかどの自信があった。元々魔法少女の活動実態を発信する
目的にも適うため、一般人たちの素朴な疑問に分かりやすく回答して
出来るヤツ感をアピール。強くて賢い人気者魔法少女としてのキャ
ラを確立するチャンスだ。

早速コメントから良さげな質問を拾っていく。

：スレタイトル風草

：教えて！あーちゃん先生！

：力場って？

：そもそも魔法少女と魔性存在ってなんなの？

：経験はどのくらい？

「力場ってというのは、異界のエネルギーがこっちの世界にどのくらい影響するかってことね。影響が大きいほど魔性存在が発生しやすいわ。魔法少女と魔性存在は……えっと、待って、タイム」

途中までスラスラと答えていた小舞は言葉に詰まり、腕を組んだ。当たり前の知識を説明するのは案外骨が折れるものだ。賢いあーちゃん像を貫くため、大慌てで情報を整理していく。

が、こんがらがった思考回路に処理できる量ではなかった。

PC画面に配信とは別のタブを立ち上げ、『魔法少女、仕組み』で検索する。

『人類が暮らす世界は異界と呼ばれる別世界と隣接している。異界からは知覚不能のエネルギーが常に流入してきており、これが人類の悪意や邪念と結びつくことで魔性存在が生まれる。一方、異界のエネルギーと波長の合う人類は魔法少女と呼ばれ、彼女たちは上位次元存在たる魔性存在に唯一対抗できる能力を有する。この能力は俗に魔法と呼ばれる』。ほえー、そうなんだ。はい、というわけです」

：草

：検索してて草

：ウイキ朗読しただけじゃねーか

：これはポンコツ

：ポンコツロリ

：魔法って俗称だったのか

：ポンがかわいすぎて話が入ってこない

：そうなんだ言うたぞ

：なんで最前線に立ってるくせに知らないんだよw

「う、うるさいな、知ってるわ！ 言葉にしようとしたらこんがらがったんじやい！ 次、次！」

気持ちむすつとしてコメント欄を睨みつけていると、同じような内容で数回繰り返し返される質問が目にとまった。

『ゲームやアニメの魔法で再現できそうなのありますか？』

「分かんない。アニメは見ないし、ゲームはたまにRTA見るくらいだから。うまい人の動画見るの楽しいよね。ちなみにどんな魔法が

あんの？」

：そうだね

：例のネットミームに感染してそう

：草

：ホイミ ザオリク マダンテ バギ

：履歴書の特技欄にイオナズンを書ける！

「あ、これ魔法ですか？ ちょっと待って調べるから……回復とか蘇生系は無理ですね。バギ系、デイン系は多分できる、イオナズンはできそうなやつ一人知ってます。マダンテは……全魔力を解放して暴発？ 出来ないことはないですが、やったら即死です」

：即死!?

：回復系がレアってのはよく聞く設定だな

：結構万能だなあ

：即死ってメガンテと間違えてない？

「えつとですね、魔力は命なんです。異界のエネルギーと同調して増幅された生命力を魔力って呼びまして、だからこれを全部使うと、生命力が枯れて死んじゃうわけですねー」

：ヒエツ

：魔力イコール生命力なのね

：案外シビア

：無理しないでね

：命削ってまで魔性存在倒す必要なくない？

「倒す必要、ですか。多分あると思いますよ？ 波長の合わない人は取り憑かれたら廃人になるかもですし、成長したら人を異界に取り込んで食べちゃいますし。例の231事件も成長しすぎた悪鬼が——」

配信は和気あいあいと進行した。これまで日陰で活動してきた魔法少女の生態に興味を抱いている視聴者たちが多く、小舞は時折検索エンジンの力を借りてポンコツの印象を強めながら、のんびりと質問に答えていく。

好意と好奇心に満ちたコメントの流れが一段落し、小舞はペットボトルを傾け喉を潤す。その音さえにも「助かる」と反応するコメント

に引いていると、毛色の違う文章に目を引かれる。

『あんな化け物と戦える魔法少女も化け物じゃん』

「ほあぁーっ！ 出た出た、出ましたよ！ 化け物と戦えるやつも化け物論者！ 最近見なかったけど山から下りてきたのかな？」

!?!?

：何そのテンションw

：今日一はしゃいでて草生える

：珍獣かな？

：アンチコメは拾わなくていいんじゃない？……

数万人の同時視聴者全員が魔法少女に好意的なはずはない。母数が大きければ大きいほどアンチの数も大きく、それはすなわちアンチの存在こそ人気者の条件と言っても過言ではない。小舞は人気者になった実感にニヤニヤしながら、郷愁の念とともにアンチを歓迎する。

「懐かしいなあ、魔法少女になりたての頃ね、同じようなこと言われてめっちゃ石投げられたんですよ！ だけど残念でした、画面の向こうからは石が届きませーん！ やーいやーい！」

…え

：ちよ、待つて

：どんなテンションだよ

：唐突な激重過去は受け止めきれない

：石投げられた？ は？

「嫌われ者だったんです。なのでたかが文字を投げつけられたってかゆいかゆい！ なんとでも言うがいいです！」

コメントの流れが緩やかになった。前回のようない処理落ちではなく、単に書き込みの数が減っただけらしい。まるでリアクションに困ったように視聴者たちの多くが口を噤んだのだ。

空気の変化を感じ取り眉をひそめる小舞だが、変化した空気はまたも一つのコメントによって修復された。

『シャタードアース様へ 初めましてこんにちは。この度はチャンネル開設おめでとうございます。私は231事件であーちゃん様に命

を救われた者です。あなたは名前もおっしやらずにお勤めへ戻られたので、お礼を伝える手段もなくやきもきしておりました。この場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。配信内容は大変興味深いもので、もし女神様に収益化のご予定がお有りなら、サブスク립ションや投げ銭等で継続的に活動を支援したいと愚考しているのですが、いかがでしょうか?』

「なつつつが!・でも丁寧!・ありがとーどういたしましてー!」

：なげえww

：命の恩を忘れない人間の鑑

：同じ考えの視聴者も多いだろうな

：確かに投げ銭はしたい

：収益化の予定はあるの?

収益化とは、配信者に動画サイトを仲介して金銭を振り込めるようにすることである。投げ銭とも呼ばれるこのシステムにより、人気の配信者は一般的なサラリーマンの年収並の額を一日で稼ぐとかどうとか。

収益化にはチャンネル登録者数などの条件はあるが、すでに小舞はクリアしている。やろうと思えばすぐにもできる提案に対し、小舞はきつぱりと言った。

「収益化はしません!・だってお金振り込んで満足する人いるでしょ?・私はそこで止まってほしくない。お金をくれるその心意気をコメントに変えてほしい。すごい、えらい、かわいいつつつて、全身全霊でチャホヤしてほしい!・だからあえて収益化しないっ!」

：ええ:

：草

：承認欲求の化身

：まあ実際すごいしえらいしかわいいんだがw

：無言スパチャする暇あったらチャホヤしろと

：ある意味収益化するより欲張りじゃねーか!

：だがかわいい

：分かりました女神様!・世界一かわいいですよ!

「ふっふーん！ そうだろそうだろ！ わたしや偉くてかわいくてすごいんだよお！」

薄い胸を張ってふんぞり返る小舞。コメント欄は称賛とお世辞と過去の行いに対する感謝に埋められ、満たされた承認欲求がアドレナリンとなつて小舞の脳みそを痺れさせた。

チャホヤされる人気者はとても気分が良かった。稀に紛れ込むアンチコメントには山から下りてきた害獣を見かけたような感慨しか覚えない。小舞はこのとき、無敵の人気者だった。

「むふふ……お」

!?

：目怖っ！

：あーちゃんの目が急に鋭くなった！

：どうした急に

そのように調子に乗っていても、七歳の頃から続けてきた魔法少女の感覚に陰りはない。異界からのエネルギー流入を感知すると、配信アプリを操作してPCからスマホとアクションカメラへ配信端末を切り替える。

唐突な一人称画面に戸惑うコメントをひとまず置いておいて、小舞は足早に部屋を出て行きながら、

「悪鬼が出たっぽいので雑談はこれまで。高いところ苦手な人は注意です」

魔法少女の勤めを果たしに向かう。なお、発見から戦闘、退治までの流れは昨日とほぼ同じ危ない調子だった。

この日以降、小舞は雑談から戦闘、稀に悪鬼が現れず雑談のみで終了する配信を毎日続けた。凶らずも学校から帰ってきてすぐの時間帯に毎日配信をしたので、興味を持った学生や帰宅途中の社会人など幅広い層が配信を視聴し、世界唯一の「現役魔法少女ストーリーマー」としてチャンネル登録者数は記録的な伸びを見せた。小舞の予想としては数が増えれば増えるほどアンチの数も増えるはずだったが、あにはからんやコメントは好意的なものがほとんどで、二日目配信で見かけたような「化け物」コメントは相当に目を凝らしていないとすぐに

流され見えなくなる有様だった。

たくさんの人々が自分に興味を持つている。必要とされている。存在が承認されている。配信するたびに小舞は心躍った。

そうしてたどり着いた有頂天気分が多少落ち着いてきたある日、小舞はついにかねてからの懸念を口にした。

「あの一、初日からずっと気になってたんですけど。私のこと女神って呼んでる人何人かいますよね。これ何なんですか？」

褒められるのは素直に嬉しいが、さすがに女神呼ばわりは位が高すぎて居心地が悪い。大げさな称賛は下手な悪口よりも気に障る。この辺りは承認欲求をこじらせためんどくさい部分である。

：何と言われてもな

：女神扱い嬉しいだろおん!?

：チャホヤの一種でしょ

：三大女神をご存知内？

：さすがに当事者なら知ってるだろ

「待つて、三大女神？ 当事者ってどういうこと？」

231事件で検索！ とのコメントに従い、小舞はいつもそうするように検索エンジンから語句を調べてみる。検索結果のトップに大手のネット辞書が表示されたので、クリック。

簡潔にまとめられた事件の概要を流し読みしたところで、小舞はやっと合点がいった。

『231事件の概要：2015年2月28日、香楼市に発生した上位魔性存在「魔王」による魔性災害。発生と同時に市全域が存在しない2月31日の異界へ転じたため、231事件と通称される（あくまでも通称であり事件性はない）。市人口190万のうち約180万人が異界化による精神汚染を受けたが、魔王討伐後に回復し、死者はゼロ。全半壊被害は市全域におよび、正確な数は不明。魔王の発生は観測史上2度目。』

発生後およそ一時間で現着したスターシリーズの魔法少女三名が鎮圧にあたり、およそ四時間後に魔王を討伐。献身的な働きぶりがSNSなどで話題となり、主要な役割を果たしたシャタードアース、リ

プロトミーター、フォーレンサンの三名は香楼の三大女神と称された』

「あー、あの戦いかあ。すごかったですよねえ」

：他人事かな？

：小学生並みの感想で草

：なんで当事者が知らないのよw

：ほえーとか言ってるけど女神なんだよなあ

「いやだって、あの戦いの後昏睡状態だったんですよ。二ヶ月くらいだったっけな。病院で目が覚めたらめっちゃ時間経ってて軽く浦島太郎しました」

：昏睡状態!?

：唐突な爆弾発言出た!

：そんなちよつと怪我しましたみたいなのりで

：浦島太郎する（動詞）

「あのときはびっくりしましたねー。身体全然動かないし、お見舞いのサンちゃんが泣き泣きして……それからミーたんが、ミーたん、が……」

言いながら、小舞の意識は過去に飛んでいた。真っ白な天井、壁、風によぐカーテンとやはり真っ白なシーツにベッド。ベッドサイドで大泣きする知り合いを見ていると白衣の男性が駆け寄ってきて、何か質問された気がする。少しずつ意識と記憶がはつきりしてくるにつれ、小舞は息が苦しくなって、胸が引き裂かれたように痛んで――

「あれ……?」

：え

：あれ

：あーちゃん?

：!?

滲んだ視界の中で、ディスプレイがぼんやり光っている。その表面には困惑するコメントたちが下から上へ流れていく様が表示され、その横の配信画面では小舞自身がきよとんと首をかしげながら、とめどなく涙を流していた。

「あつ、やだ、えっと、目にゴミが入ったんで、めちやくちやにデカイのが入ったんで、今日は終わります！　また明日チャホヤしてね！」
予定時間より数分早く、配信画面を閉じる。小舞がしゃべるのをやめると、静まり返った部屋にPCのファンの音が控えめに響く。

配信用のソフトを閉じた画面上には、事件の概要ページがしつこく居座っている。それを見たたん、小舞の瞳から流れる涙が壊れた蛇口のような勢いを得る。

「ひっぐ、ぐす……うえっ……」

寂しいワンルームで嗚咽を漏らす小舞。悲しみに満ちたその声を聞くものは誰も——いや、いた。数万人レベルで聞いていた。

：え、え？　何が起こってんの？

：配信終わってない！

：どうしちゃったんだよ

：泣かないで

：何これ心に来る

激しい動揺で操作を誤ったのだろう、小舞は配信画面を閉じただけで配信自体は続いていた。感情を押し殺すような痛々しい嗚咽が全世界に放送されている。

泣いているうちに終了予定時間を迎え、配信は自動的に終わった。そのため、小舞はやらかしの気づくこともなく泣き続け、やがてデスクに突っ伏して眠りに落ちた。

初配信を超える規模の波紋に、気づくこともなく。

――

幕間：掲示板1

【あーちゃんを】魔法少女シャタードアースを語るスレ【讚えよ】

1：名無しのマスコット
語りたので立てといた

2：名無しのマスコット

乙

3：名無しのマスコット
よくも悪くもインパクト抜群な子だったな

4：名無しのマスコット

承認欲求丸出しなのは若干アレだが、かわいいのでフォローし
た。

5：名無しのマスコット

股間の布が頭から離れねえ

6：名無しのマスコット

お前相当タフだな。俺も股間の布が頭に張り付いてたけど、悪鬼の
見た目で完全に吹っ飛んだ。魔法少女ってまだ子供だろ？ 子供が
あんなバケモンと戦ってんのこの世界？ 世も末過ぎるだろ

7：名無しのマスコット

世も末も何も、有史以来ずっとそうだぞ。協会のせいではほとんど知
られてないがな

8：名無しのマスコット

最初はチャホヤされたたって聞いて笑ってたけど、今は納得だわ。
あんなもんと無償で戦って誰にも知られないとかきつすぎる。

協会はもつと広報に力入れろよ子供の負担考えろよ

9：名無しのマスコット

広報に力入れるは無理な話。

魔法少女が表沙汰になって何が起きたか。兵器利用、人体実験、魔
女狩り、差別

詳しくはこのサイトを見るといい

<https://magicaltruth.com...>

10：名無しのマスコット
うわあ……

これはリアル黒歴史

11：名無しのマスコット

あの頃は世の中全部どうかしてた

今じゃ考えられんよなあ

ってかこんなマイナーサイト知ってるとか

>>9 相当なマニアだな？

12：有識者志望

親戚に隠れ魔法少女がいるってだけ。多少は詳しいからこのスレ
で有識者やりたい

13：名無しのマスコット

有識ニキありがてえ

14：名無しのマスコット

あーちゃんの情報何か知らない？ 調べても231しか出てこな
い

15：有識者志望

シャタードアースとは：スターシリーズの一人。現役最強の一角。
香樓の三女神の一角。固有魔法は「地球っぽいことができる」。経験
は今年で史上最長となる九年のベテラン。

16：名無しのマスコット

九年で。小学一年からあんなのと戦ってたら頭おかしなるで

17：名無しのマスコット

ごめん、そもそもスターシリーズって？

18：有識者志望

数百年に一人現れる、極めて強力な魔法少女。現時点ではシャター
ドアース、リプトミィティア、フォールンサン三名が確認されてい
る。星にちなんだ魔法少女名と固有魔法が特徴。ただし一説には古
代の天文学者が魔法少女名にちなんで星に名をつけたとも言われ
ているので、どちらが先かははっきりしない。

19：名無しのマスコット

数百年に一人なのに三人もいるのか

20：有識者志望

諸説あるが、異界からのエネルギー流入が不安定になってるためと言われている。231事件で魔王が出たのもその影響。

21：名無しのマスコット

細かいことは知らんけどさ。

魔法少女ってかっこよくない？ 女の子がきらきらした光まとつて変身して、恐ろしい怪物と戦って世界を守ってるんだよ？ めっちゃくちや燃えるし萌えるんだけど

22：名無しのマスコット

不謹慎だぞ

23：名無しのマスコット

分かる。俺はあーちゃんのひらひらした腰当ての下の薄い布切れを見て徹底的に推そうと決意した

24：名無しのマスコット

あんな平坦な身体なのにすげーエッチなんだよな……

25：名無しのマスコット

不謹慎不謹慎不謹慎

（以下、ロリコンと有識者と不謹慎BOTの三つ巴）

455：名無しのマスコット

配信二度目！

456：名無しのマスコット

OMGのお墨付きもらったのか。有識者ニキの言った通りになっ
たな

457：名無しのマスコット

バギとデイン系使えるJKは草

458：名無しのマスコット

今更だけど地球っぽいことができるって意味わからんな

459：有識者志望

231事件の目撃情報によると、おそらく天候操作系の能力と思われる。市内に散らばった魔人たちを広範囲の落雷で焼き払ったらしい。もしかするとヒヤド系もいけるんじゃないか

460：名無しのマスコット

有識者ニキ！

461：名無しのマスコット

ごめん、配信とはちよつとズレるけど聞きたい。231事件の『存在しない2月31日の異界』ってどういうこと？ 香樓市が異界化したまでは理解できるんだが

462 有識者志望

バカ やめろ

463：名無しのマスヨ螳滄ト

それはあくまでも便宜上の表現だよ。

俺は実際あの日の被災者だが、向こう側の実際はそんなもんじゃなかった。外では濁流が煩悶して夜が托卵されていたし、しかも色のない原色までとぐろを巻いていた。そのせいで除菌用のシエフが折り目正しく慌ててたよ。

464：名無しのマスコット

>>463はクスリでもやってんの？

465：名無しのマスコット

何これ 文字化けしてんだけど怖

466：有識者志望

今すぐ考えるのをやめろ 深呼吸して何も考えるな

467：名無しのマスコット

螳滄罔縛ゆ？ 譌・縛ヨ陲才輻ス閏？ □縛後？ ∞髓縛薙≧蛛工縛ヨ螳滄罔縛ツ

468：名無しのマスコット

ちよ

469：有識者志望

かわいそうだが、こうなると祈るしかない。

魔王級の異界の情報は、一般人の知覚能力を超えてる。だから言語化しようとする支離滅裂な表現になる。無理な表現を続ければ言語野に負荷がかかって、失語症か廃人コース

470：名無しのマスコット

情報災害かよ

471：名無しのマスコット

OMGはなんでそのことを周知しないんだ

472：名無しのマスコット

被災者全員に周知はしてたぞ。ソースは俺

473：名無しのマスコット

あぶねー死ぬかと思った

474：名無しのマスコット

>>473 発狂ニキ!? 無事だったか

475：名無しのマスコット

下手なこと言うともまたアレしそうだから簡潔に言うぞ。

頭おかしくなってるあーちゃんの配信見てた。かわいい。ちゆき。

って思ってたなら、正気に戻ってた

476：名無しのマスコット

すまん草

477：名無しのマスコット

かわいいは世界を救う

478：有識者志望

魔法少女そのものに反ミーム性があるのかもしれない。もしくは向こう側に同調した魔法少女の言語や価値観をフィルターとして受容することで、狂った知覚機能が修正されたとも考えられる。つまりかわいいは正義だ。

812：名無しのマスコット
うわ、胸糞コメント

813：名無しのマスコット
アンチでテンション上がってて草

814：名無しのマスコット
石投げられたのは意味不明過ぎるな。なんで一般人を守るために戦ってる魔法少女をいじめるんだ？

815：有識者志望
理由はマチマチだろうが、差別があつたのは事実だ。特にあーちゃんが魔法少女デビューしたらしい九年前は差別がひどかつた。

816：名無しのマスコット
妹が魔法少女だったけど、あーちゃんが言ってるのは本当だよ。前はマジで差別やばかつた。魔法少女だからって理由で進学できなかったりな。あーちゃんみたいに配信なんてしたら速攻アンチに潰されて終わってた

だけど三年前の事件で世界が変わったんだよ。魔法少女がどれだけ頑張ってくれてるか、世界が守られているかっていろんな人に伝わった。あーちゃんたちが世界を変えてくれたんだ。

817：有識者志望
ちなみに世界が変わったつてのはガチの真実。魔性存在は人の悪意や邪念で成長して、退治されることで浄化され、思いやりや優しさへ転じる。事件を経て魔王級に発達した魔性存在の悪意が優しさに浄化されたわけだ。

818：名無しのマスコット
あー、なんか納得

819：名無しのマスコット
いつからか、外の空気が全体的にのほほんとしてるんだよな。あれ錯覚じゃなくて優しさとかそういうのだったんか

820：名無しのマスコット
この前、街歩いてたら肩ぶつけられてさ。カバン落としてこの野

郎って思ったんだけど、ぶつかつた人めっちゃ謝つてカバン拾つてくれたんだよ。ほんで多分忙しい人だったのかな、腕時計見てまたダッシュで去つてつた。いや話に関係あるか知らんけど

821：名無しのマスコット

まあ言いたいことは分かる

822：名無しのマスコット

魔王を倒してその影響なら、魔神を倒せばどうなるんだ？ 人類みんな聖人になるのか？

823：有識者志望

魔神は理論上発生しうるってだけだから考えるだけ無駄だぞ。地球に小惑星が衝突するようなもん。もし発生したら詰みと考えるレベル。

824：名無しのマスコット

231超えがありうるってだけで震えるわ

・
・
・

901：名無しのマスコット

さて、衝撃の配信切り忘れだったわけだが

902：名無しのマスコット

なんも言えねえ

903：名無しのマスコット

あの泣き声のせいで涙止まらねえんだわ

904：名無しのマスコット

あーちゃん一体どうしちゃったんだ

905：名無しのマスコット

配信切つたつもりで一人の状態なのに、あんなに声押し殺して泣くか？

906：名無しのマスコット

前の石投げられた発言からうすうす思ってたけど、あーちゃんすげー闇抱えてらっしゃる？

907：名無しのマスコット

JKが一ヶ月と少し配信してる割に、家族の影がまったく見えないんだよな……

908：名無しのマスコット

おいやめろ、やめて

909：名無しのマスコット

あのイキリメスガキムーブの裏に闇なんてない、あつたら泣く

910：名無しのマスコット

イキリメスガキは辛辣過ぎて草

911：名無しのマスコット

まあ真面目にいうと、231事件で辛いことがあつたんだろな。相当な辛いことが。

912：名無しのマスコット

9年間無償で怪物と戦い続けてきたしんどさよりもきつい何かって何さ

913：名無しのマスコット

有識者ニキいる？ 別にこの流れ全然これっぽっちも関係ないけど、231事件であーちゃんの他に関わった二人の魔法少女って、今どうしてるの？

914：名無しのマスコット

フォーレンサンの方は祖国で目撃情報がある。もう一方は不明。

915：名無しのマスコット

あつ（察し）

916：名無しのマスコット

この話止めない？ 配信でも触れないほうがいいと思う。主にあーちゃんと俺らのメンタルのために

917：名無しのマスコット

賛成

918：名無しのマスコット

禿同

919：名無しのマスコット

禿同って死語だと思ってた

（以下、いにしえのネット用語談義）

・ ・ ・

第3話

【タケノコ】魔法少女シャタードアース【狩る】

「はいこんにちは、今回はタケノ後輩どもを狩り尽くしていくよー」

コメント

：配信来た！

：久々リアタイ

：こんちゃーす

：タケノ、なんて？

：また訳のわからんことを

：あーたんハアハア

「ハアハア言うなキモイぞー」

配信開始後数秒でついた熱心なコメントへ率直な罵倒を送ると、助かる、ありがとうございますなどとさらなる手強い反応が返ってきた。あの配信がバズって以来増えた変態共だ。小舞は汚物を見る目でコメント欄を睥睨した。視聴者たちが湧いたのは言うまでもない。あの配信、嗚咽からの配信切り忘れ事件から一ヶ月が経過していた。

泣きつかれて眠った翌日、しょんぼりと肩を落として登校した朝に小舞はクラスメイトたちから失敗を知らされた。

『小舞ちゃん大丈夫？』

『悩みがあるならいくらでも相談に乗りましょう』

『は、何急に。えっ、配信切り忘れ？ はあー』

SNSやネットニュースをエゴサしてみると世界中が小舞のやらかしに注目していた。小舞の涙につられてもらい泣きしたなどの純朴な反応、一人の状況でさえ声を押し殺す抑圧される者特有の泣き方を取り上げるエセ心理学者、魔法少女の過酷な使命と関連付けて小舞のメンタルを勝手に決めつける捏造記事など、小舞の涙から靈感を得た好きものたちが溢れ返っていた。

これらに対する小舞の反応は、

『ほーん』

と、ごく淡白だった。というのも、泣き出した理由に自分でも整理がついていないからだ。心配されるのはチャホヤの基礎の一つなので好物ではあるが、受け止めきれない感情をあげつらって外から何を言われても反応に困る。

よって配信切り忘れの翌日、何食わぬ顔でいつもの雑談や悪鬼退治の配信を再開した。

しかし衝撃的な切り忘れの話題に釣られた新規層には、いつものほほんとした小舞の態度が気に食わない。しつこくコメントでなぜ泣いたのかと聞かれるうち、小舞はキレた。

『だあぁーっ！ うるっさいな生理だよ生理！ 身長と反比例して重い方なんだよ鉛みたいにガツンと重いのが下腹部とハートに圧かけてきてたのよだから泣いたのっ！ これ以上聞いたらお前、デリカシ無し男に改名だかんね？ お硬い役所の連中だつて事のあらましを聞けば大喜びで改名届けに判を押すでしょうよ、えーっ?! けほっ、ごほっ』

以降、聞かれるたびこのようにキレ散らかすので、好奇心旺盛な新規層もこのままでは自分たちの鼓膜と小舞のノドによる泥沼のチキンレースが開幕すると危惧し、質問は控えるようになった。代わりに小舞の見た目を目当てにやってきた紳士たちが目立つようになったのは小舞の誤算だった。

このようにして少々やさぐれた小舞のメンタルに追い打ちをかけるように、後追い勢が現れたのだ。

謎の配信タイトルに困惑するコメントたちに、小舞は配信の趣旨を説明していく。

「タケノコ狩りっていうのはほら、最近魔法少女配信者増えて来てるじゃない？」

：せやな

：人気者のマネをするのはどの業界も変わらん

：みんな個性あってかわいいんだよなあ

「でしょ。だからその雨後のタケノコ共の配信を冷やかしに……もとい参考にさせてもらおうと思って。きつと私にはない面白さや強み

を持っていないはずだから」

：本音漏れてるぞ

：後輩Ⅱ雨後の筍扱いは草

：先駆者なんだからもっと余裕持てよw

「余裕持てるかあ！ 今までは私一人だけ配信してたから人気だったんじゃない！ 他のかわいい子が配信始めたらみんなそっちの方見に行って私いらぬ子になるじゃん！ あわわ……！」

小舞は涙目になって頭を抱えた。お先は真っ暗だ。

小舞が活動を本格化させるのに前後して、同じような顔出し魔法少女配信者がネット上に続出した。小舞のデビューから二ヶ月経った現時点で同業者は三十数名、二日に一人のペースで増加している。魔法少女は世界人口七十億のうちざっと三千から四千程度と試算されており、今後も小舞の商売敵は増えていく見込みだ。

この事実には小舞は絶望した。取り立てて能力のない自分が唯一自信を持てるのが魔法少女の経験と腕前であり、だからこそそれを利用して人気者になるはずだった。しかし他の魔法少女たちは腕前だけでなく、見た目、声、人に自慢できるような趣味や特技など、チャホヤされて然るべき要素をきつと持っている。つまり魔法少女極振りの小舞は見向きもされなくなってしまう。

「お願い見捨てないで……頑張るから、もっと配信面白くするから！

でもロリコンはキモイよ！」

：ネガティブ過ぎるだろw

：だがロリコンテメーはダメだ

：媚びるのか罵倒するのかわどっちかにしろ

：向上心旺盛な配信者の鑑

：あーちゃんはあーちゃんでもしれー女だと思っけどなあ

「まあそんなわけなんで、今日は他の配信者さんの活動を覗きながら今後の活動方針を探っていく感じの、雑談配信になりまーす」

：スンツ

：うわあ急に冷静に

：はいよー

：ありのままの君が好き

小舞は優しいコメント欄に「ありがと」と頬を緩めながら、大手動
画配信サイトの検索ボックスをクリック。「マジカルストーリーマー」
のタグで検索をかけた。小舞のチャンネルを含む魔法少女たちの配
信チャンネルと、現在ライブ中のチャンネルが結果のトップに表示さ
れる。

他人の配信画面が自分の画面に映らないよう配慮した後、ライブ中
のチャンネルをあてずっぽうにクリックした。

『魔法少女、刹羽だ。今日は悪鬼もないので、知人に勧められたこの
ホラゲーをプレイしようと思う』

『魔法少女、フレイムブレイズです！ 名前の通り頭から爪先まで
火属性、推し魔法少女はもちろんフォールンサン様！ 今日ほこない
だのME事件を復習してから魔女狩りの歴史を教えていくよ！ こ
の講義を受けるだけでみーんな知らんぷりのマジカル黒歴史をマス
ターできちやう！ 今日も元気にい、「啓け蒙昧、去ねや無知」！ひ
ひっ、ひひひひひ！』

『にやーんにやにや、にやーん。ゴロゴロ……』

『なんなのこいつら』

：ほんと何なんだろうな

：見た目が濃い

：最後の猫耳娘、喉鳴らしてずっと居眠りしてるんだが

：マジカル黒歴史は面白そう

：でもやってることは普通の配信者とほぼ同じじゃね

コメントの言うとおり、それぞれ個性豊かな外見をしているが配信
内容は普通のストーリーマーと大差ない。ゲーム実況、歴史解説の教養
チャンネル。魔法少女らしく悪鬼退治や魔法の練習などは配信しな
いのだろうか。

疑問に思っていると、代弁するようなコメントが魔法少女「刹羽」の
チャンネルに投げられた。

『シャタードアース氏のチャンネルと比べているのかな？ はつきり
言っておくけど、彼女の配信は誰も真似できないよ』

刹羽はゲーム画面を調整しながら淀み無く続ける。

『ほとんどの魔法少女は、悪鬼と戦いながら配信する余裕がない。魔法の武器でひたすらタコ殴りだからね。氏や僕のように固有魔法を習得すれば話は別だけど、浄化は基本的に泥臭いものなんだよ』

「えっそうなの？」

：そうなの？

：なんで本人が驚いてるんですかねえ

：コメントとシンクロするなw

：固有魔法つてみんな使えるわけじゃないんか

『固有魔法は使えない子の方が多いよ。だから彼女基準で私達を見るのはやめてほしい。カメラに写ってないところで頑張ってるんだくらいに思ってくれ』

小舞は刹羽の配信画面を閉じて、カメラに迫真の表情を向けた。

「私、思ったよりすごいやつだった。ほめて」

：すごい

：えらい

：えらい

：えらい

：すごくない

「天の邪鬼共がコリア許さんぞ！ それと『えらい』に異物混入させてる変態は泣いて詫びろ！」

しばらくコメントと格闘しているうち、小舞は萎れた自信が回復していくのを感じた。

魔法少女の数はいつの時代も需要に釣り合っているとは言えないため、小舞のように単独で強力な魔法少女は同業者たちと没交渉であることが多い。そのため自分の実力について小舞は平均より少し上程度だと思いこんでいたのだが、まさか魔法を使えるだけで稀とは考えもしなかった。

刹羽の評価を聞いた小舞はとたんに偉くなったような気分を覚え、上機嫌にマジカルストーリーマーたちの配信を覗いていく。

「ふんふふーん私ーけっこーすごいー……お、この子かわいいです

ね！ フォローしよ！」

：ただし音程のズレは壊滅的である

：歌ってみた枠は永久にないだろうなあ

：分かりやすい性格してやがる

：趣旨変わってない？

：推しを探す配信になってるなw

調子に乗った小舞は配信の趣旨を見失い、推しの魔法少女配信者を探す配信と化した。脱線は自覚していたが、無理に自分のやり方を変えようとしなくてもいい、と自信を持ったのだ。

小舞は二日に一回程度現れる悪鬼退治をこなしながら、雑談の名目で推しを発掘するための配信を続けた。視聴者たちは新ジャンルである魔法少女配信者の楽しみ方を測りかねているところがあり、小舞の推し探し配信はそのための指標となった。小舞はただ他の配信を見ながらかわいい、面白いとつぶやく程度だが、人気者の言葉には人気者故の説得力が宿る。小舞の無自覚かつ雑なガイドによって新人たちのフォロワーが増え、魔法少女×配信の組み合わせは日に日に一大潮流となつていった。

そうして一ヶ月。夏休みの迫る七月初旬、ネットを震撼させる事件が起きる。

――

『これで映ってるかな？ えっと、こんにちはっ！ 魔法少女デスヘイズといます！ 近くに悪鬼の反応があるので、今日はそれをやっつけちゃいます！』

配信タイトルは【悪鬼】魔法少女デスヘイズ！【倒すぞ！】。他のマジストとは違い悪鬼退治をするらしい。いつかの小舞と同じようにどこかのビルの屋上で、艶やかな黒髪ツインテールを風になびかせている。

いつも通り配信の同時視聴配信をしている小舞は、ほへーと気の抜けた声を上げた。

「まさかあのデスヘイズちゃんが魔法少女だったなんて……」

・まさかだよなあ

・しかもめちゃうにかわいい

・デスヘイズってそのまま魔法少女名だったんだ

・突然の隠れ魔法少女告白は震えた

「つーかおかしくない!? 歌もお絵かきもおしゃべりもできるくせして魔法少女もできちゃうわけ!? スーパーウーマンじゃないずっつる!」

小舞が嫉妬全開にしていると、コメント欄が草と共感の二種で埋められる。

女性配信者デスヘイズは、ネットアイドルの頂点だ。ゲーム実況、雑談、歌、お絵かき、時に作詞作曲もこなすスーパーマルチタレント。人の良さも相まって世界中から人気を集め、SNSで一文字でもつぶやこうものなら数十万単位でいいねを集める。魔法少女以外に才能のない小舞が、憧れと妬みの炎を燃やす典型的な有名人である。

そんな有名人がある日、SNSにこのような投稿をした。

『私は隠れ魔法少女です。今度の配信で詳細をお話します』

隠れ魔法少女とは、様々な理由で魔法少女の力を隠し、普通の人間として過ごす魔法少女のことだ。フォロワーたちはこの投稿に驚きと疑念を覚えた。すなわち、今まで隠していたことをなぜ告白したのか。

デスヘイズのコメント欄にはやはり、その疑念が無数に打ち込まれ激流をなしている。

『やっぱりみんな不思議ですよ。実はあーちゃんさんの配信がきっかけなんです』

「おっ?」

・お

・まさかの名指し!

・有名人に名前が出されたぞ!

・あーちゃんも有名人なんだよなあ

『力に目覚めたのは四年くらい前でした。でもそのときは魔法少女へ

の、その、迫害がすごくて……だから力を隠して、魔性存在にも見て見ぬふりをしてきました。だけど231からちよつと風向きが変わりましたよね』

「ふむふむ」

『そのときから、告白しようかとずっと迷ってて。ふんぎりがつかないでいたら、あーちゃんさんの配信を見かけたんです。あの人を見ていたら、ああもういいんだ、魔法少女として生きてもいいんだって思えた。だから——私はもう、自分を隠しません。これまで見ないふりをしてきた分、精一杯魔性存在を倒します！』

「ふむ、なるほどな」

：なるほどな（適当）

：あーちゃん大丈夫？ ついていけてる？

：とりあえず後方腕組み面しとけ！

「後方腕組み、そうね、うん。正直コメントに困ってる」

小舞は困惑していた。チャホヤさされたい一心で始めた配信にそこまで影響を受ける人がいるとは思わなかった。デスヘイズの戦う決意はどこまでも重く、熱い。のほほんとした小舞とは天と地の差だ。

ひとまず小舞はコメントに言われた通り、腕組みして神妙な顔をしておく。

デスヘイズはカメラの前で握りこぶしを作った。

『今日は初陣です！ 一生懸命頑張るので、みなさん見ていてくださいー！』

「お、お手並み拝見といきましよう」

デスヘイズの身体が輝き、十数秒の発光が収束すると、バトルドレスへの変身が完了していた。

春の陽気を切り取ったようなパステルカラーの着物。ひらひらした裾や胸元にはふんだんにフリルがあしらわれ、帯から下がぼつさり切り詰められているあたり、和ロリの一種だろう。フリルだらけのミニスカは見ている方が不安になるほど短く、白いニーハイとフリルの間の肌色を際立たせている。くりくりした瞳と人懐っこい笑顔、全体的にふわふわしたシルエットは幼気な天使のようで、ニーハイを支え

るガーターの紐、細い首筋に巻き付いたチョーカーなどは、大人らしさよりむしろ背徳感を醸し出している。

天真爛漫で無邪気な外見とは裏腹に、魔法の武器は刺々しい大鎌だった。彼女の身の丈を超える長柄のそれは、柄から刃先までもが白を基調に桜色の霞んだ不思議な色合いをしている。ともすれば日の光の中に霞んで消えてしまいかねない、淡く儂い印象を湛えていた。そんな和ロリの大鎌使いはおもむろにカメラに近づいて、画面が一人称に切り替わった。これから悪鬼を退治しに行くのだろう。

『初めてが一人で大丈夫か、ですか？ 大丈夫、あーちゃんさんや他の配信者さんでたくさん予習しましたから！ もし無理そうなら逃げればいいんです。あつ、でもでももちろん倒すつもりでやりますよ！ しつかり見ててくださいね！』

「畜生この小娘、いかにも純真な感じがかわいいじゃないの……」

：歯ぎしりしながら褒めるんじゃない

：声だけ聞いたら血涙流してる勢いな

：そんな顔しても対比でデスヘイズちゃんがかわいくなくなるだけだぞ

：デスヘイズちゃんフォローしよ

「私の顔面はいつもいつまでもかわいいだろオ!? 浮気しないでお願いだからあ！」

仲良しだと思いこんでいた知り合い以上友達未満の誰かが知らない子と話してるのを目撃したような気分には苛まれていると、デスヘイズはビルから身を投げた。小舞のような壁蹴りではなく普通に膝を曲げて着地し、暴走自転車程度の速度で町中を駆ける。最初屋上にいた意味は特になかった。

ほどなく足を止め、何もない宙空を凝視するデスヘイズ。

『……かな……いたー!』

彼女がこわごわ伸ばした手先が消失する。よく見ると、空間の裂け目に指先が滑り込んでいる。そのまま腕が、次に身体とアクションカメラが吸い込まれ、色のない異界へと世界が変貌した。

：あーちゃんのとくと手順が違うな

：必ず誰か取り憑かれてるんじゃないの？

「場合によりけり。憑きやすい人がいなくなったら憑く前に見つかる場合もありま——あつ、これは」

小舞は後方腕組み先輩面を忘れ、素の声を出して画面を凝視した。デスヘイズが飛び込んだ先の異界には、当然その空間の主であり魔法少女の敵でもある悪鬼がいる。小舞が嫌な予感を覚えたのはその性質だった。

『うわ、気持ち悪い……』

その悪鬼は一見、ピンク色の肉塊だ。しかしよく目をこらせば、人の腕ほどの太さがある数え切れないほどの触手が塊になっっているのが分かる。触手の表面からは得体のしれない粘液が滴っており、触手の一本一本が時折出来の悪い臓物のようにうねうねと蠕動していた。色を失った街の建物と比較するとせいぜい二階に届くかどうかという比較的小柄で、触手塊の中央では触手たちが集合してユニコーンの生首を象っている。しかしその口と眼窩から突き出した触手がうねうねしているため、幻獣らしい威厳よりもひたすら悍しい印象を見るものに突きつける。

「ホーニータイプ、強敵ですね。これはたいへんです」

：きしよい

：強いのか？

：いつもと色が違うな

：あーちゃん配信で慣れすぎて特に気持ち悪いとも思わなくなってきた

：この見た目で強敵なのか

：ホーニー？ タイプ？

悪鬼の危険度やタイプについてはすでに説明済みだが、配信の初期にやったきりだ。小舞は新規層向けにもう一度講義を始めた。

悪鬼は異界から流入したエネルギーが人の悪意や邪念と結びついたものである。最初にどのような悪い意志と結ばれるかによって、悪鬼は異なる成長を遂げる。この成長のバリエーションを人類の悪念ごとに区別したのがタイプだ。もっともありふれたタイプが憎悪ヘイトレッドタイプであり、配信で小舞が何度も倒している黒い触手を指す。その

他殺意、嫉妬、渴望などと変化に富み、中でも上から二番目に厄介なのが劣情——ホーニータイプである。

と説明している間に事態が動いた。

悪鬼がなめくじみたいに接近しながら、触手を一本デスヘイズへ伸ばす。

『あれ？　なんか遅い』

しかし触手に勢いはない。デスヘイズが大鎌を振るうと、あっさり切り裂かれ光の粒子へ変わる。その後、またも触手が伸び来たるがやはり簡単に迎撃された。

『これは楽勝かもしれません！　ううん、楽勝です！　この悪鬼ごく弱いですよ！』

「えっ、ちよ、この子もしかして知らない!?　予習したんじゃないの!?」

：見た感じ楽勝そうだが

：見かけ倒しやなー

：あーちゃんは何を慌ててんの？

「待って待ってやばい、コメントコメント！」

逃げる。たった三文字を打ち込む暇もなく、デスヘイズは駆け出した。

一人称画面があつという間に悪鬼の巨体で占領され、その身体に大鎌が食い込む。白い大鎌はきれいな半月状の弧を描いて悪鬼を真っ二つに切り裂いた。

画面が揺れ、自撮りのような画角が変わる。デスヘイズの上気した笑顔と、背景には仕留められた悪鬼の身体があつた。

両断されたピンク色の触手たちは、うぞうぞとミミズみたいにのたくって、デスヘイズの背後へ迫っている。

『やったやった、やりました！　簡単に倒せました！　えっ、逃げる？　心配してくれたんですね、でも私は大丈夫！　だってほらこの通り

——きやあっ!?!』

この通り、と振り返った瞬間デスヘイズは触手に絡め取られた。

『やだ、なんで、倒したのに……んひっ!?!　へ、変なとこ触らないで

……っ!』

華奢な両腕は頭上でひとまとめに、ニーハイソックスに包まれた細い足は左右へ開かれ、屈辱的な格好で宙吊りにされるデスヘイズ。粘液塗れの触手がミニスカートの下へ潜り込むと、彼女はびくり震えて弓なりに体を反らせた。

『いや、いやあっ!? やだやだ離してっ!』

必死で身を振るデスヘイズだが、悪鬼は意にも介さない。遅れてやってきた本体——ユニコーンの頭部を模した触手の塊が、翔るようにゆつくりとデスヘイズへ迫る。

『ひ……!?!』

デスヘイズが引きつった悲鳴を漏らすと、ユニコーンの眼窩と口腔から触手が伸びた。先端にはイソギンチャクを思わせる細かな繊毛が蠢いている。

計三本の触手のうち、二本はフリルをあしらった胸元へ、もう一本は太ももから徐々に上へと迫り始める。さらに並行して、四肢を拘束する触手から粘液が滴り、かわいらしい和ロリのバトルドレスが音を立てて溶け出す。

小舞は顔をしかめ、考えをまとめながら口を動かす。

「ホーニータイプの核は劣情……要はすけべ心ね。魔法少女を殺すことは基本なくて、ひたすらエロいことをしてくる。それだけでも女の敵だけど一番たちが悪いのは——憎悪や殺意タイプよりはるかに狡猾で強力だったこと」

たとえば経験の浅い少女を油断させて捕らえ、辱めを与える程度には。

バトルドレスの下で触手が卑猥にくねり、頼みの綱である衣装さえ少しずつ剥ぎ取られていく。未発達な細い手足は触手に絡め取られ、抵抗はできない。

絶望のどん底に落ちたデスヘイズは、そこでようやく地面に落ちたカメラに気づいたのだろう。涙を流しながら息も絶え絶えに、口を動かした。

『誰か、助けて……!』

「このチャンネルは、利用規約に違反しているため凍結されました」

ブラックアウトした画面に、無機質な文字列が表示された。

いわゆるBANだ。この配信サイトは性的な配信を禁じている。通常は何度か警告を経るはずだが、女子中学生程度のデスヘイズが触手に辱められる絵面は、警告を通り越した一発凍結が妥当だとガイドラインに判断された。たとえどんな事情であろうと、登録者数百万超えの人気チャンネルであろうと、ルール違反はいけないことだ。

：放送事故だああ

：これ洒落にならないんじゃないの

：タイムミングおかしいだろ

：おい不謹慎だぞ

：不謹慎厨は死ね

「ツスー……」

にわかに荒れ出したコメント欄を尻目に、小舞は深呼吸。

「急用思い出したから今日はここまでね。ばいばーい」

感情のない淡々とした声音で終わりを告げ、配信アプリを操作して今度こそ間違はなく配信を切った。マイクだけ入っているなどということもない。完全に衆人環視からは離れた状況でスマホを取り出し、迷いなくダイヤルする。

相手も待ち構えていたのだろう、ワンコール目の途中でつながった。

あいさつもなく、きつぱりと言う。

「デスヘイズの情報を頂戴」

老婆の声は間髪入れず、

『あなたならそう仰ると思っていました』
と答えたのだった。

――

OMG、魔法少女協会の役割の一つに、魔法少女の教育がある。悪

鬼の種類、戦い方、魔法の使い方、チームの組み方など、対魔性存在戦において必要なノウハウを授ける。魔法少女たちはこの知識にもとづいて日々の戦いを切り抜ける。

が、協会とて全世界すべての魔法少女たちを把握しているわけではない。特に公然と変身しない隠れ魔法少女は協会から認知されず、もちろん教育の支援も受けられない。

デスヘイズはその一人だった。敵うはずもない強敵の知識がなかったために油断し、捕らえられた。悪鬼退治を配信するほど余力のある、シャタードアースのような例外を見慣れていたことも影響しているだろう。

ホーニータイプの恐ろしい悪鬼は核となった劣情に従い、デスヘイズが衰弱死するまで彼女を嬲り続ける。異界に取り込まれたデスヘイズの身体は世界から抹消され、法的には行方不明として処理される。

「や、だ……!」

誰も知らない場所で一人、怪物にいじめられて死ぬ。絶望の未来を悟ったデスヘイズは、氣力を振り絞って四肢に力を入れた。

すでに何時間経ったか分からない。身体の弱い部分から送り込まれた刺激で頭がぼうつとして、下半身の感覚が曖昧だ。粘液塗れの身体は全裸に近く、全身がぬめりけに覆われている。

このぬめりけを利用すれば、うなぎみたいに触手から抜け出せやしないか。一縷の望みをかけてデスヘイズは手足を動かすが、

「むぐっ!」

触手が口をこじ開け、喉の奥まで突っ込まれた。反射的に身を丸めてえづきそうになるが、拘束されているためそれもできない。海老反りになって身体を痙攣させながら、デスヘイズが涙を流す。同時に身体の敏感な部分へと再び触手が集り始め、デスヘイズのささやかな希望は打ち砕かれた。

涙ににじむ視界の中で、走馬灯のように半生がよぎる。

彼女が魔法少女になったのは四年前のことだった。何の前触れもなく突如変身能力を手に入れた彼女は、仰天した両親に魔法少女のこ

とを教わった。魔性存在と呼ばれる悪い怪物たちと戦う力なのだ。まるで物語に出てくるヒーローのようで心が躍ったが、疑問も湧いた。そんなに素敵な魔法少女のことがどうして広く知られていないのか。

その疑問に答えたのは、悲しげに顔を歪める彼女の母親だった。

『こつちに来るな化け物！』『薄汚い魔女め！』『お前の家系は呪われている！ 魔法少女なんてみんなそうだ！』

魔法少女は迫害にさらされている。元魔法少女の母親はかつて口汚く罵られ、石を投げられ、火にかけられそうになった。だから魔法少女たちは力に目覚めても魔性存在と戦わず、力を隠して生きることが多いという。

人類の敵たる魔性存在と守護者たる魔法少女は、その強大な力のルーツが異界であること、力の作用する原理が全く不明である二点で共通していた。魔法少女と魔性存在はしばしば混同され、差別の対象となった。

不幸なことに、彼女が力に目覚めたことはすぐに噂となつて広まった。彼女は通っていた小学校を止め、別の学校へ。力は出来る限り隠していたが、不思議に噂が広がり予定調和的にいじめを受けた。のみならず父親は魔法少女の娘を持っているからという理由で解雇され、家計を支えるため仕事を探す母親は魔法少女の母親だからと就業を何度も断られた。

とたんに家は貧しくなった。両親はくたびれた顔をしていることが多くなった。幼心にそれが自分のせいだと悟った彼女は、泣きながらごめんなさいをした。

しかし両親はそこごめんなさいを受け取らなかった。

『バカ野郎！ 何も悪くないのに謝るな！ いか、魔法少女は人類を守る希望だ！ 魔法少女がいるから世の中平和になつてんだ。お前は希望の力に目覚めたサイツコーの娘だ！ 自慢の娘だ！ お前のためならどんな苦労もご褒美だこのヤロー！』

だから胸を張れ、恥じるな。今は世の中の歯車が狂ってるからみんな意地悪なだけだ、と両親は結んだ。

それからというもの、彼女は堂々とデスヘイズとしての活動を始めた。ただし魔法少女ではなく、クリエイターとしてだ。

インターネットはクリエイターに対して、とても平等な空間である。誰の作品であろうと、不特定多数の需要と感性に合いさえすれば高く評価され、もてはやされる。魔法少女だからというだけで蔑まれる現実とは対極だ。

彼女は罵られるたび、綺麗な文章を紡いだ。華やかな歌詞とメロディを奏でた。醜い現実には打擲されるたび、美しくきらびやかな絵をものした。平等に評価されたそれらが人を呼び、人気者の『デスヘイズ』が誕生した。声のみの生配信なども行い、デスヘイズを知らない者のほうが少なくなった。

しかし彼女は満たされなかった。いくらデスヘイズが評価されようと、それは逃避のために生み出した架空の自分に過ぎない。現実の自分はず変わらず悪意におびえ、正体を隠したまま。ネット上で評価されればされるほど、彼女のアイデンティティは空虚になっていくようだった。

風向きが変わったのは三年前だ。

231事件と呼ばれる、魔法少女の関わる大きな事件というか、災害が起きた。事件はデスヘイズの知らないどこかで解決されたが、ここでの魔法少女の活躍が広く報道され、魔法少女は一躍社会的な英雄として祭り上げられることとなった。

その影響はまず、学校でのいじめがぱったり途絶えたことで始まった。同級生たちは気まぎれな顔でデスヘイズに声をかけ、傷ついた机は新しくなり、持ち物が勝手になくなることもなくなった。父親は窓際族から重要ポストへの異動を命じられ、母親はパート・アルバイトの面接で厚遇されるようになった。

世界が変わった。狂った歯車が修正された。それを成し遂げたのはスターシリーズの魔法少女たちだろう、と父親は言っていた。

顔も名前も知らないスターシリーズの魔法少女たち。香楼市に住まう百七十万の命を救ったヒーロー。いつか直接会ってお話をしてみたい。デスヘイズはスターシリーズに憧憬を抱いていた。

そんな彼女が意図せず英雄の一人に出くわしたのは、ネット上だった。

『私たちがどんなに頑張ってるか知ってもらいたい、褒めてもらいたい認めてもらいたい!』

シャタードアース。そう名乗った少女が語る子供っぽい欲求に、デスヘイズは心を打たれた。

シャタードアースは存在を認められたい。デスヘイズも同じく、リアルな魔法少女としての自分を認められたい。

シャタードアースが配信のたびチャホヤされるのを見るにつけ、その共感は強まった。存在を承認して、という強い欲求。

先んじてシャタードアースのマネをし始めた他の魔法少女たちを知ると、ついにデスヘイズも心を決めた。存在を認められたい。そのためにはまず、隠れるのをやめなければいけない。

長年隠れてきたのを止める一大決心を経て、ついに初陣を迎えた。

その末路がこれである。

「う、ううっ、うええっ」

見たこともないピンク色の悪鬼に反撃され、捕まって恥ずかしい思いをさせられている。チャームポイントの黒髪ツインテールはほどけ、自慢の黒髪も粘液まみれ。大好きなかわいいバトルドレスは無残に溶かされ、体中の感覚も溶けていくようだ。

魔法少女としての自分をずっと抑え込んできた。いじめられても両親に迷惑をかけても、心細くて消えたくなりたい時があってもくじけなかった。やっと自分をさらけ出す覚悟をした。

その結果がこれなんてあんまりじゃないか。

「ぶはっ、けほっ、ごほっ」

デスヘイズの口から、乱暴に触手が引き抜かれた。喘ぐように咳き込んで、ヨダレと涙をとめどなく流しながら、彼女は全身を触手が這い回るのを感じる。責め苦はまだまだ終わらない。

デスヘイズは無駄と知りながら、心からの思いを口にした。

「助けて、誰か、助けてよお……」

「はいよう」

思いがけず答えたその幼い少女の声は、果たして幻聴だろうか。デスヘイズが疑問に答えを出すよりも早く、彼女を拘束していた触手が突如破裂し、身体が宙に投げ出される。

わずかな浮遊感の後に感じたのは落下の痛みではなく、肩と膝裏をふわりと支えられる感触だった。

誰かが助けに来てくれた。かろうじてそう判断すると張り詰めた精神が緩み、一気に意識が遠のいていく。

せめてその誰かを一目見てから、と渾身の力を首をもたげ、自身を横抱きにする人物へ顔を向ける。

そこにあつた彼女の顔に焦点が合うと、デスヘイズは息を呑む。

「……………」

世界一子供っぽい英雄。デスヘイズが憧れる世界の变革者が一人。

「もう大丈夫」

魔法少女、シャタードアースがそこにいた。

――

デスヘイズが安らかな表情で気絶した直後、小舞にピンク色の触手が踊りかかった。正面からの攻撃に当たる道理もなく、あっさりとステップで回避しつつ距離を取る。飛散した粘液の一滴さえも見切った回避行動だった。

目測三十メートル程度の距離を置いて小舞と悪鬼がにらみ合う。小舞はさして気にせず視線を外し、デスヘイズの状態を確認した。

溶けかけた下着だけを身にまとったデスヘイズの身体には傷一つ付いていない。小舞がOMGの協力の下県を三つまたいで駆けつけるまでに一時間以上は経っているが、今回の悪鬼はことさらねちっこい趣向が核になっているらしい。不幸中の幸いだった。

ただ、それだけの時間屈辱を受け続けたのを考えると、小舞のハラワタが煮えくり返る。

「女の敵があ……欠片も残さん」

悪鬼は生き物ではないので怒っても仕方ないと分かってはいるが、

理屈で抑えられないのが感情というものだ。

デスヘイズの身体を地面へゆつくりと横たえ、手で宙を払う。光の粒子と共に長柄のハンマーが現れ、同時に悪鬼が仕掛けた。

悪鬼の身体から幾条もの触手が伸びる。上位次元存在たる悪鬼は物理法則を部分的に無視できるため、触手の射程はキロ単位で長い。濁流のようなピンクの肉塊が、二人の少女を飲み込まんと迫る。

正面から伸び来る三本は陽動だった。後ろから続く触手たちはくねくねと直角に鋭角にと複雑な軌道を描き、陽動触手の影から本命となつて少女たちに接近していく。フェイントの触手が小舞の手前の地面を削つた。幾本かは小舞たちを追い越し、後方でターンを決めて死角を抉るように突く。前後左右あらゆる角度から、技巧的なフェイント混じりの触手たちが小舞を絡めとる——

「見えてる、と」

かに見えたが、小舞の腕とハンマーが突如消失。コンマ数秒後には残心姿勢の小舞がぴたりと静止しており、周囲の触手たちも動きを止めていた。続いて小舞が姿勢を戻すと共に、すべての触手が水風船のごとく破裂する。

小舞がしたことと言えば単純で、迫りくる触手のすべてをハンマーで叩き落としたに過ぎない。ただし瞬きの間に数百もの触手軌道を見切り、的確かつ必殺の打撃を繰り出した点だけが、無茶な迎撃を成功させた秘訣である。

触手の飛来が止んだ。見ると、悪鬼は身体を痙攣させて新たな触手を生み出そうとしているところだった。

ホーニータイプの悪鬼は他のタイプと比べても桁違いにタフで、真つ二つに切り裂いたり触手の大部分を破裂させたりした程度ではすぐに復活してしまう。これを倒すには大火力で消し飛ばすのが一番だった。

小舞はくるりとハンマーを回し、柄頭を地面に突き立てる。身体から光の粒子が立ち上り、小舞の固有魔法が発動した。

固有魔法、地球っぽいことができる能力。視聴者たちの間では「大雑把過ぎる」「天候と土を操る感じ？」などの苦笑や推測の的になつて

いる魔法だが、小舞はこの力をうまく説明できる自信がない。というのも、出来ることが多すぎてなんとなく「地球っぽい」と表現するしかないからだ。

ただ、本人さえ把握できないほど多様で凶悪な能力であることは確かだった。

「理科の実験じゃーい！」

バカみたいな掛け声と共に、悪鬼の周囲の空間へと意識を集中させる。不可視の

大きな力——大気圧を完全に掌握し、意のままに動かしていく。

本来は熱や気象条件によって発生する低気圧。それを魔法という理不尽な力で無理やりに、悪鬼の身体を中心にした狭い範囲に作り出す。悪鬼の身体は擬似的な真空に近い極端な低気圧に包まれ、同時に周囲の気圧を局所的に高め、気圧傾度を極大化させる。

そうして低気圧を保ったまま、高気圧の方の制御を手放してみると

「ぶち・サイクロン」

悪鬼の身体がバラバラに弾け飛んだ。

数センチ角の肉片が飛沫となってモノクロの空を彩り、ほどなく光の粒子となって消えていく。再生能力の優れた悪鬼はこのように、火力で瞬殺するのが常道だ。

破壊は悪鬼だけでなく周囲の異界にも及んだ。色のないアスファルト舗装がかさぶたのごとくめくれ上がって、その下に露出した土も吹き飛びクレーター状の凹みが形成された。雑居ビルの窓が残らず砕け散ると共に、窓枠が壁面の一部ごと吹き飛んでいった。

「異界だからセーフ」

小舞は言い訳するように呟く。怒りのあまり出力が大きくなりすぎた。

小舞が発生させたのは、極小規模の台風だった。高気圧から低気圧へ空気が流れ込むことで発生する自然災害を、魔法の力で人為的に発生させた。範囲を限定した分吹き込む風の威力はすさまじく、最大瞬間風速は無慮数百メートル毎秒。その上異界の性質上コリオリの力

が歪んでいるので、時計回りと反時計周りの破滅的暴風が荒れ狂い、巨大ミキサーとなつて悪鬼の身体をミンチへ変えたのだ。

「うーん……」

「つと、大丈夫？」

念の為油断無く周囲を警戒していた小舞は、苦しげなうめき声に振り返る。怖い夢でも見ているのか、デスヘイズが細い身体をかき抱いて、顔色を悪くしている。

ケガはないようだが、一応病院に運んでおくべきだろう。小舞は変身を解いて、デスヘイズの身体にかけるものを探す。しかし慌てて出てきたせいで何も持っていない。

「もうこれでいっか。よーしよしよし、もうやっつけた、大丈夫だよー」

「ん……」

思い切つて普段着のスウェットを脱いでかけてやり、頭を撫でていると顔色がましになった。しばらく撫でているとデスヘイズは静かな寝息を立て始める。

小舞はデスヘイズを抱えて元の世界へ、戻ろうとしたところで変身後の姿でなければ力不足で運べないのに気づいて、決まり悪そうに変身。やっとデスヘイズを抱えあげて、異界を出て行った。

――

【悲報】魔法少女デスヘイズ、デビュー初日に死亡ww【触手プレイ】

『有名配信者、悲劇の初陣』

『配信サイト運営が協会に苦言』

「おー、沸いてる沸いてる」

午後四時、病院のロビーにて。診察を待つ患者や見舞い客などが入り交じる中、小舞はのんきにスマホをいじっていた。

デスヘイズの容態は問題ない。意識を失っているのは疲労困憊によるもので外傷や取り返しつかない傷はなく、じきに目を覚ますだろうと診察された。協会の息のかかった腕利きの医者が言うので間

違いはない。

であればさっさと地元へ帰ろうと踵を返したのだが、ふと気になってネットの反応を調べているのが現状である。

さすがに元々有名な配信者だけあって、デスヘイズの致命的な失敗は多くの話題を呼んでいた。チャンネルがBANされる直前の彼女のあられもない姿が匿名掲示板に出回り、不謹慎だけど抜ける、エロいなどと盛り上がっている。小舞はその無神経さにむっと眉を寄せつつ、確かにエロいのは事実だから端末に保存してクラウドにもバックアップを取っておいた。

「私はひどいやつだ……」

小舞は自嘲気味に笑った。目の当たりにしたピンチに思わず飛び出してきておきながら、超有名配信者の大失態に心のどろろが浮足立っている。人の不幸を喜んでいるのだ。小舞は魔法少女だが、凡俗な小悪党でもあった。

小悪党はそんな自分を恥じることもなく、堂々とベンチから立ち上がり出口へ向かった。ここから地元までは電車で三時間かかる。往路は協会にヘリを飛ばしてもらったが、あまり借りは作りたくない。

そうして病院を出ようとしたところで、白衣の女性が小走りに近づいてきた。よく見ると、それはデスヘイズの容態を診察した女医だ。

「ああ、いたいた！ アースさんたいへんです、彼女が！」

「え、ちよ、なんですすなんですどうしたんです？」

「とにかくたいへんなんですよ！　すぐに彼女のところへ来てくださーい！」

女医は一方的に告げると、エレベーターホールの方へ向きを変えらる。小舞は血の気が引くのを感じながら後に続いた。

まさか容態が急変した？　それとも意識を取り戻したとたんパニックで暴れまわっている？　悪い想像が頭をよぎっては消えていく。女医に問ただそうにも怖くて聞くことができない。

早鐘を打つ心臓に急かされるように個室の病室へ転がり込む小舞と女医。果たしてそこにいたのは――

「あつ、あーちゃんさん！　やっぱあーちゃんさんが助けてくれた

「んですねっ！」

「え？」

健康的な顔色でベッドに上体を起こしている、デスヘイズだった。一応患者衣だが血色も声音も雰囲気も健康そのものに見える。たいへん、と表現するような状態には到底見えない。

女医へ視線を向けると、彼女はしれっと答えた。

「デスヘイズさんがあなたにお礼を言いたいと。ですが普通に引き止めても面倒臭がつて会わないだろうと会長がおっしゃるので、一芝居打ちました」

「汚い！ 大人きつたない！」

「私は会長の助言に従ったまです。ではごゆっくり」

女医は仕事は済んだとばかりそそくさ退室していった。あの死に損ないババア、と小舞が電話越しの老婆へ怨念を飛ばしていると、デスヘイズがしよんぼり肩を落とす。

「ごめんなさい、私が会いたいなんて言うから……迷惑、でしたか？」

「あーいや、ごめん、迷惑じゃあないよ。座つていい？」

小動物めいた美少女に上目遣いで迫られ、突っぱねる小舞ではなかった。了承を得てスチール椅子を引っ張り出し、腰掛ける。

同時に、小舞の小さな自尊心がむくむくと鎌首をもたげた。何も言わず去るつもりだったが、事ここに至ってはお説教でもして先輩風を吹かせたい。

その内容をまとめ始めたところで、デスヘイズが頭を下げる。

「あのっ、助けていただいて本当にありがとうございます！ 佳住^{かすみ}しえつて言います。あのあの、あーちゃんさんの配信はいつも楽しく見させてもらってます！」

「カス・みしえ？ 芸人でももつとマシンな名前でしょうに」

「かすみ・しえですっ！ 滑ってる芸名みたいに言わないでください！」

「ご、ごめん。私、奏地です、はい」

ありがとうとごめんの間断なき応酬。奇妙なやりとりに小舞は首を傾げ、デスヘイズ改めしえはくすりと笑みをこぼした。

「優しいんですね。気を遣って冗談を言ってくれるなんて」

「ま、まあね」

まさか素で間違えたとは言えず、鷹揚に頷いておく。

するとしえはおずおずと、慎重に伺いを立てるように続けた。

「あとう、その優しさにつけ込みみたいでアレなんですけど……」

「うん？」

「私を助け出すところ、奏地さんのチャンネルで配信しました、よね？」

できればそのときのアーカイブを残さないでほしいなって……」

「は？ してないしてない、するわけないでしょ配信なんか」

「えっ」

「えっ？」

二人はお互いに呆然とした。

アーカイブとは生配信の録画だ。配信が終わると自動的に配信サイトのサーバーに保存されるが、配信者側で削除することもできる。

しえはそのようにしてほしいらしいが、そもそも小舞は救出劇を配信していない。

しえは目をぱちくりさせて首を傾げている。

「どうしてですか？ チャホヤされたいんですよね？ やらかした私を助けるどころなんて、すごくおいしいシチュエーションだと思うんですけど」

「はあく？ 何言ってるのあんた？」

しえの意図を理解した小舞は、機嫌を損ねた。

「確かに私はチャホヤされたいし注目もされたい小者だよ？ だけど人の失敗やピンチをネタにしてまで人気者になるなんて、なんか、こう、違うじゃん。気持ち悪いじゃん。そーゆーのは私の好きなチャホヤじゃない」

明確な言葉には出来ないが、要は気持ちの問題だ。悪者に捕まってもあられもない姿を晒している女の子を助け出すのは確かに映像として映えるだろう。画角を調整すればガイドラインギリギリの絵面で配信することもできただろうし、更なる人気の呼び水になったかもしれない。

しかしそれはなんかイヤだ。なんか違う。この美学とも呼べないちつぽけな感性があるからこそ、小舞の承認欲求はややくしく面倒くさいのだ。

しえはしばし遠い目をしながら小舞の言葉に聞き入り、やがて熱っぽい目を小舞へ向けた。

「すごいなあ……」

「何がよ。ええい、もうこの勢いで言いたいこと全部言うからよく聞けい」

「は、はい！」

続けて小舞は先輩風を吹かせることにする。立ち上がって胸を張ると、しえは真剣な顔で背筋を伸ばした。

「デスヘイズ！ あなたは誰か魔法少女の知り合いはいる？ 経験豊富で人柄も信頼できるような人がベスト」

「……います！ 一人だけ！」

「えっ、いるの!? じゃあその人に連絡取って弟子にしてもらうよう頼みなさいっ！」

「弟子ですか!？」

「そう！ 私だってなりたての頃は師匠がいた！ 協会は知識だけ優秀だけど、結局現場で手とり足取り教えてくれる師匠が一番なんだよ！」

魔法少女協会は移動手段や情報源としてかなり有用だが、異界の中で魔性存在と戦えるのは魔法少女だけだ。今回のような失敗を繰り返さないためにも、誰かに師事するのが安全——と、その時小舞は思い出した。

「いやその前に、魔法少女続ける？ 別に戦う義務はないわけだけど」

「続けます、もちろん！」

「あ、そう」

隠れ魔法少女が存在するように、魔法少女に戦う義務は一切ない。今回の失敗に懲りて、魔性存在に目を瞑り魔法の力を使わないようになるのも選択肢の一つだった。

それを言下に否定されたので、小舞は微笑を浮かべて踵を返す。言

うべきことと言った。

「じゃ、その頼れる魔法少女さんによろしく。頑張ってるね」

「はいっ！ よろしくお願ひします、おししよー！」

「ん？」

「え？」

しえはベッドの上で正座して礼儀正しく頭を下げた。

何かがズレている感覚。こわごわと頭を上げたしえと目が合い、小舞は困ったように笑う。しえもにへら、と笑った。

「えつと……なんで私によろしくを？」

「だって、経験豊富で頼れる魔法少女の知り合い、ですよ。まさにおししよーのことじゃないですか」

「知り合い!? 知り合いだったの私たち!?!」

「はい、お互いに自己紹介しました！」

なるほど確かに、と小舞は納得した。顔を合わせて名乗りあえば友達とはいかずとも知り合いの基準は満たせるのかもしれない。

「や、でも……私の地元、ここから電車で二、三時間はかかるよ？ 協会のヘリがあるにしてもいちいち通うのは……」

「そんな遠いところから助けに来てくれるなんて……!」
感極まったようにうるうる震え、しえは小舞の手を両手で握った。

た。

「じゃあじゃあ、引越します!」

「学校とかは」

「どうせ友達いないんで平気です!」

「ご両親は」

「ダダをこねます!」

「ふむ」

しえの回答は無茶苦茶だが歯切れは良い。その溢れ出るやる気に若干押されてか、悪くない、と小舞は思い始めた。

というのも、配信チャンネルのマンネリ化が念頭にある。今のところ雑談と悪鬼退治、推し探しの三つしかコンテンツがないのは娯楽としてまずい。雑談はいずれ話すネタが尽きるし、悪鬼は圧倒的火力で

瞬殺ばかりなので絵面が心配だし、推し探しはそもそも他の魔法少女たちに塩を送るような内容だ。何か魔法少女シャタードアース独自の面白さが必要だった。

そのための新しい取り組みとして、弟子を育成する。弟子の成長を通して魔法少女のイロハを発信すると共に、自分は師匠扱いされて気分がいい。

たちの悪い小者思考に染まった小舞は、意地の悪い笑みを浮かべる。

「おししよー?」

眼前には、人形のように整った小顔を無邪気に傾げるしえがいる。彼女はわずか三年足らずでネット上を席捲した有名人であり、小舞が日夜嫉妬の炎を燃やしていた相手だ。そんな彼女に師匠扱いされるのは、気持ちが良い。

「弟子かあ。ああでもどうしよっかなー私も忙しいしなー」

「そ、そんな！　お願いです！　私、おししよーのためなら何でもやりますっ!」

「あーっ、よしおっけー満足した！　よろしくマイ弟子！　なんでもかんでも手とり足取り教えてあげるからねえ!」

「ひゃあ!」

大満足の小舞は、しえを熱く抱いて頬ずりした。困惑気味のしえも次第に口角が緩み、ふにやりと相手を崩してされるがままになる。

無垢な少女が一人、最低で最強な魔法少女の門下に入った。

幕間：掲示板2

魔法少女配信スレPart 2

1 名無しさん@マジカル

近頃話題の魔法少女ストーリーマーを愛でるスレ

荒らし、差別は即NG。

前スレ<https://zensurenourl...>

次スレは>>970。

2 名無しさん@マジカル

いちおつ

3 名無しさん@マジカル

乙

みんなもう推しは決まった？

俺は王道をいくあーちゃん！

4 名無しさん@マジカル

決めかねてる。

まだ切り抜き動画は少ないからそれ次第だな。

5 名無しさん@マジカル

フレームブレイズちゃんかな。常に炎上(物理)してる分かりやす

いバトルドレス好き

ブラツクな歴史解説もすここ

啓け蒙昧！

6 名無しさん@マジカル

刹羽ちゃんのもふもふ羽ドレスすこ。

ホラゲー実況だけじゃなくて悪鬼退治の配信してるところも評価

したい

7 名無しさん@マジカル

お前らさてはあーちゃんのタケノコ配信見てるな？

8 名無しさん@マジカル

なぜバレたし

9 名無しさん@マジカル

毎回ジャンルの違う魔法少女に因縁つけてくから期待の新人見つけやすいんだよなー

浮気しないでと言うくせに、なんで他の子の魅力伝えまくるんだろ
うか

10 名無しさん@マジカル

何も考えてないに一票

11 名無しさん@マジカル

あの子は脊髄に喉がついてる

12 名無しさん@マジカル

脊髄に喉はもはやただのバケモン

きつと同じ魔法少女同士でパイの奪い合いが起こらないよう気を遣ってるんだよ

あーちゃんは気配りの出来る優しい子だからね

13 名無しさん@マジカル

おっそうだな

14 名無しさん@マジカル

他の子の配信を見て面白い配信について勉強します！

←

私をさしおいてチャホヤされやがってこのかわいいタケノコどもがグギギ

15 名無しさん@マジカル

器小さすぎて草

16 名無しさん@マジカル

失望しましたあーちゃんのファンやめます

この単純なコメントで発狂してくれる、あーちゃんが好きだよ

・

・

・

205 名無しさん@マジカル

【朗報】魔法少女オタの俺氏、供給過多で無事死亡www
ってスレを立てたいくらい俺は幸せだ。

マジストマジマジスト

206 名無しさん@マジカル

早口言葉みたいになって草

207 名無しさん@マジカル

オタを名乗るならマジストなのかマホストなのか教えてくれ

このままじやら抜き弓道と合わせてマジスト警察が発足するぞ

208 名無しさん@マジカル

マジストでいいんじゃない？

二十人ほど配信追ってるが、体感そつちのが多い印象。あーちゃんもそつち派だし

209 名無しさん@マジカル

二十は盛りすぎだろモニターいくつあんだよww

210 名無しさん@マジカル

初配信のテンプレも出来てきていよいよ流行を感じるな

変身シーン、自己紹介、魔法の実演

惜しむらくは悪鬼退治配信が少ないところか

211 名無しさん@マジカル

一歩間違えば死ぬ戦いを進んで配信しろとは言えないだろ

みんなかわいしいしキャラ濃いし、無理して魔法少女らしくしないでいいと思う

212 名無しさん@マジカル

>>211

せつかく魔法が使えるのにただのゲーム配信とか、めちやくちやしようもなくないか？

魔性存在と戦ってこそその魔法少女だろう

213 名無しさん@マジカル

ほんとそれ。

つままないマジストは捕まえて研究所にでも送ればいいんだよ。

スターシ리즈のフォーレンサンとか、ダルマにして変電所とかに
放り込めばエネルギー問題永久に解決じゃん

214 名無しさん@マジカル

サイコパス居て草も生えない

215 名無しさん@マジカル

さすがに釣り針がでかすぎる

216 名無しさん@マジカル

こういうのがいるから隠れ魔法少女が増えるんだよなあ

217 名無しさん@マジカル

>>213

悪鬼と魔獣の魔性災害は世界中どこでも発生してる

彼女たちをアシザマに言うとかバチが当たるぞ

218 名無しさん@マジカル

231で悪意は撲滅されたんじゃないの……？

219 有識者志望

>>218

浄化されたのはあくまでも心から溢れ出た分だけで、完全に消滅したわけじゃないぞ。

>>213

マジレスすると、大人でも直視できないバケモノ相手に何の対価もなく命賭けで戦ってくれてる女の子たちにその言い草は、人としてあり得ない。←の動画でも見て脳みそまるごと浄化されてこい

【切り抜き】えちえち変身シーンまとめ【マジスト】

<http://fdghdty.s>.

220 名無しさん@マジカル

煩惱の塊で草

ふう

221 名無しさん@マジカル

>>218と>>219は人のこと言えるんですかねえ

222 名無しさん@マジカル

まだ見てるか分からんけど、>>213は夜道に注意しろよ

魔女狩り以来、そういう発言にはマスコットが目を光らせてる

223 名無しさん@マジカル

まほオタニキは都市伝説信じてるんでちゆか〜??ww

とか言いたいけど>>213の書き込み途絶えてるんだよな

224 名無しさん@マジカル

マスコット??

225 名無しさん@マジカル

魔女狩りの再発を阻止するための協会の暗部組織。半分迷信みた

いなもん

226 名無しさん@マジカル

あーちゃんスレの名無しのマスコットってそれか

・
・
・

444 名無しさん@マジカル

放送事故来たああああ

445 名無しさん@マジカル

何あのピンク触手リジエネ持ち？ チートやん

446 名無しさん@マジカル

正直抜いた

447 名無しさん@マジカル

待て落ち着け

こういうときこそマスカットの出番だろう

448 名無しさん@マジカル

マスコットは噂だし噂の内容でも対人専門だしそもそも果物食っ

て落ち着いてる場合かアホ

449 名無しさん@マジカル

とりあえず通報した

450 名無しさん@マジカル

あのデスヘイズちゃんが隠れ魔法少女だった

初陣で初心者狩りに遭った

チャンネルがバンされた

結果、情報過多で俺死亡

451 名無しさん@マジカル

勝手にくたばってる

ごめん言い過ぎた

452 名無しさん@マジカル

朗報。

タケノコ狩りしてたあーちゃんが配信切った。

多分助けに行ったんじゃないか

453 名無しさん@マジカル

助けに行ける距離なのか？ そもそも場所分かるんか？

454 名無しさん@マジカル

知らん。知らんけど祈るしかないだろ

455 名無しさん@マジカル

バン間際の助けてが耳から離れない

祈る以外に何か俺たちにできないのか

456 名無しさん@マジカル

すけべ心であの悪鬼が育つなら、オナ禁とか効果的じゃないか？

457 名無しさん@マジカル

それ逆効果な気がするんですけど

458 名無しさん@マジカル

お前らもちっけ

・
・
・
(以下、右往左往)

893 名無しさん@マジカル

・
・
・
どうということなの……

http://sssnns.s.s. SHATTERED EAR

TH@マジスト

デスヘイズちゃんが弟子になった

私はおししよーさまである

pic

(女の子座りのデスヘイズを後ろから抱きすくめるドヤ顔シャタード
アース画像)

894 名無しさん@マジカル

895 名無しさん@マジカル

百合 厨 歡 喜

896 名無しさん@マジカル

我魔法少女百合大好侍候。是上質百合我尊死

897 名無しさん@マジカル

新情報の暴力ヤメロオナイスウ!

898 名無しさん@マジカル

経緯説明はよ! はよ!

(以下、阿鼻叫喚)

第5話

【スパルタ】デスヘイズちゃんをしごく【指導!】

「映ってるかな?」

「バツチリです!」

「よしっ、みんなこんにちはー。今日はデスヘイズちゃんを足腰立たなくなるまでビシバシしごいていきまーす」

「よろしくおねがいますっ!」

コメント

!?!?!

・待て待て待て待て

・初手視聴者置いてけぼりはやめるんだ

・かつ飛ばしすぎい!

・デスヘイズちゃん大丈夫?

・マジで師弟関係になつたん?

・ここ河原? 修行配信ってこと?

・説明プリーズ

「説明い? やだ!」

「イヤなんですか!?!」

「めんどくさいからおめーが話せ、弟子!」

「おまかせくださいおししよー! えっとえっと視聴者のみなさん、まず私のチャンネルと放送事故の件ですが——」

三脚付きカメラに向かってかいつまんで経緯を説明するしえを横目に、腕組みした小舞は偉そうにふんぞり返った。流れるコメントの幾人かはあからさまな後方師匠面に草を生やす。しえが小舞の弟子となつてから初めての師弟配信だった。

撮影場所は近所の河川敷。ランニングコースや野球場などが整備された下流とは違って、年中草に覆われた人気のない上流である。いつも小舞の部屋かどこかのビルの屋上から始まるパターンとは違う。その上小舞としえはバトルドレスでもだらしないう部屋着でもない上下体操服姿であり、小舞に至っては「鬼」とマジックで書かれたハチ

マキを締め、古式ゆかしいハリセンを担いでいる。イレギュラーな新情報の濁流に視聴者が混乱するのも無理のない有様だった。

しえはチャンネル凍結の謝罪から話を始め、今は小舞に助けられたことについて語っている。

「で、もうダメだっと思って諦めかけたとき、おししよーが颯爽と現れて助けてくれたんですね！ 私は気づいたらお姫様抱っこされてて、おししよーが耳元でささやくわけです！ よく頑張ったねハニー、私が来たからにはもう安心だ、って。ひゃーっひゃーっ、もうかつこよすぎですよ！」

「言ってねえだろ特盛レベルで盛ってんじゃねえぞコラア！」

「はう」

ハリセンをフルスイングすると、しえの尻はすぱあんと小気味よい音を立てた。

「す、すみませんおししよー私ったらつい脚色を……正しくは無言で頭を撫でてくれた後おでこにチューでしたね！」

「うーん分かった、すっこんでろ」

「ええ!？」

際限なく美化されていく話にしびれを切らし、小舞はデスヘイズの尻をペしペしはたいてフレームアウトさせた。代わって視聴者たちの疑問に応じ簡潔に質疑応答していく。同時視聴者数は放送事故効果のせいか十万を越えていたが慣れとは恐ろしいもので、小舞の語り口が激むことはない。

デスヘイズの活動地域は小舞の自宅から幸運にも近かったので、救出へ向かった。病院に運んだ後二人は話が弾み、師弟関係を結ぶ。今後のシャタードアース配信チャンネルの内容は、悪鬼退治と雑談に初心者魔法少女デスヘイズの修行が加わることになる。

「以上！」

「あれあれ、おししよー？ 幸運にも家から近かったというのは……」

「おだまりー」

「はーい」

・すでにめちやくちや仲良くなってるww

：まあ助けた相手がまた知らないところでピンチになっても後味悪いもんね

：助けたの一言で済ますの強者感ある

：デスヘイズちゃんが完全にほの字なんだが

：ヘイズちゃんが幸せそうなら良かったよ。これからはこっちの配信で応援していく

：おししよーさん投げ銭させてくれろ

：魔法少女の修行って何するんだろ？

「人多いなあ」

コメントの流れがいつもより速い。チャンネル登録者数が右肩上がりに増加している。

デスヘイズは元々ネット上で活動していた人気のクリエイターだった。歌ってみた、描いてみたジャンルで頭角を現し、瑞々しい声音が評価され生配信に活動を広げ、人間離れしたマルチタレントぶりが世界中から注目を集めていたネットアイドル。

そのアイドルのチャンネルが凍結されたことで、フォロワーたちは小舞のチャンネルを難民キャンプにしているものと思われた。初見と思しきコメントが多いのもそのためだろう。

そういったデスヘイズの元フォロワーたちに対し、小舞は一切忖度しない。意地悪そうに笑ってハリセンを肩に担ぐ。

「じゃあくっっちゃべってるのもなんだし、魔法少女の修行初めていきましようか。見ての通り私鬼ししよーだかね、相手がデスヘイズちゃんだろうと容赦しないから」

：w w w w

：その格好でイキられてもな

：何この子かわいい

：ハチマキハリセンスタイルはその、なんというか

：極めて何かアホの子の香りがします

「だーれがアホの子だ怒るぞっ！」

「…………ふふっ」

「はい決めたもう決めた！ おししよーを笑ったデスヘイズちゃんは

もう泣くまで筋トレですうー!」

「はいっ、頑張ります!」

そうしてついに始まった魔法少女の修行は苛烈を極めた。まずは腕立て伏せ十回を三セットの予定だったが一回すら出来なかったのが急遽膝をついても良い優しいメニューに変更し、その次は腹筋と背筋をそれぞれ十回三セット、続けてスクワットにかかろうとしたところでデスヘイズが斃れた。

「はあ、ふう、も、もう無理ですう」

「思ったよりモヤシだなあ?」

「すみません……」

「まあ何の意味もないから別にいいんだけど」

「何の意味も……はい!?!」

目を丸くするデスヘイズに、しれっと答える小舞。コメントでは感嘆符と疑問符が乱流を成している。

魔法少女はバトルドレス姿に変身することで建設重機並みの身体能力を得られる。あえて変身せずに魔性存在と対峙する必要はないので、いくら筋肉を鍛えても意味はない。

ではなぜ修行の第一歩に筋トレを課したかという点、

「スポ根みたいでかつこいいいじゃん」

「みなさん助けてください、おししよーにいじめられています」

・ひでえww

・でも体操服姿でハアハア言ってるデスヘイズちゃんは眼福でした

・デスヘイズちゃん強く生きて

・いいぞもつとやれ

「おっけーもつとやる」

「やめて!?!」

ひとしきりふざけて撮れ高を確保したところでふと、小舞が思い出したように空を見上げ、変身。ハリセンとハチマキが輝く粒子に分解されると、アシンメトリーな蒼い鎧とハンマーへ姿を変え、シャタードアースのバトルドレスを形成する。小舞はデスヘイズにも変身するよう促した。

「真面目な話、私も最初師匠に筋トレやらされたんだよね。そんなに味ないよって言われてキレた。デスヘイズも弟子が出来たら同じこととしていいよ」

「負の連鎖をおすすめしないでください……おししよーにも師匠がいたんですね」

デスヘイズは小舞に言われたとおり和ロリに大鎌のバトルドレスを身にまとい、カメラに近づいて持ち上げる。一人称視点の配信画面には小舞一人が映り込む。

小舞はくりりとカメラに背を向けながら、

「うん、いたよ。カメラ持つてついてきて、悪鬼が出た。実践で修行する」

地面を蹴って駆け出す。画面はしばし呆けたようにぐんぐんと小さくなる小舞の背中を映していたが、大慌てで追従を始める。魔法少女の機動力を想定した高度な手ブレ補正がはたらき、配信画面は安定している。

被写体の小舞は悪鬼特有のもやもやした感覚を遠方に感じながら、懐かしい日々のことを思い出していた。魔法少女のちからに目覚めて間もなく出会った、憎たらしくも愛しい師匠との日々。

『筋トレに意味？ あるわけないでしょ、変身したら終わりだし。じゃあなんのためにって、修行っぽくてカッコいいからに決まってるじゃない』

そう答えられたとき、小舞はハンマーを振り回して師匠に殴りかかったものだ。思い出すと腹が立ってきた。

コンテンツとして面白そうなどという軽い理由でデスヘイズを受け入れた小舞には弟子育成の経験など皆無だが、参考にできる記憶があった。小舞のやりたいことを中心にかつての師匠にやらされたことを随時取り入れていけば、それっぽい師弟配信になるだろう。

小舞の師匠は体作りよりかは雰囲気作りに意味のあるトレーニングを弟子にやらせた後、実践修行を繰り返した。ちょうど悪鬼の反応が現れたので、小舞もその経験に倣っている。

「お、あれだね」

駅前繁華街、表から一本外れた暗い路地の片隅。落書きと経年劣化で黒ずんだ雑居ビルの立ち並ぶそこに、悪鬼の反応はあった。周囲に人の気配はない。今回は一般人に取り憑く前らしい。

建物の壁面を軽やかに蹴って宙空を舞っていた小舞は、地上へ落下しつつ悪鬼の反応へ突っ込む。伸ばした腕が地面近くの空間へ飲み込まれ、身体も消えた。その姿を追うカメラは躊躇する暇なく、小舞と同じルートで異界へ滑り込んだ。

画面が暗転。ほどなく映し出されたのは、モノクロに染まった町並みと小舞の後ろ姿。そこは向こう側とも世界の裏側とも呼ばれる魔性存在の巣窟だった。

当然その空間の主である悪鬼も奥に控えている。無数の黒い触手の絡み合う異形の巨体が、小舞の正面に身をくねらせていた。黒光りする触手の表面に穿たれた大小様々な穴の中には、黄ばんだ乱杭歯が並んでいる。小舞の悪鬼退治配信ではおなじみ、ヘイトレッドタイプの悪鬼である。

おどろおどろしい見た目にデスヘイズは息を飲み、気を紛らわせるためコメントに目をやる。

：またお前か

：悪鬼くんチツスチツス

：さすがに見慣れた感あるな

：慣れはしないけどものすごい安心感w

「デスヘイズ。どんなタイプの悪鬼にも絶対勝てる必勝法があるんだけど、どんなだと思う?」

「えっ、えーっと」

思いの外落ち着いた視聴者たちの反応に困惑していると、小舞が言った。

どんな悪鬼にも勝てる絶対の方法、戦い方、戦法。直接悪鬼に対峙するのはまだ二度目なデスヘイズには見当もつかない。そんな魔法のような方法があれば誰も苦勞はしないだろう。

背後で答えあぐねているのを察し、小舞は分かりやすい回答を示すことにした。

左半身を正面にして、ハンマーを振り抜く姿勢で身を低くする。悪鬼が何かするよりも早く、思い切り地面を蹴った。

異界のアスファルトが爆ぜ、小舞の小さな身体が弾かれたように宙を突進。悪鬼に近づいたかと思うと、奇妙な現象が起こった。

悪鬼の身体が爆散したのだ。まるでコマ落ちした動画のように、小舞はいつの間にか悪鬼の向こう側に着地して、ハンマーを振り抜いた姿勢で残心している。その姿勢を解いて振り向き、石突を地面に突くと、四散した悪鬼の黒い身体がきらめく粒子となって宙を彩る。ほどなくモノクロの異界に色がつき始め、二人は元の世界の路地裏へ帰された。

小舞は変身を解除して、体操着姿で胸を張る。

「殺られる前に殺る。向こうが何かする前にこっちの魔法でゴリ押しする。そしたらどんな悪鬼も瞬殺なワケ。分かった？」

「分かつ……りません！ 分かったけど分かりません！ なんか色々おかしい気がします！」

・草

・このドヤ顔である

・これにはデスヘイズちゃんも困惑

・絶対に負けない方法、それは勝つこと、って理屈と同じじゃねーか！

・ちよつと待ってあーちゃん今何したの？

・いつもの三割増で瞬殺だったな

・何もしないのに悪鬼が爆発した

・悪鬼をPCみたいに言うんじゃない

「何をしたかって、すれ違いざまに原型なくなるまで殴っただけですよ？ あ、もちろん魔法を使ってですけど」

小舞のしたことは至極単純で、魔法少女の膂力とハンマーの遠心力を利用した全力の打撃を秒間百を超える速度で叩き込んだだけだ。

ただしいくら魔法少女の怪力があるといっても魔法なしでここまでの連撃は不可能だ。小舞は自身の固有魔法『地球っぽいことができ』の一端、大気操作を活用した。

長柄のハンマーを全力で振るうと柄頭が音速を超え、空気抵抗が衝撃波と加熱を発生させつつ攻撃のエネルギーを分散させる。小舞はこの空気の壁を大気操作によってハンマーの軌道から排除し、超音速かつ無音の打撃により悪鬼を挽き肉へ変えたのだ。

かいつまんで解説すると、デスヘイズは目を白黒させている。

「大気操作……？ それつてめちやくちやすごいことなのでは……？」

「そうとも、私はスゴイぞ！」

得意げにする小舞にデスヘイズは頭を抱える。

「あの、おししょー。魔法で瞬殺するって言っても、みんながみんなおししょーみたいな魔法を使えるわけじゃ……」

「使えるよ、魔法少女だもん。デスヘイズは自分の魔法が何か分かる？」

「わ、分かりません」

「魔法少女の魔法はみんなスゴイ。それさえ使えれば悪鬼程度なら楽勝になるよ。まずは固有魔法を覚えるのを目標にしよっか」

殺られる前に殺る。必勝法としては若干雑に聞こえなくもないが、小舞は一切ふざけていない。悪鬼はタイプごとに強さや能力が異なり、初見では対応の難しい行動もあるが、そういった不利を一方的に押しつぶす不条理な力こそ、魔法少女の強みなのだ。

小舞の真面目な声音に気づいてか、デスヘイズは胸の前で拳を握る。

「……分かりました！ 頑張ります！」

こうして、弟子育成配信は固有魔法の習得を目標とし、本格始動したのだった。

――

「もういや……死にたい……」

小舞は布団の上でスマホを放り投げ、無気力な目で天井を見上げた。後十五分で定期配信の時間だがまるでやる気が起きない。悪鬼

の気配もないからこのままふて寝しよう、憎たらしい弟子の小娘がやってきても居留守を使つてやろう、と心に決める。デスヘイズを迎えた配信から半月の時間が過ぎた頃である。

新人魔法少女デスヘイズの育成企画は当初、うまくいっていた。小舞はデスヘイズに魔法の武器である大鎌の素振りと魔力制御の方法を指導し、デスヘイズは少しずつ固有魔法の感覚を掴もうとしていた。不定期で悪鬼が出現するとすぐに二人で現場に駆けつけ、小舞の見守る中でデスヘイズがおっかなびつくり大鎌を振るい、日に日に洗練されていく動きはまさにいっぱしの魔法少女然とした儼い凛々しさを伴うようになった。視聴者たちは未熟な新人アイドルのおっかけよろしくデスヘイズの上達ぶりを喜び、応援した。頑張れ、かっこいい、かわいい、もうちよつとだ、努力熱心だ——大衆の注目はこちら、私なんてどうせ……ぐすつ」

冷房の効いた部屋の中、シーツの下で小舞はすすり泣く。弟子を立派に育て上げる自分を褒めてもらうはずだったのに、成長する弟子の方がチャホヤされている状況は、ケチで面倒くさい女である小舞にとって非常に屈辱的だった。

しばらくふてくされていると、玄関から物音。軽やかな足音が響き、件のデスヘイズこと佳住しえが姿を現した。

「おししよー、来ましたよーってどうしたんですか!？」

しえは暗い室内と布団を見て取ると、慌てて小舞に駆け寄る。

「風邪ですか、それともお腹壊した？ だから冷房つけっぱなしで寝ないでって言ったのに!」

「……違う」

「じゃあ生理ですか？ あれっ、でもおししよーのはもう少し先のはずですよ？ あれね?」

いかにも純真に、良心から心配しているしえ。その良い子ぶりが小舞のプライドを逆撫でした。

「な、ななっ、何ですか何ですか!？」

しえの細腕をつかみ、布団に引き倒す。上下を入れ替えて馬乗りに

なると小舞の拗ねた泣き顔があらわになり、しえは目を丸くした。

無遠慮に小舞が顔を近づけると、しえは赤面して逃げようとするが、マウントを取られていては身をよじるしかできない。二人は互いに目と鼻の先の距離で見つめ合った。

「おししよー、こういうのはもつと段階を踏んでから……」

「むかつく」

「んっ」

小舞の両手がしえの胸を掴む。ほのかな膨らみにふにゆ、と指が食い込んだ。

「かわいくて良い子で努力家でしかも歌とか絵も上手くて極めつけに魔法少女とか、完璧にも程があるでしょ。そりゃ人気者になるわ。魔法少女以外に何の取り柄もない私なんてせいぜい引き立て役にしかなんないってのちくしよー」

「ふ、ふふっ」

「笑うなあー」

小舞の指が激しく動くとともに、しえの身体が小刻みに跳ねる。しかししえは息を荒くしながらも、まっすぐに小舞を見上げて言った。

「おししよーは寂しがりなんですね。かわいい、かわいいです」

「はえ」

「そういう気持ちをもつすぐ、隠さずに伝えてくれる。そんな正直者などころもかわいい、ですよ」

「や、え、何言ってるんの君」

小舞は立ち上がりさつと距離を取った。上体を起こし名残惜しそうに胸元へ手をやるしえを前に、混乱を禁じ得ない。理不尽な八つ当たりやに遭ったかわいそうな少女の態度とは到底思えない。小舞はしえに嫉妬を超える恐怖を覚えた。

珍獣と遭遇したように硬直する小舞に対し、しえはこてん、と首をかしげた。

「続きはしないんですか？」

「し、しないよっー」

ツツコミの後で、小舞はバツが悪そうに視線を落とし、

「ひどいことをしてごめん……」

「いいえ、大丈夫。私はおししよーになら何をされても平気ですから」

「……何をされても?」

「はい、何でもどんなことでも!」

「そっかあ」

得体の知れない重圧を感じつつも、小舞のメンタルはしえの言葉をきっかけに急速に上向いていった。

急な八つ当たりには抵抗もしないどころか何をされても構わないとさえ主張するしえ。これは小舞にしえへの際限なき優越感と征服感をもたらし、結果として自分への自信につながった。しえが小舞にどれほど酷い仕打ちを受けても受け入れる確信は、胸がすくほど気持ちいい。僻み根性極まる小舞にとつて、優れた他者への優位性は何より効果の高い劇物だった。

この日以降すっかり立ち直った小舞は、配信にいつそうの力を入れた。折よく夏休みに突入した七月下旬、ほぼ毎日配信される魔法少女シャタードアースによるデスヘイズ育成配信は、ネット民なら知らぬ者はいない一大コンテンツとして名を馳せた。

配信中は変わらず小舞よりもデスヘイズの方に注目が集まっていたが、小舞がいちいち凹むことはもうない。むしろもつと大胆にデスヘイズを前面へ出すことが増えた。デスヘイズがいかにチャホヤされようと、デスヘイズになぜか好かれているらしい自分の方が偉い、強い。愚かな思い込みが余裕を生んだ。

また、デスヘイズが固有魔法の習得で行き詰まったことも、小舞の暗い悦びにつながった。

「おししよー、最近私、前に進んでいる気がしません……」

「うん、そうだねっ!」

「なんでちよつと嬉しそうなんですか!?!」

「人の弱みを見つけると安心するんだよね。ああこの有能野郎にもできないことあるんだ、って。ね?」

「しませんよ! おししよーは性格がいくせに悪いです、ひどいです!」

「どうどう」

素振りと瞑想による魔力制御によって、大鎌の振り方は様になってきた。しかし悪鬼を独力で退治するのは叶わず、固有魔法も曖昧な感覚を覚えるだけで習得には至らない。ただ、実が伴わずともデスヘイズが汗水垂らして努力する姿は小舞にとっても視聴者たちにとってもコンテンツとして成立した。女の子が頑張る様は美しい。

とはいえ小舞単体での人気も負けているわけではなかった。

「ぶっちゃけ雑談のネタも尽きてきたなー。デスヘイズ何か歌ってよ、歌うまいんでしょ」

「えっいいんですか？ チャンネル乗っ取っちゃいますよ？」

「いいいいいよ、何ならお絵かきでもなんでも好きにやっちゃえ」

：歌って見た来たあああ

：天使の歌声復活！

：このままじゃほんとにデスヘイズちゃんのチャンネルになりそうなんだが

：シヤタードなんとかさんはアシスタントかな？

：初回から見てる勢としてはなんか複雑。

「年上のおししょー様として器の大きさ見せつけていくよー。かーっ器デカすぎてチャンネル乗っ取られちゃうわー」

：うぜえw

：その器でか過ぎて底抜けてますよ

「誰が底抜けガバガバ野郎だコラア！ てめー名前覚えてたからな『委員長のケツ』うー！」

隙あらばイキるスタイルの小舞はしばしばコメントに煽られた。そのたび律儀に反応するので、打てば響くというか響きすぎてやかましい一種のキレ芸として持て囃された。普通にチャホヤされたい小舞としてはこの扱いは不本意で、そっちがその気なら徹底抗戦だと決めてひたすらキレた。気安く面白い芸を披露してくれる気前のいいマジストとして更なる人気を呼んだのは言うまでもない。

そうして二人は、デスヘイズの修行を中心に雑談や悪鬼退治をローテーションする日々を過ごす。四月の初配信から四ヶ月経った8月

初旬、かつて日陰者だった魔法少女たちはすっかり人類の守護者兼面白ストリーマーとして世界中に知れ渡っていた。その草分けとなった小舞のチャンネルには多くの視聴者が集まり、人気配信者デスヘイズの話題も相まってマジスト界限ではトップクラスの同時視聴者数を叩き出していた。

そんな人気者になったからこそ、本人にとっては何気ないある日の発言が大きな波紋を呼ぶこととなる。

【雑談】魔法少女あーデス【マシユマロ】

『あーちゃんさん、お願いがあります！ いつも脱ぎ散らかしている靴下を視聴者プレゼントにしていただけじゃないでしょうか！ もちろん使用済み未洗濯で！』

「はっはっは、キモイぞ去れ」

「でもおししよーもおししよーですよ？ 脱いだものはちゃんと洗濯機に入れましょー？」

「できるならやってらい。次！」

『単刀直入にお聞きします！ 二人はどこまで行っただんですか？』

「どこまで？ んん？」

「おししよーこれはあれですよ。カップルが手をつないだとかキスをしたとか、え、えっちなことしたとかいう……」

「なるほど。別に何もしてないけど、一緒に寝るくらいなら毎日じゃんね」

コメント欄が尊いだのキマシタワーなので溢れる。しえは照れ笑いを浮かべているが、小舞は何も恥じることはないので堂々と答えていった。

マシユマロとはSNSと連動し匿名で配信者などに質問できるサービスである。この質問に答えるのはマジストのみならず、多くの配信者にとつて馴染みのあるコンテンツだ。

「最近よくデスヘイズがうちに泊まるんだけど、布団一つしかなくて、だけど新しく買うのも面倒だから一緒にね。正直暑苦しいから夏は帰ってほしい」

「えへへ、だってだって、おししよーが寝苦しそうにうめいたりもぞも

ぞするのがかわいくってえ。汗の匂いとかもすつごく良いにおいたた」

「殺されてーのかてめーは？」

：ええ…（ドン引き）

：ガチトーンでアイアンクローは草

：アイアンクロー喰らいつつ笑顔なデスヘイズちゃん強い

：最近デスヘイズちゃんが純真なまま変態と化してて草生える

：これはこれで尊い

：百合豚くん守備範囲広くなーい？

「次、次！」

『あーちゃんさん、初回配信で変身するときノリノリでポーズ取ってましたけど、あれもうやらないんですか？』

「やらない、めんどい」

：心底めんどくさそう

：そういえばあれつきりだな

：今はピカつとして蒸着！

：変身シーンまとめでもかなり評価高いよあれ

「おししよー、私もまた見たいですっ！」

「んもーそんな目で見ないでよ。分かった分かった一回だけね。やれと言われるとなんか恥ずかしいんよ」

しばらくは二人の関係性や変身、魔法関係の軽い質問が続く。時に実演を挟むマシユマロ配信は和気あいあいとした雰囲気包まれ、平和的に進行していった。

しかし溜まった質問をランダムで選んでいる関係上、いつまでも同じ方向性とはいかない。

唐突に現れたその質問は、業務用の袋詰マシユマロを一ダースぶん投げたような重量感を放っていた。

『シャタードアースさん、デスヘイズさん、初めまして。』

私は隠れ魔法少女です。5年前魔法少女になりましたが、迫害が怖くて親にも友達にも秘密にしています。近くで魔性災害が起きても見てみぬふりをしています。

罪悪感は覚えますが、もう慣れました。命がけで戦っても何一つ見返りがなく、それどころか石を投げられるなんてまっぴらです。

そこで二人にお聞きしたいのですが、なぜお二人は戦うのですか？特にデスヘイズさんは、あんなに怖い思いをしたのにまだ戦い続けようとしています。どうしてそこまでして戦うのですか？』

「自分を偽りたくないからですっ！」

重厚かつ長い質問に間髪入れず答えたのはデスヘイズだった。

ネット配信を経て人気者になりつつある今とは異なり、一昔前の魔法少女の扱いは陰惨を極めた。命がけの戦いに身を投じて見返りどころか打撃を受ける情勢。一度は隠れ魔法少女として生きることを選んだデスヘイズだからこそ、質問者の気持ちが分かった。

「私もちよつと前までは隠れ魔法少女でした。だけど思ったんです、誰かを守る力があるのに、いつまでも隠れたままでもいいのかって。そんなときおししよーの配信を見かけて、隠れるどころか堂々とさらけ出してるのを見て勇気をもらいました。自分の気持ちを、世の中の役に立ちたい気持ちにウソをつかなくていい。ありのままの自分を出して良いんだって。だから私に言えることは、一步を踏み出す勇気が大事じゃないかなってことです、はい」

：質問の温度差で風邪引く

：え、マジで見返りゼロなの？協会からお給料とかは？

：ないない、協会は企業でも慈善団体でもないから

：俺なら金積まれてもあんなバケモノと戦えんわ

：まさしく究極のボランティア

：そういやデスヘイズちゃんも隠れだったな忘れてた

：あーちゃんの影響はかなりでかい

：あーちゃんあんまり興味なさそう？

：あーちゃんは何で戦うの？

小舞はしえが答えている間、頬杖をついてコメントを眺めていた。しえは質問者とコメントに真摯に対応し、小舞の態度にふと気がついて「おししよー？」と呼びかける。

しえもコメントも、気になっていた。小舞がなぜ九年も戦ってきた

のか。得るものは何もなく差別と迫害だけが約束された戦いを、なぜ今まで続けてこられたのか。

小舞の数秒間の自問自答の末、慎重に言葉を選びながら——後に物議を醸すことになる印象的発言を、ゆつくりと口にした。

「……から」

「えっと、もう一度いいですか？」

「知らなかった、から。戦う以外に生きる方法を知らなかったから。だから今まで、戦ってきたんじゃないかなあ」

戦う以外に生き方を知らない。

マジストの頂点がぼつりとこぼした言葉は瞬時に電腦世界を駆け巡り、波紋を呼んだのだった。

——

『シャタードアース氏、マシユマロ回答で闇深発言』

『魔法少女の闇、示唆か』

『SA氏の質問回答が波紋』

『悲報』最強の魔法少女、戦闘マシンだったwww』

「ウヒョー！ めっちゃ話題になつとるやん！」

ガチなマシユマロをさつそうとさばいた翌日の朝、食卓の椅子に腰掛けスマホ片手に優雅なエゴサと洒落こんでいた小舞は、バカみみたいな歓声をあげた。女を捨てたパンツ一丁の寝間着姿なので、アホらしさに拍車が掛かっている。

床につかない足を行儀悪くぶらぶらさせながら、小舞はエゴサの結果を順に吟味しはじめた。ネットニュースやSNS、匿名掲示板などのまとめサイトが主な検索結果だ。早速一番上のページを開いてみる。

『シャタードアース氏、マシユマロ回答で闇深発言』

今話題のマジカルストリームの先駆者にして、現役魔法少女でもあるシャタードアース氏の発言が波紋を呼んでいる。

問題の発言は氏が配信内で匿名質問サービスマシユマロの質問に

回答しているときのことだ。「なぜ魔法少女として戦い続けるのか」という旨の質問に対し、氏は「戦う以外に生き方を知らないから」と答えた。視聴者やフォロワーたちはこの発言を受け、「戦いしか知らないなんてかわいそう」「それだけが人生じゃないって教えてあげたい」「戦いすぎて戦闘マシンになってる」などSNS上で物議を醸した。また、氏の前に回答していた魔法少女デスヘイズ氏の回答「誰かを助ける力がある自分を偽りたくない」についても、良い子過ぎる、あまりにも健気など涙腺を緩ませる視聴者が多数発生した。

あるOMG関係者は配信の反響について、「魔性災害は人類がいる限り必ず発生し、放置すれば大規模な災害へ発達する。それを無償で未然に防ぎ続けている魔法少女への理解を、彼女の配信を通して深めてもらえれば」と魔法少女の役割を強調した』

「だーれが戦闘マシンじゃコラァー！」

腹が立ったのでSNSでそのままつぶやいてみる。数秒でいいねが連続し、注目されてる感に気持ちよくなった小舞はむふーと鼻息をつく。このつぶやきも数時間すれば何かしら持ち上げられるだろう。

マシン扱いにはむっとしたが、何気ない言葉がここまで話題になるのはまさしく有名人になったようで、世間に注目されている快感がたまらない。小舞はニコニコしてエゴサを続行した。

ネットニュースの記事は最初に読んだものとはほぼ同じ内容で、タイトルで笑っている匿名掲示板のまとめサイトも嘲笑やからかいよりかは「ガチの闇深は笑えない」「普通ならネタだけど現役魔法少女が言うとシャレにならない」など呆れや困惑が大半で、小舞が腹を立てるような扱いはなかった。

ひとしきりネットを漁った小舞は腕を組み、思案げに天井を見上げた。

「大げさじゃね?」

小舞の感覚では大げさな反応に思えた。

要は小舞が幼い頃から魔法少女として戦い続けるあまり、紛争地帯の少年兵めいた精神に達していると勘違いされているのだ。小舞は自分の境遇をそこまで悲惨とは思っていないし、むしろありふれてい

るとさえ考える。

九年間戦い続け、配信を初めて弟子もできた。これまでの人生と比べると大きな変化を迎えている。この機会に自分の魔法少女生活を振り返ってみてもいいかもしれない。

そう考えた小舞は椅子の上で膝を抱え、背を丸めて目を閉じた。

――

「あら珍しい、新人の魔法少女ちゃん？　しかもスターシリーズなんてすごいじゃない」

「すごい？」

「ええ、すごい。大したやつよあなたは」

思い出すのは、小舞の原点。

魔法少女の力に目覚め、片親には病原菌を扱うような手付きで捨てられ、無気力に路上をさまよっていたあの日。バトルドレス姿の小舞を認め、あの子は小舞を褒めた。

「あたしはリップトミーティア、リップたんまたはミーたんと呼んで。あなたは？」

「こ、まい。かなち、こまい」

「魔法少女名を聞いたんだけどな。まあいいわ小舞、あなた私と組みなさい」

「くむ？」

「んー、友達になりましたよってこと」

ミーたんは小舞の存在を承認し、名前を呼び、微笑みかけ、認めてくれた。小舞はそれだけでどんな辛いことも許せるほど、満たされた気持ちになった。

「あつははは！　ずぶ濡れじゃない、バカねー」

「うるさい」

「だーから忍者の真似はやめろって言ったのにおバカ」

「うるさいー！」

魔法少女として共に活動した。給水塔をうっかり踏み抜いて、建物

の管理人にすぐく怒られたことがあった。ミーたんは小舞を置いてけぼりにせず、一緒に怒られてくれた。

「うわあーん怖かったよおー!」

「姿が見えないと思ったたらホーニーに捕まってたなんてね……よしよし、もう怖くないわよ」

女の敵に捕まって、丸一日体を弄ばれた。落ち着いた雰囲気のみーたんは珍しく血相を変えて助けに来て、落ち着くまで抱きしめてくれた。

「このケーキは何のつもり?」

「誕生日。会長ババから聞いた。おめでと」

「あの死にぞこない勝手に……まあでも、生まれてきたのを祝われるのは、存外悪くないわね」

お礼も兼ねて誕生日にケーキとプレゼントを用意すると、複雑そうに笑った。嬉しさと寂しさが入り混じった表情だった。

「で、このプレゼントは首輪かしら?」

「ちよーかー、っていうんだって。ミーたんいつも付けてるから、好きかなって」

「私のこれは首輪よ、犬用の……どう、似合う?」

「かわいい」

ミーたんはいつも首輪を付けていた。電池と電極付きのぐっついそれと少しずらして、小舞のプレゼントを装着した。かわいかった。ミーたんはいつでもかわいかった。

「あぶないよ、ミーたん」

「知ってる、だからいいんじゃない。一步踏み出せば死、風が吹いても死。これぞ希望って感じよね?」

「意味わかんない」

ミーたんはたまに屋上の縁に立って、変わった思想を語った。

「子供が大人に話を聞いてもらうには、どうすればいいと思う?」

「大声で叫ぶ?」

「違うわ。死ねばいいのよ」

あの子は口元を歪めて笑っていた。

「大人は子供のことを、言葉の分かる畜生程度にしか思っていない。畜生がいくら喚いたってムダ。だから死ぬしかない。出来る限り劇的に目立つ形で死んで、命の使い方を選べるくらい賢いんだぞって分かるさせる」

「ふーん？」

「あんなタイミングで魔法少女になって、死に損なっただけ……きつと証明する。私は畜生なんかじゃない、人間だってこと」

当時の小舞は人の死について理解が浅く、何を言っているのか分からなかったが、ミーたんは死に場所を探していたのだろう。ミーたんは変身もせず頻繁に屋上の縁に立ち、刃物を首にあてがい、天井に吊るした紐を眺めていた。変わった子だった。

だから彼女は死の間際、とても嬉しそうだった。

「あはっ、やったわ。私は命の使い方を選んだ。他の誰でもない自分の意思で。だから私は畜生じゃない、人間なの。人間だって証明ができたの。あなたもそう思うでしょう、あーちゃん？」

空一面を覆う太陽の下、ミーたん小舞は瓦礫の上に横たわっていた。魔王を異界ごと吹っ飛ばした後のことだった。

ミーたんは魔法の反動で身体の半分が千切れ飛んでいた。背中から伸びる歯車と螺子と皮膜で形成された一对の翼はひしゃげ、砕け、見る影もない。小舞のあげたチョーカーは衝撃で千切れ飛び、頑丈な電極付きの首輪もボロボロになって留め具が壊れていた。

「半端な魔力の使い方をしちゃって情けない。まあ、あなたにはあなたのやりたいことがあるでしょう。せいぜい、好きな、死に方を……」
ミーたんの暗い瞳と目を合わせながら、小舞はやりたいことを考えた。

何もなかった。六年間一緒に過ごしたあの子がいなくなった空虚を埋める何かなんて、思いつくはずもなかった。

それから三年、小舞は機械的に学校へ行き、魔法少女として戦った。それ以外に生きる方法はなかった。小舞の存在をそれまで認めてくれたのはミーたんただ一人であり、その承認は戦いが前提だった。だから魔法少女として戦うことはすなわち小舞の人生であり――

「ああそっか、そっか！ 私のやりたいことってこれかあ！」

小舞は弾かれたように顔を上げた。頭が冴え渡っている。点と点が線でつながった気分だった。

「私は生きたいんだ。生きてチャホヤされたいんだ。きつとそれが生きるってことなんだ」

小舞は存在を承認されたかった。自分の名前を呼び、微笑みかけ、思いやり、居場所になってくれる誰か――ミーたんのような誰かが欲しかった。誰かに認められることで自分は大したやつだと信じたかった。承認こそが命の源だった。小舞が戦い続けるのも、大したやつだと信じられる唯一の根拠が魔法少女だからだ。

きつとその考え方自体はともありふれている。他人からの承認なしに自分を好きになれるのはほんの一握りだろう。

小舞はありふれた凡人だから、自分を生かしてくれる承認をネット上の不特定多数に求めた。常に誰かから認められることでやつと生きている自分を許容できる。チャホヤされて生きるのが小舞のやりたいことで、人生だ。

気づいたとたん、小舞は泣きたくなつた。

「ちっちゃいなあ」

他人からの承認がないと、生きることさえままならない小舞は凡俗で、救いようのない小者だ。自覚が自己嫌悪につながり、気分が落ち込む。

と、そこで玄関から物音がした。

いつもより気持ち速いペースで足音が響き、短い廊下からリビングへ少女が姿を現す。

「おししょー、おはようございまーす！」

「おはよ」

デスヘイズこと、しえだった。

顔をそむけて涙を拭うが、しえは一直線にカーテンを開けに向かつ

たので小舞の落ち込みように気づかない。

しえの方を見やる。差し込む朝日に照らされる彼女はなぜかめかしこんでいた。爽やかな白のロゴTシャツと細かなドット柄の入ったロングスカート、女の子らしいおしゃれなポーチに、足元は涼し気な素足。いつもはツインテールの黒髪は後ろで一つにまとめられ、醸し出す大人っぽさと無邪気な童顔が調和してかわいさに昇華している。バトルドレスほどではないにせよ、洒落つ気が高い。

「ひゃ、なんて格好してるんですか！」

「悪い」

光がパンツ一丁の小舞を照らし出し、しえが目を覆う。しかし指の隙間からチラチラ見てくるので、小舞は逃げるように布団の薄いシーツを羽織った。

しえは、シーツからはみ出た小舞の華奢な足にしばしねつとりした視線を送ってからようやく本題に入る。

「おししよー、お出かけしましょう！」

「えっ」

「せっかくの夏休みなのに、配信と修行と悪鬼退治だけなんてもったいないです！ おでかけ、おでかけ！」

「セミ捕まえてはしやぐ年じゃないんだなこれが」

「そんなの私だってイヤですっ！ 買い物、買い物にしましょう。おししよーの制服ジャージスウェットバトルドレスの四天王布陣をついに崩すときが来たんですっ！」

「まあ……しえが行きたいなら付き合うけどさ。そのテンションはどうしたの？」

しえは一度言葉を詰まらせ、逡巡するように視線を泳がせると、声を一段落とした。

「おししよー。世の中には戦う以外にもいろんなことがあるんです」

「お前まで戦闘マシン扱いかクショー！」

「ち、違いますそうじゃなくて、えったとえば……」

「もういい！」

立ち上がり、背を向ける小舞。慌てるしえに首を捻って振り返り、

言った。

「私の並外れたファッションセンスを見せてやる。今日は期待しとけムッツリ弟子っ!」

「お、おもしろ〜! って、ムッツリ!?」

感涙しているしえを放つて、まず小舞は洗面所へ身だしなみを整えに行つた。ネットの記事を読んで気を回してくれたのだろうが、弟子に侮られるわけにはいかない。ナウでヤングなファッションセンスを見せつけ戦闘マシンの汚名を返上する。SNSに最強魔法少女の今どきコーデを写真でアップすれば、ネットの連中も見返せるだろう。

手早く準備を整えてリビングに戻る。

「待たせた」

「あれだけタンカ切つといて結局制服ですか!」

「だってマジでほかはジャージとだぼだぼスウェットしかないんだもん! だから買いに行くんでしょ!」

「もういつそ変身しましょ? お店に悪鬼がいる体で」

「それは負けた気がするからヤダ!」

きやいきやいと二人なのに姦しく、服を買いに行くための服をどうするかでひと悶着。しえと配信と魔法以外のことを話すのは新鮮で、言い合いながらもどこか気分がウキウキする。

失くしたものは戻らない。それでも今できることを尽くして精一杯チャホヤされる小舞は割と幸せで、満たされていた。

それを守るためなら、命も惜しくないほどに。

第6話

「どーよこれ、中々似合ってるんじゃない？」

「はいっ、最高にかわいいですおししよー！ 抱きしめていいですか？」

「近づくなバカモノ」

試着室から出た小舞はしえの要求を一蹴しつつ、様変わりした鏡中の自分に相好を崩した。蒼い薄手のノースリーブパーカーにデニムのショートパンツ。細く引き締まった手足が惜しげもなく晒しだされ、シンプルながら活動的な印象にまとまっている。

すっかり気に入った。興奮してスマホの写真を連写しているしえを放置し、そのまま会計へ向かう。着てきた学校のセーラー服は袋に詰めてもらった。

「しえー、お待たせ。いこいこ」

「えへ、えへへ……はっ？ 待つてくださいいどうせならもつと部屋着とかパジャマとか買つときましようよー！」

「それはもつたいたない。また来る口実に取っておきたいな」
「なるほどなるほどっ、分かりましたー！」

本音半分、予算に余裕がない言い訳半分で言いくるめ、嬉しそうなしえを引き連れ店を出た。

戦いしか知らない発言の翌日、しえの提案で女の子らしくおしゃれをすることになり、二人は隣町の娯楽市に聳え立つ大型ショッピングモールまでやってきていた。

娯楽グラン・パーク。西日本最大級のモールであり、三百以上ものテナントに飲食店、雑貨店、娯楽施設、アパレル関係など多様な店舗を擁する。ターミナル駅と連絡橋で直結した五階建ての中は吹き抜けで、バルコニーのような通路から身を乗り出すとガラス張りの天井から広場のある一階まで見渡すことができる。各階層は随所に設置されたエスカレーターで行き来するが、立体的かつ広大な作りが迷路のように人を惑わせる悪評も有名だ。

平日とはいえ夏休みだからか、小舞たちと同年代の少年少女の姿が

多い。中には部活帰りと思しき制服姿も見受けられた。もしかすると小舞のクラスメイトもどこかにいるかもしれない。

などと考えている小舞の想像を若干裏切って、見知らぬ中学生程度の少女が声をかけてきた。

「お、しえーちゃん奇遇だねえ」

「やつほー」

しえの中学の友人らしい。弟子入りに伴って中学三年の珍しい時期に小舞の地元校へ転入してきたしえだが、人付き合いはうまくいつているようだ。

小舞が適当に話を合わせようとすると、その女子中学生は身を乗り出して、

「サインお願いできますか?」

「やべー私有名人かよ」

生徒手帳とボールペンを突き出してきたので、小舞は良い気分ではなやふにやした丸文字で「しやたーどあーす」と書きなぐった。

別れてから改めて意識してみると、通り過ぎざま時折小舞の方へ視線を送る者を頻繁に見かけた。ほんの四ヶ月程度で随分と有名になったものだ、と嬉しさ半分戸惑い半分の小舞だった。

「この後どうします? 映画でも見ますか」

少女と別れると、吹き抜けの手すりにもたれるしえが仰ぎ見ながら言った。視線の先には吹き抜けの天井から吊り下げられた大型構造物がある。円柱状に組まれた金属製の骨組みに縦長の大型液晶をいくつもくつつけたそれは、最上階の映画館が上映している映画の広告を表示していた。もし地震があつたら落ちてたいへんなことになりそう、と地元民の間で有名な広告ディスプレイだった。

メインの用事である服選びを終えたので、映画を見ていくのもありかもしれない。

とはいえ店を出た時点で正午を回っており、

「おなかすいた」

ついに腹の虫が鳴ったので、二人は適当な店を探すことになった。

「こんなにくさんあると迷いますねー」

飲食店は少し通路を歩くだけで寿司、フレンチ、大陸料理といくらでも見かけるが、小市民的な小舞の感性に合うものがない。

折よく案内板を見かけた二人は、馴染みのある全国展開の某ファストフード店を探す。そして驚愕の事実には戦慄することとなった。

「三百も店があるくせにマクドないの……？ ウソでしょ……!?!」

「世界滅亡の前兆、それとも悪の陰謀でしようか!?!」

「きつと両方だね間違いない」

「ひえー!」

全国津々浦々世界中にあるはずの普遍的チェーン店の名が、グランパークにはどこにもなかった。あるはずのものが無い恐怖に身を凍ませる小市民二人。西棟の一角であるそこは小市民的女子中学生と高校生には敵地に等しい垢抜けた雰囲気醸し出していた。

悪ノリテンションの女子高生と中学生は身を寄せ合って、天井へ警戒の目を向ける。防犯意識の表れなのか、どのフロアに行っても黒い球体の中から広角レンズが目を光らせている。

「見な、あの監視カメラの数を。きつと悪の秘密結社が庶民派を見張ってあざ笑ってるんだ!」

「ひえー! ……もういいですか?」

「急に冷めないでよお!」

恐ろしく急速に飽きたしえに抗議しつつ、改めてお昼について考える。このまま逃げ帰るのは無駄に高い小舞のプライドが許さない。案内板の中にもっとも気安そうなフードコートの文字を見つけると、二人はそそくさと高級な一画から退散した。

通路と吹き抜けの間で絡み合うエスカレーターをいくつも経由して、移動すること二十分後。

「これよこれ、こういうのでいいのよ」

東棟一階フードコート、一杯五百円のラーメンをお盆に乗せた小舞はほくほく顔だった。広場の客席には同年代の少年少女が思い思いに食事を楽しんでおり、ここが一般人のオアシスと思われた。

しかし席に着いた小舞が安心するにはまだ早かった。

対面に座ったしえ。注文したのは小舞と同じ安っぽいしょうゆ

ラーメンだ。二人はいただきますをしてから当然の権利として音を立て麺をすするはずだったが、

「しえ貴様……正気か!？」

「え、えっ?」

ずるずる麺をすする小舞の正面で、しえは静かに麺を食す。れんげにスープと一口分の麺を乗せ、慎重に息を吹きかけてからゆっくりと口に運んでいく。小舞とは比べ物にならない品格と女子力がそこにはあった。

「私麺をすするのが苦手で……変、ですか?」

「全然っ!」

恥ずかしげにはにかむしえは女の子らしさの化身だった。小舞は勝手な敗北感でやけくそになって豪快に麺をすすっていく。いくら師匠が弟子にマウントを取れるといっても身にしみた品格には手を出せない。改めて優秀な弟子の脅威を実感させられた一幕だった。

間もなくごちそうさまをすると、小舞はスマホのカメラを起動しつつしえの隣に移動、ぱしやりと一枚撮った。

『戦闘マシン言ったやつはこのリア充ぶりにひれ伏せ』つと。あ、写真SNSに上げるね?」

「待って待って変顔とかになってないですか!? ほっ、おっけーですおっけーです」

おしゃやかな服を来た小舞としえのツーショットが電子の海に流され、フォロワーのいいねを餌に大きく成長していく。

しかし小舞は珍しくその数字ではなく、今しがた撮影した写真に目を奪われていた。きよとんとした顔のしえの隣で、小舞は自分で恥ずかしくなるくらい眩しい笑顔を浮かべている。

今が楽しくて幸せで仕方ない。そう自覚した瞬間、勝手に口が動いた。

「あのさ、しえ。今日はありがとう。ていうか日頃から全部ありがとう。めっちゃ感謝してるよ」

「え、何ですか急に」

戸惑うしえから一切目をそらさず、小舞は淀み無く続けた。

「しえのこと、ぶつちやけ最初はチャンネル登録者数の燃料程度にし
か思ってたかったけど」

「ひどい!？」

「今は違うよ。しえが来てからなんか毎日楽しい。私のことを認めて
くれる人が隣にいるってこんなに幸せなんだって、思い出させてくれ
た。だから、ありがとう」

「え、えええ?」

頬を赤く染めたしえは視線を泳がせ、意味のないうめき声を発して
から小さな声で「どういたしまして」と答えた。恥じらいに当てられ
て小舞も今更多少の恥ずかしさを覚えるが、身近な人への感謝は言え
る時に言っておくべきというのは三年前に深く学習した。よって、小
舞は満足げに笑ってみせる。この充実した時間のためならどんな苦
労も惜しくない。

と、そのように確信したのが呼び水となったのだろうか。小舞はす
ぐに思い知ることとなる。

幸せな時間は得てしてあっけなく崩れるのだということ。

――

「そんなふうに言ってもらえて嬉しいです。私の方こそ今までありが
――」

赤面から持ち直したしえの言葉は最後まで続かない。

『とう』に被せる形で悲鳴が上がったからだ。

それと前後して周囲一帯が暗くなった。店舗の明かりや建物の照
明は生きているが、採光口にもなっている吹き抜けの天井からの光が
途絶えた。見上げると、真昼の青空が真っ黒に染まっている。

それだけ確認した小舞は瞬時に変身し、左右非対称の鎧とハンマー
を装着すると同時に悲鳴の方向へ目をやる。

小舞たちのいる一階フードコート。その吹き抜けに面する二階の
通路に、醜い触手の塊が蠢いていた。通路の天井、三階通路に達する
その怪物はおなじみの悪鬼、そのヘイトレッドタイプだ。

悪鬼の正面（どちらが前か後ろかは適当だが）で一人の少女が尻もちをついているのを見るや否や、小舞は駆け出した。

走りながら身を低くして二階の手すりに狙いを定め、斜め方向へ跳躍。

悪鬼はもつとも手近な少女に向けて、粘液の滴る触手を伸ばす。

二階手すりを蹴って宙を舞い、伸ばされた悪鬼の触手を横合いから殴り飛ばした。弧を描いたハンマーの軌道上から浄化された光の粒子がきらめく。

そこはすでに小舞の必殺の間合いだった。悪鬼が動き出すよりも早く小舞は固有魔法を発動、ハンマーの軌道上から空気の壁を撤去し、その道筋の通りに全力でハンマーを振り回す。

無音・超音速のラッシュに悪鬼のなすべはなかった。たった一度のインパクトで黒の巨体に風穴が空き、さらに数十数百と打撃が重ねられると、不気味な黒は欠片も残さず清浄な光の粒子と化した。

何もさせずに瞬殺する。対悪鬼戦の鉄則を実践した小舞は、いつもの残心をうつちやつてすぐに踵を返した。

呆然とする少女の前にかがみこむ。

「大丈夫？ ケガはない？」

「……は、はい、だいじょうぶ、です」

「そりゃよかった」

「おししょー！」

遅れて変身したデスヘイズが二階へ駆け上がってきた。顔を青くした彼女は早口に問う。

「何が起こってるんですか？ だってだって、悪鬼は異界じゃないと実体化できないんですよね？ それに空も暗いですし……」

「うわあああ!？」

小舞が答える暇もなく、またも悲鳴。一階の方からだ。忙しく手すりを乗り越え飛び降りる。デスヘイズも続いた。

一階の出入り口付近に人だかりができていた。悪鬼の出現とともに外へ逃げようとしたのだろう。しかし顔を青くした幾人かが尻もちをついて、外の風景に震え上がっていた。

グランパークに出入りするには駅に通じる連絡橋の他、二階と一階に複数設けられた出入り口が使える。人だかりができてるのはその一つで、外には平日の忙しない幹線道路が広がっているはずだった。

しかし平和な現実世界は一変していた。外にはいくつもの托卵された夜が山脈になっていて、痙攣しながら粘性のあるとぐろをめちやくちやに飛散させていた。

人の理解を超えた光景に、逃げようとした人々は絶句する。

そんな中、心底面倒臭そうな小舞の声がよく響いた。

「うわ、建物ごと取り込まれてる」

「おししよー、あの、一体何が……？」

「魔獣が出たっぽい」

小舞は出来る限り大きな声で、簡潔に結論から述べた。

デスヘイズの言うとおり、最弱の魔性存在である悪鬼は異界でなければ実体化できない。故に人々の意識体に取り憑くことで成長に必要な悪意や邪念を吸収していく。魔法少女は悪鬼の異界に力づくで侵入することを浄化の第一歩としている。つまり悪鬼が現実世界に姿を見せるはずがないのだ。

「だけどこっちの世界を向こう側に取り込める魔獣以上の敵がいれば話は別。異界化された現実世界なら、悪鬼は実体化して好きに動ける。三年前の魔王と要領は同じだよ」

「ま、魔王と……!?!」

しえが身を固くし、声の届いていた周囲の一般人たちも息を呑んだ。死人こそゼロだが、市人口190万を擁する大都市が瓦礫の山と化した三年前の事件は広く世間に知られている。小舞はそれと同じことが起きているというのだ。

小舞は努めて明るく続けた。

「つつても今回出たのはせいぜい魔獣、下の方のやつだから心配ない。異界化したのはパークの建物だけみたいだし」

「なんでそこまで分かるんですか？」

「感覚。もう魔獣の場所まで分かっている。これからすぐ倒しに行くか

ら、あー、皆さん安心してくださーい」

声の届く範囲だけだが、わずかに緊張が緩んだ。人々は口々に「あのシャタードアースが言うなら大丈夫だ」「頼りにしてるぞ」「いつも配信見てますサインいいですか」などと言いあからさまな楽観視を始める。

楽勝ムードに水を差すように、小舞はさらっと爆弾を投下した。

「たーだーし、ここは異界です。さっきみたいな悪鬼がいつどこから生まれるか分かりません」

「えっ」

「ですのばったりエンカウントとかしたくなければ、店の中とかに隠れて大人しくしてください。見ての通り外に逃げるのもダメ。おっけー?」

返事もせずに蜘蛛の子散らす勢いで逃げていく一般人たち。見るからに尋常ではない外に逃げようとする物好きはおらず、手近な店の中へ飛び込んでいった。声の届かない範囲にいた者たちはその様子を不安げに眺めている。

「喉疲れた……そんなわけでデスヘイズ、ちよつと行ってくるね」

「わ、私も行きますよ!」

「いらない」

「ひどい!」

むつとするデスヘイズ。が、いつになく冷ややかな小舞の瞳に射竦められ、文句が言えなくなった。

小舞は少しかがむようデスヘイズに手招きして、耳元に口を寄せ
る。

「悪鬼の反応がパークの中にいくつかある。長引かせると新しく増えるかも。急がないと冗談抜きに人が死ぬ」

「だったら……!」

「だからこそ、デスヘイズはいらない。一人でヘイトレッドすら相手にできない、固有魔法も使えないあなたに出番はない」

頬を張られたような顔で口を噤むデスヘイズ。小舞はいたたまれない気持ちになりながら、不安げにこちらを見つめる一般人たちを視

線で示した。

「私がした話をあの人たちに伝えといて。魔法少女のあなたが言えばみんな安心する。分かった？」

「……」

デスヘイズが力なくうなずくのを見て取ると、小舞は俊敏な動きで駆け出した。

目指すは建物を異界化させている下位魔性存在、魔獣の陣取る西棟の吹き抜けである。

――

魔性災害はその名の通り災害だ。異界から流れ込むエネルギーか、それと結びつく人類の悪意や邪念のどちらかが閾値を超えることで発生する。どちらも極めて抽象的なため観測が難しく、災害の発生を予測することは地震並みに難しい。異界エネルギーの多寡次第では今回のように、悪鬼を飛ばして突如魔獣が発生することもあり得る。「だからって今起きなくていいじゃない、のっ！」

愚痴と共に放たれた超音速打撃が悪鬼を捉え、身体の半分を吹き飛ばす。すかさず追撃を加えるとあっけなく光の粒子へ浄化され、店舗に隠れていた一般人たちが歓声を上げた。

「さすがシャタードアース！」

「つよい、えらい、かわいいぞー！」

「あーちゃんありがとー！」

「出てこないで！ まだ残りがいるかもしれない。すぐ親玉倒すから、大人しくねっ！」

鋭く言つてのけると、返事を待たずに親玉への侵攻を再開する。さすがに人命の危機がある状況でチャホヤを喜べる精神はしていなかった。

道中、悪鬼の気配を感知するたび足を止めて退治しているため想定より進みが遅い。かといって災いの種を放置するのは真面目な性格が許さない。異界化の影響で弱小な悪鬼の反応は近場しか感じ取れ

なくなっているが、もしそうでなければグランパーク全域を退治のため駆けずり回っていただろう。

幸いなことに、まだ死人やパニックの現場には出くわしていない。被害が拡大する前に急いで――

「あれ？」

小舞は違和感を覚えた。被害が少なすぎる。

悪鬼はタイプ問わず醜悪な見た目をしている。そんな怪物に訳もわからない状況で遭遇すれば、パニックに陥り逃げどころではないはず。にもかかわらず、道中見た限りでは落ち着いて隠れる一般人が多かった。

「もしかして……いや」

小舞は走りながら頭を振って思考を切り替える。今は余計なことを考えず、魔獣に対応しなければ。

親玉の魔獣を倒し異界化を解除すれば、発生した悪鬼たちはひとまず非実体化して無力化できる。となると目先の悪鬼よりも魔獣を最優先にするべきか。

そう決めた小舞は、感知していた手近な悪鬼たちの反応を見なかったことにする。

「きゃーっ!？」

「いいんちよー!?! この、離せなの、なのっ!」

「消火器の正しい使い方ア！ 効かねエどうしよう!？」

が、聞き覚えのある悲鳴と声を聞きつけては無視もできない。

二階の手すりへ駆け上がり、斜めに飛び跳ね吹き抜け向かいの三階へ。勢い余ったため前転で受け身を取ると、三階通路で悪鬼に襲われる三人の少女が正面に見えた。

小舞のクラスメイトの三人組だった。委員長と二人の友達。夏休みもここへ遊びに来るほど仲良らしい。

悪鬼は鮮やかなピンク色が目に痛いホーニータイプだった。粘液の滴る触手が委員長の足に絡みつき、逆さ吊りにしている。

委員長の友人二人は、手近な店の商品をやたらに投げつけたり、消火器を噴射したりしているが、悪鬼に魔法の武器以外は効かない。

悪鬼は少女たちの抵抗をもとめせず、委員長の服の下へ触手を入れ込もうとしている。太腿から這い回る触手に、委員長が「ひっ」と短い悲鳴を上げた。

「くたばれすけべえっ！」

気圧の操作は間に合わない。委員長に巻き付く触手めがけ全力でハンマーを投擲する。

「わひゃあ!？」

委員長とほか二人の悲鳴が重なった。光の粒子が瞬いて委員長が放り出されると共に、触手を貫いたハンマーが後ろのおしやれなカフェ内部を木っ端微塵にしたからである。工事現場の騒音を輪唱させたような破砕音の中、投げ出された委員長がお尻を打ち付けて涙目になっている。

小舞は悪鬼へ駆け寄りながら、カフェ店へ手をかざした。

「全員伏せて!！」

「かなちさん!？」

「かなちー!！」

驚愕と安堵の声を上げる委員長たち。カフェ店の中から忠犬のごとく飛び出してきたハンマーがすっぽりと小舞の手に収まり、おなじみの打撃ラツシユで悪鬼を瞬時に浄化した。

一息ついてから、お尻をさすっている委員長たちの方へ歩み寄る。

「委員長、大丈夫?！」

「あ、安産型なので問題ありません」

「まったく理由になってないけど……?！」

冷静に見えて委員長も動転しているのかもしれない。

「いいんちよーっ!！」

しかしそれ以上にうろたえている二人が、泣きながら委員長に抱きついた。緊張の糸が切れたらしい。

二人を母親のようにあやししながら、委員長は小舞を見上げる。

「本当に助かりました。ありがとうございます、奏地さん。この御恩は忘れません」

「ん、いつもの委員長だ。もう大丈夫だね」

「だといいいのですが、何分状況が分からないもので……今何が起きているのか、本当に大丈夫と言える状況なのか。何かご存知でしたら教えてくださいただけると……」

「おっけ、時間ないからかんたんに言うね」

と、言いながらも小舞は三人に背を向けている。

「今から元凶を倒しに行く。すぐ終わるから、それまでどこかに隠れてて」

返答を待たずに走り出すと、背後から泣いていた二人の「ありがとー！」が聞こえた。

「ごめんなさい誰かいますか!? ケガありませんか!」

走り出した直後に小舞が駆け込んだのは、ハンマーの突っ込んだおしやれなカフェである。冷や汗を滝のように流しながら破壊された店内を点検していく。幸いハンマーが粉砕したのは客席と内装にとどまっており、厨房内の火元は無事だった。人の気配もない。

ほっと息をついて嫌な汗を拭う小舞。もし中に人が残っていたら大怪我は免れなかっただろう。につつきホーニータイプが顔見知りや襲っていたので我を忘れて動いてしまった。次からはもつと慎重にと自戒して店を飛び出し、歩みを再開する。

「だ、誰か、誰かー!」

ほんの三十秒と経たずに助けを求める声が聞こえた。立ち止まって耳を澄まし、発生源を特定するとともに舌打ちする。

上階だった。

近くに非常階段やエスカレーターの種類はない。まさかハンマーで天井をぶち抜くわけにもいかない。判断するやいなや、小舞は手すりを蹴って吹き抜け向かいに跳び、元居た三階通路の真上、四階通路へ三角跳びの要領で突っ込んだ。

前転で受け身をとって顔を上げる。

「たっ、助け、助けてくれ!」

そこには、悪鬼と決死の鬼ごっこを強いられる男性の姿があった。追われながらも小脇に抱えた上等そうなカメラは手放さない。

男性が空いた方の手を小舞へ伸ばし、上ずった声で助けを求める

と、すぐ背後のうごめく悪鬼の巨体から触手の雨あられが降り注いだ。

「うひゃあ!」

触手は男性を取り囲むように着弾し、黒い表面に開いた醜い乱杭歯の口吻が床を深々と抉る。そのうちの一つが身体を掠め、男性はもんどり打って倒れた。

知覚も動きも鈍い分、悪鬼は一度捕捉した生き物に対して非常に執念深い。足から血を流して倒れる男性にもぞもぞと近づいていく。

「待っ……!」

多少の距離があつた小舞は、必殺のハンマーを投げつけようとして動きを止める。脳裏にはつい先程破壊したカフェの惨状が過ぎつた。投擲を取りやめ一拍遅れて全力で駆け出す。床の舗装が足の形に凹んだ。

小舞が接近する間に悪鬼は触手をのたくらせ、数十本を一つに束ねて男性へ伸ばす。当たれば無数の口吻が有機物無機物問わず跡形もなく喰らい尽くすだろう。超音速の打撃もすでに間に合わない。

小舞にかろうじて出来たのは、左半身を前にしつつ、男性を庇うように触手の前へ滑り込むことだった。

『シヤタードアースっ!』

左半身を覆う重厚な鎧。青を基調に雲のような白と陸地のような緑の散らばつた、地球表面を思わせる装甲板が意思に応じて動く。肩当ての装甲が分離、小舞と男性を隠すような大ききへ拡大した。

束なつた触手は正面から装甲とかちあい、乱杭歯がぎやりぎやりと音を立てるも、やがて装甲の角度にいなされてつるりと滑る。通路の床方向に逸れた触手は、幾層もの床材を食い荒らして大穴を穿つ。

攻撃のスキについて小舞が右のハンマーを意識するも、まだ悪鬼の触手攻撃は終わらない。細い触手が数本、散発的に小舞の装甲板を打ち鳴らした。すべて問題なくいなし、弾き、床や壁、手すりが乱杭歯に抉られていく。

その間に気圧の操作は終わっていた。ハンマーの予定軌道上から邪魔な空気の壁はなくなっている。触手の雨が止んだ時点で、悪鬼は

超音速の反撃を受けることとなる。

が、小舞の見通しは甘かった。

「え」

ぐらり、と身体が揺れる。

小舞だけではなく、フロア全体が傾いていた。しかし悪鬼の身体は平行なまま。どういふことかと首を傾げているうちに急激な浮遊感に襲われ、メキメキと何か大きな破壊音が鳴り響く。

「やばっ」

床が抜けた。悪鬼の触手が穿った大穴に加え、弾かれた小さな触手が空けた小穴が構造を傷つけ、悪鬼と小舞たちの質量を支えきれなくなった。

悪鬼に行動を許さず倒すのに慣れていた小舞は、触手の威力を失念していた。魔性存在の触手は分厚い鉄板を紙のように貫く。基本的に獲物を捕まえるだけのホーニータイプでさえ、最低限その程度の威力があるのだ。

小舞はとつさに後ろの男性を右手のみで抱え、装甲板へ魔力を込める。瓦礫を弾きながら粉々の残骸といっしょに、三階の通路へ身を躍らせた。

小舞にとっては想定外の事態だが、悪鬼にとっても同じだったのだろう。共に三階へ降り立った悪鬼は困惑したように、周囲の残骸へもぞもぞ触手を這わせている。

「このっー」

小舞は好機を逃さない。抱えていた男性を下ろし、装甲板を縮小させて悪鬼へ急接近。振り回したハンマーが次々に命中し、悪鬼はあつけなく浄化された。

小舞が男性を振り返ると、シャッター音。男性は生傷と埃にまみれながらも上等そうなカメラを構え、小舞に向けていた。生きるか死ぬかの体験をした割にはタフで、小舞は気が抜ける。

「……その様子だと大丈夫そうですね」

「あ、ああ。すまない、恩に着る、助かった」

「そうですね。今はパーク内にたくさん悪鬼がいます。危ないので店

の中に隠れといてくださいそしたらすぐ解決します」

何か物言いたげな男性を置いて、小舞は先を急いだ。詳しく説明している時間も野次馬根性を注意する労力も惜しい。

小舞は同じような手順で、襲われていた一般人たちの元へ駆けつけ、悪鬼撃破の後で最低限の要求だけ突きつけるあわただしい人命救助に奔走した。中々前へ進めないのがもどかしい。どうにか目的の西棟吹き抜けが目前に見えてきたところで、不安に襲われた。

悪鬼の数は予想より多い。もしかすると東棟のデスヘイズのところにも出現しているかもしれない。デスヘイズはまだ小舞のサポートなしに悪鬼と相対したことがなく、撃破できるかどうかは怪しい。「いやでも、隠れてたら大丈夫だよな、うん」

今更引き返すと本当に犠牲が出るかもしれない。

小舞は不安を振り切って、人助けの多い道中を再開した。

――

東棟、一階。フードコートの食器回収カウンター、その陰にデスヘイズは身を潜めていた。こわごわ顔を覗かせると、一階の広々とした空間を闊歩する二つの塊が目に入り、悔しげに唇を噛みしめた。

二体の悪鬼が現れたのは小舞が去ってから十分足らずのことだった。デスヘイズが言われたとおり「シャタードアースがどうにかしてくれているから皆は隠れているように」と伝えて回り、人々があのシャタードアースが動いているならと指示に従い壁際の店舗に身を潜めるか否かというとき、その二体は落ちてきた。天井のガラス張りをぶち破って一階に落下してきたらしく、分厚いガラス片が一階に降り注いだ。

当然人々は悲鳴を上げて逃げ惑ったが、意外にも悪鬼は見向きもせず、所在なさげに触手をのたくらせて一階を徘徊し始めた。皆が息を潜め静まり返った広い空間に、ぬちよぬちよと粘性の高い音が響いている。

デスヘイズは占拠された一階をにらみながら、つい先刻の言葉を何

度も反芻していた。

『固有魔法も使えないあなたに出番はない』

「……っ！」

デスヘイズはバトルドレス姿に変身済だ。春の霞を固めたような大鎌もすっかり抱え込んでいる。にもかかわらず、あの悪鬼たちに對抗できる気が欠片もなかった。あまりの情けなさに涙が浮かぶ。

「さっきから何を百面相しているんです？」

「ひっ」

唐突に声をかけられ、デスヘイズの肩が跳ねる。

声の方向を見ると、カウンターにほど近いフードコートの客席に老婆が腰掛けている。どこにでもいるポロシャツとストラック姿の老人だが、悪鬼を前にしながら泰然としているのはどこかちぐはぐだ。それどころか、厨房からくすねたのかどぎつい蛍光色のドリンクをちびちび嗜んでおり、寛いでさえいるようだ。

「あ、危ないですよそんなところにいたらー！」

「平気です。ヘイトレッドは見た目の通り、目も耳も鼻もない。これだけ離れていれば万に一つはありませんよ」

静かに断言する声音からは、虚勢でも痴呆でもなく絶対的な確信が感じられた。

「く、詳しいんですね？」

「長く生きるとね、魔性災害に巻き込まれるのも一度や二度じゃないんです。三年前以来少なくなりましたが、それより前は魔獣級の災害は日常茶飯事でしたからね。お話するなら、貴女もこちらに来られては？」

デスヘイズは悪鬼の方向から目をそらさず、おっかなびっくり座席へ近づいていった。老婆の言うとおり、悪鬼たちはデスヘイズの動きに見向きもしなかった。音を立てないように気をつけて、老婆の隣へ腰を下ろす。春霞の大鎌は手放さず両腕で抱え込んだ。

老婆は悪鬼をのんきに眺めながら、ドリンクを一杯。

「ふう。先程からなにかを悔しがっていましたね。答えなくて結構、当たててみせましょう。私は魔法少女なのに一人では悪鬼と戦えない、

悔しい、情けない。そんなところですか？」

凶星だった。

突かれた心から、本音が次々に溢れ出す。

「……はい。おししよーに、シャタードアースさんにばかり戦ってもらって、私には力があるのに、これでいいのかなって……」

「いいんですよ」

「えっ」

即答だった。

変わらない断言口調で老婆が続ける。

「シャタードアースさんのことはよく存じております。あの子の力はどんな魔法少女よりも強い。魔王級の魔性存在でもなければ、歯牙にもかけません。任せておけば安心ですよ」

「でも……」

「それに、戦う理由がはっきりしている。だから迷いが無い」

老婆はデスヘイズと目を合わせた。落ちくぼんだ眼窩の中から、鋭い眼光が光る。

「あの子は戦うことで自分を認めてきました。換言すれば、戦うことでしか自分を許容できない。生きている事実を受け入れられない。魔法少女として戦うことだけが、あの子の生きる縁よすがなのです。あなたは違うでしょう、デスヘイズ？」

一度言葉を切って、

「愛の溢れる家族がいる。歌や絵の才能にも恵まれている。純真な努力家気質はどこにいても好かれるでしょう。わざわざ戦いの道を選ばずとも十分満たされている。それでも魔法少女であろうとするのは、そうですね、大方人助けがしたいとかどうか、あやふやな正義感に酔っているからでしょうか？」

「……っ」

これも凶星だった。

魔法少女の力に目覚めてから、人助けのための素敵な力だと両親に教えられた。その力を隠したままでいるより、力を生かして世の中の役に立ちたい。あやふやで中身の無い青い動機が、デスヘイズの戦う

理由だった。一度痛い目にあつて諦めないのは、あつさり諦める自分に失望したくないからだ。諦めることで浅い理由だったと追認したくなかったからだ。

老婆はほのかな嫌悪を声ににじませた。

「あなたが善良なのは分かります。ですが半端な気持ちで命を危険に晒してはいけません。たとえその結果として魔性災害が世に増えたとしても、子供が進んで重荷を背負うのはいただけない」

デスヘイズには老婆の言い分が正しく聞こえた。曖昧な動機で命を賭け、ケガでもしたら家族が心配するし、自分でも嫌な思いをする。そうなるくらいなら戦わない方がいいのかもしれない。

と、理屈で理解しかけたその時、デスヘイズの脳裏に小舞の音が蘇った。

『戦う以外に生き方を知らないから』

寂しくて空っぽな笑顔。悲しみと諦めのないまぜになった、今にも消えてしまいそうな声音。

誰よりも強い憧れの彼女が見せたその弱さにデスヘイズは打ちのめされた。だからこそ今日ここにいる。

自覚したとたん、デスヘイズは立ち上がっていた。その瞳はまっすぐ二体の悪鬼を見据え、小揺るぎもしない。

「ありがとうございます、おばあさん」

「はーっ」

大鎌を大上段に構えびたりと保持して、一歩ずつ悪鬼の方へ接近する。

「なんとなく世の中の役に立ちたくて、誰かを助けられる自分になりたくて、なんとなく魔法少女をやりたいかったです。だけど今は違う」

「ほう、どう違うのです?」

グラスを置いて面白そうに片眉を上げる老婆。

デスヘイズは恥じらいもなく高々と、戦う理由を宣言した。

「なんとなく世の中の誰かじゃないっ! 絶対、おししよー、ただ一人のために戦う! おししよーが一人で戦って寂しげに済むよう

に、私が助ける、戦う、役に立あああつ！」

戦国時代の名乗りよろしく、絶叫しながら二体の悪鬼へ突っ込んでいく。さすがの鈍い悪鬼でもデスヘイズの存在に気づき、二体同時に触手を伸ばす。

デスヘイズが大上段から思い切り大鎌を振り抜くと——大鎌が霞んで消えた。

「『デスヘイズ』！」

山間にかかる柔らかな霞のように形を失い、伸び来る悪鬼の触手に絡みつく。霞の内部がかすかに煌めいたかと思うと、触手は輪切りのハムとなって崩れ落ちた。

霞は触手だけでなく、その元である本体にも絡みついていく。変幻自在にして触れることすらできない霞が悪鬼の巨体を覆い尽くすと、デスヘイズは何も持っていない利き腕を逆手に振り抜いた。

瞬間、二体の悪鬼が崩れた。まるで入念にみじん切りにされた野菜のごとく身体をとろけさせ、光の粒子へと浄化され、消えていく。

悪鬼にまわりついていた霞はデスヘイズの手元に収束し、元通り大きな鎌を形成する。霞んだ色合いの大鎌を見つめ、デスヘイズはこわばった表情で冷や汗を流した。

「お、思ったより怖いな、固有魔法……」

戦う覚悟を明確にしたデスヘイズは、直感的に固有魔法の使い方や内実を把握していた。実際使ってみると想定以上の威力で、ちよつと自分で引いている。

固有魔法『デスヘイズ』は、端的に言うくと大鎌を分離させる魔法だ。大鎌の元の体積分を分離させることができ、たとえば元の半分の大きさで二本、三分の一の大きさなら三本の鎌を分離できる。特異なのは、分離する鎌のサイズを元より大きくするのは不可能な一方、縮小する分には無制限であることだった。デスヘイズの想像の及ぶ範囲でありさえすれば、ミリ、マイクロ、ナノ、ピコ、またはそれより小さい鎌を元の体積分分離できる。切り離れた鎌は微小な刃となり、外から内から細胞の隙間から対象を切り刻む霞の屍衣として機能する。もちろんうっかり味方や一般人を巻きこめばケガでは済まない。

気をつけて使っていこう、とデスヘイズは冷や汗を拭う。

「な、なんだ、やつつけてくれたのか？」

「デスヘイズちゃん、配信だとまだまだだって言われてたけど……」

悪鬼の目立つ巨体が光の粒子になったことで、隠れていた一般人たちが店舗から次々に出てきた。驚きと称賛のこもった目がデスヘイズに注がれる。

「デスヘイズちゃんかつこよかったよー！」

「配信なら投げ銭不可避ー！」

「魔法少女サイコー！」

「ありがとーごさいまーす！ でもまだ終わってないでーす、みんな隠れててくださいーい！」

よく通る澄んだ声で答えると、大衆たちは天井の依然真つ暗な空を見上げ、めいめいの店舗へ再び隠れた。しかし先程と比べると緊張が緩み、そこからひそひそ声が聞こえる。

デスヘイズは見える範囲で全員隠れたのを見て取ると、胸の前で握りこぶしを作った。

「ようし、強くなったぞ私！ 待っててくださいいねおししよー、もう寂しい思いなんてさせませんから！」 と、その前に

新しい力を手に張り切って小舞の後を追おうとするが、その前に老婆のいた座席を振り返る。戦う理由を見つけられたのは、あの老婆と話したおかげだ。一言お礼を言いたい。

しかし例の座席には、空っぽになったグラスが一つぽつんと置かれているのみだった。今更どこかに隠れたのだろうか。

引つ張り出すのも悪いので、手でメガホンを作って、

「おばあさーん、お話ありがとうございましてあー！」

とだけ言い置いてくるりとターン、小舞の走り去った方向へ駆けていく。

デスヘイズが行った後、老婆は厨房の奥から再び姿を現した。

彼女はお代わりの蛍光色ドリンクを片手に、くつくつ笑う。

「図らずも発破をかけてしまいましたか。若いつていいですねえ……

ぷはっ、ああ添加物、添加物」

西棟吹き抜け、五階通路。小舞は異界化の元凶、魔獣と二十メートル程度の距離をおき、睨み合っていた。

魔獣の外見は悪鬼よりもはるかに小さく、儂い。大型犬ほどの体躯に黒い瘴気を纏い、獣らしい四本足をしているが、全身が陽炎のように揺らめく様は、黒煙がたまたま獣の形を取っているだけのように見える。頭部にあたる部分にぼっかりと浮かぶ一等星のような赤い輝きが、一つ目玉として小舞を睨み据えている。

「……………」

不意に、小舞が踏み込んだ。

悪鬼であれば反応さえ出来ない神速の踏み込み。長柄のハンマーが音速を超えて魔獣へ迫り、しかしそれはフェイントだった。巧みな手首の返して軌道を捻じ曲げ、擬似的な真空の通り道に沿って必殺の打撃が振るわれる。

魔獣は赤い一つ目をぎらりと光らせ、見事に対応した。揺らめく身体が霞み、打撃軌道から後退。

すかさず身体の内側から細い触手を無数に生やして、吹き抜けの中央にある大型広告ディスプレイへ伸ばす。同時に小舞の方にも嫌がらせのごとく触手の刺突をお見舞いするが、バトルドレスの装甲に弾き飛ばされる。その間に、ディスプレイへ絡んだ触手を収縮させウインチの要領で通路から退避した。

触手に絡まれたディスプレイの骨組みがきしむ。巨大な金属構造体を大きく揺らしながら、魔獣はワイヤーアクションによって広い空間を飛び跳ねる。吹き抜けの中央に釣り下がる大型広告は格好の足場兼遮蔽物として魔獣に味方していた。

「このっ、ちょこまかとおー！」

小舞は歯噛みしてそれを追いかけた。ぐらぐらと揺れる大型ディスプレイに注意して、小さな魔獣の影を追う。

ようやく三階の通路で魔獣が動きを止め、両者は再び睨み合いの状態となった。すでに何度繰り返したか分からないいたちごっこ的一幕である。

小舞は西棟の吹き抜けにたどり着き、魔獣の姿を認めるや否や不意打ち気味に殴りかかったものの、それきり触手を使った立体的な回避行動に翻弄されっぱなしだった。

魔獣は悪鬼とは違い多少の知能があるため、敵わない相手からはひたすら逃げる。その上触手の保有量と性能は全種類の悪鬼を凌駕するので逃げに徹した場合の厄介さはすさまじい。

幸いだったのは、吹き抜けに面する全階層に一般人がいないことだろう。よほど秩序立った避難が行われたらしく、通路に面する店舗はすべてシャッターが閉じられている。巻き添えを気にする必要がないのは大きな利点だ。

それにも増して不利な点が、小舞と状況との相性の悪さだ。広範囲に大威力の破壊をもたらす「地球っぽいことができる」固有魔法は、倒壊の危険がある屋内戦と極めて相性が悪い。ぷち・サイクロンのように出力を絞るには数秒のタメが必要になるが、魔獣はどうかしてそのタメを察知し牽制の触手と攪乱機動で対抗してくるし、そもそも威力を落としてさえ倒壊の危険は避けられない。

そうして小舞は堂々巡りを強いられていた。

「魔法少女ナメんなよう……」

が、状況の不利程度で膝を折る小舞ではない。

幾度目かの睨み合いの最中、小舞は魔獣に対し手のひらを向ける。気圧の低下と上昇による気圧傾度極大化、ぷち・サイクロンの予備動作だ。

危険を察知したのだろう、魔獣は俊敏に触手を伸ばす。広告ディスプレイの骨組みに強く絡みつき、吹き抜けの空間を舞う。

しかしその逃走ルートにはすでに、小舞が待ち構えていた。

気圧操作でノーモーションのフェイントをかけ、魔獣が触手を伸ばすと同時に飛び跳ねて進路上へ先回りしたのだ。

触手に引っ張られる悪鬼と空中で対面する小舞。出迎えるように

ハンマーを振り抜く。

しかし魔獣はまだ逃げる。別方向へ新たな触手を伸ばし、直角に軌道を変えた。強い負荷のかかった大型ディスプレイの骨組みが耳障りな金属音を奏でる。

「しっしっしっしっ！」

小舞は空を切ったハンマーの慣性に従ってくるりと一回転。その勢いでハンマーを魔獣へぶん投げた。

赤い一つ目が悲鳴でも上げるように強く輝き、莫大な量の触手が盾の形に収束する。小舞のハンマーはそのことごとくを光の粒子へ浄化していくが、わずかに速度を落とし、魔獣の本体には掠るだけにとどまった。

ここで決める。小舞はハンマーに向け手をかざす。

中空を横切っていたハンマーは通路に着弾する間際、ぐにやりと軌道を捻じ曲げて小舞の手へ舞い戻ろうとする。

魔獣は触手に引っ張られながらも赤い目を煌めかせるが、先程の盾で消耗したのだろう。飛来するハンマーに跳ね飛ばされ、本体の半分が消失した。

残った上半身は、大型ディスプレイの骨組みにへドロのごとくへばりついている。

小舞は中空でハンマーをキャッチしたことで身体が流され、一度通路の方へ着地した。触手の大部分を失った瀕死の魔獣を前に、緊張を緩める。

あとほどどめを刺すだけだ。

通路からハンマーを投げつけるわけにはいかない。例の大型ディスプレイの骨組みが、度重なる触手の負荷を受け軋んでいる。天井と壁面への接合部分のいくつかも拉げている。これ以上衝撃を加えると、巨大な金属と機械の構造体が落下しかねない。

そつと骨組みへ飛び移って、確実に浄化するしかない。

そうして小舞が通路の手すりへ足をかけたとき。

聞こえるはずのない声が聞こえた。

「おししよー！ お手伝いに来ましたよーっ！」

「はっ！」

方向は一階から。五階手すりから見下ろす小舞の視界に、パステルカラーの和ロリ衣装が飛び込んでくる。

デスヘイズだ。彼女はきよろきよろ周囲を見回してから上を見て、小舞と目が合うとパッと笑顔を咲かせた。

「おっししよー！ 私固有魔法覚えました！ 力になれますよー！」
めきめき、と。

小舞が言い返す暇もなく、金属の破断する音がした。

吹き抜けの空間三分の一を占める、大型広告がシャンデリアのように揺れている。そこにへばりついた魔獣の上半身は、どろどろと黒くうごめく液状に変化して、骨組みに絡みついている。刹那の間に魔獣としての形を保てなくなり、最後にひときわ強く赤目を輝かせて消滅した。

その赤目の輝きには魔獣の元となった人の意思——悪意が満たさ
れていた。

「逃げて！ けほっ！」

反射的に叫ぶ。慣れない大声にむせてしまう。破断する金属の音で、なけなしの音量は塗りつぶされた。

骨組みを支えていた天井と壁面との接合部が、魔獣の悪意ある捨て身によって溶解した。元々触手の絡んだ負荷で弱っていたのも災いしたのでだろう。

がしやん、と最後に破滅的な音を響かせて、大型ディスプレイ広告が落下を開始した。

「え」

デスヘイズは状況を理解できていない。五階の小舞からゆっくりとディスプレイへ視線を映し、呆然としている。棒立ちになっている位置取りは最悪の直撃コース。いくら変身状態の魔法少女とはいえ五階建ての高さからトン単位の重量物が降ってきては、即死確定だ。

そう認識した瞬間、小舞の思考が加速する。

デスヘイズは固有魔法を覚えたと言っていた。魔法を使ってどうにかできないか。できない。呆けている彼女が状況を理解し驚愕す

る段階を経てやっと動き出すのと、ディスプレイの落下とでは明らかに後者の方が速い。

到着まであと一・五秒。

考えながら、小舞はハンマーを放り投げ、宙へ身を投げる。

では自分が魔法を使うのはどうか。気圧操作、水脈操作、地殻変動、地磁気、引力、自転と公転——思いつく端から却下していく。小舞の魔法は質量一トンを超える金属構造体をたやすく消し飛ばすことができるが、下手に使えばデスヘイズもろとも建物が吹き飛ぶ。かといって出力を調整する猶予もない。

到着まであと〇・九秒。

だから小舞は、最速にして確実に選択肢を取った。

頭を地面へ向けて手すりを蹴っ飛ばす。手すりの骨組みが引っこ抜かれ床面が抉れるほどのエネルギーが、小舞の小さな身体を矢のように弾き飛ばした。

到着まであと〇・四秒。

落下物を追い抜く。態勢を変える余裕はなく、両手について着地。肩関節から嫌な音が鳴る。狙い通りデスヘイズの真横だ。

デスヘイズは目と鼻の先に迫った重量物に気を取られ、小舞に気がついていない。

到着まであと〇・二秒。

小舞はデスヘイズを乱暴に引き倒し、上から覆いかぶさる。

「伏せっ——」

瞬間、到着。

小舞の言葉と意識は莫大な衝撃と轟音で、あっけなく消失した。

——

娯廷市魔獣災。突如発生した下位魔性存在、魔獣による異界化災害はそのように呼称され、世間では大いに注目と恐怖の的となった。

魔獣以上の魔性存在は広範囲を異界に取り込み、その核となった悪意や邪念の通りに人々を喰らう。この知識は231事件以来広く知

られていたし、マジストの流行によって知らない者の方が少ないほどだったが、まさか自分が現実とその被害にあうと想定していた者はほとんどいかなかった。前触れもなく発生した抗いようのない災いへの恐怖はSNSに乗って拡散し、メディアに煽られ、専門家たちがいかにも深刻そうな顔をすることでまたたく間に伝染していった。人々は異界から音もなく忍び寄る怪物を恐れた。規制線の張られた現場には連日野次馬とメディアが詰めかけ、ワイドショーが魔性存在の名を口にしない日はしばらく来なかった。

そうして絶望的恐怖に注目が集まったからこそ、希望たる魔法少女もまた大きく取り沙汰された。

『お手柄、魔法少女シャタードアース』

『人気配信者が魔獣を討伐か』

『協会は取材拒否』

『シャタードアース、目撃者多数』

『魔法少女、グランパークの設備を破壊』

世間は被災地で悪鬼と魔獣を退治したと言われる魔法少女、シャタードアースに興味津々だった。グランパーク名物の円柱形大型ディスプレイ広告や、店を巻き添えで破壊したかどで責め立てる論者もないではなかったが、ある数字に下支えされた称賛と支持が圧倒的多数を占めた。

ある数字とは、死者数ゼロのことだ。

魔獣発生当時建物内に居合わせた従業員、一般客のべ13362名。これほどの数の人命を守護し、孤軍奮闘獅子奮迅の活躍で悪鬼を薙ぎ払い元凶の魔獣を打倒した。発生当時パニックを起こし軽傷を負った人々が負傷者として計上されてはいたものの、勇気ある迅速な行動で命を守り抜いた方に光が当てられた。

シャタードアースが命を救ってくれた。助けてくれた。魔法少女とはかくも素晴らしく勇ましい。

当人が聞けばヨダレを垂らして喜びそうなチャホヤが、世間にあふれていた。実際に悪鬼から助けられた者、助けられた者の家族などの関係者、関係はないが魔法少女が好きになった者。多くの好意的な支

持者たちが、人気配信者でもあるシャタードアースの生配信も今か今かと待ちわびた。

しかし災害の翌日、翌々日になってもシャタードアースは沈黙していた。配信はおろか、「きょうもいちにち」などのしようもないSNS投稿さえない。

今こそチャホヤされどきだろうに何をしているのか。普段の彼女を知るフォロワーたちは訝しんだ。

そうして数日が過ぎ、魔法少女礼賛の波がピークを超えて下降し始めたとき。

災害発生から一週間後の朝にようやく、シャタードアースは配信を始めたのだった。

――

【謝罪配信】シャタードアースであります【ごめんなさい】

「本日はお集まりいただきましてありがとうございます」

コメント

：きたああああ

：あーちゃん、助けてくれてありがとう！

：うちの娘がお世話になりました

：みんな待つてたぞ！

：こっちこそありがとうございます

：!?

：包帯だらけじゃねーか！

：配信タイトルどういうこと??

：謝罪とは

：それよりケガ大丈夫？

「あつ、はい、このケガはワタクシめの不注意が招いたといいますが、自業自得でありますとのことでありまして……ご心配が、えー、五臓六腑に染み渡ります」

：あーちゃんありがとうー！

：ネタなのか何なのか

：スキあらば視聴者を置いてけぼりにするな

：イキりも好きだがしおらしいのもかあいいじゃねえか

：ケガしてるのに配信して大丈夫なの？

：無理しないで

：どういうことか説明してくれ

ウェブカメラに向き合う小舞は、満身創痕だった。頭と右目を包帯でぐるぐる巻きにして、右手を肩から吊り下げている。画面外では右足にもギプスを着けていた。魔獣の最後の悪あがきからデスヘイズをかばった結果である。

落下した金属構造体は、小舞の左半身を防護する、地球のような鎧に直撃した。鎧は衝撃に応じて小舞の魔力を吸い上げ、より重厚で巨大な装甲板を形成、致命的ダメージを完全に分散させることに成功した。

とはいえ、それは左半身のみを無傷で守るだけだった。むき出しの右半身は飛散した金属片や砕けた床材の破片などで血まみれになった。魔法少女の頑丈な身体でなければ身体の右側だけが粉々になっていたかもしれない。

しかし小舞はそれだけの代償を払って、守りたいものを守りきった。

「あつ、デスヘイズは無事です。ちよつとだけ体調を崩していますが、ケガはありません」

：そりや何よりだけどあーちゃんは？

：ほんとに無理はしないで休め

：すぐく痛そう・

：お願いだから自愛して

「はい、でもこれだけは早く言わないとって思つて……迷惑かけて本当にごめんなさいっ！」

小舞は重苦しい表情で頭を下げた。

疑問符でうまるコメント欄。

それに気づかず小舞は、涙声を絞り出す。

「が、がんばったんです、ほんとに。けどたくさんの方がケガして、いろんなものを壊して、迷惑をかけました。ダメな子でごめんなさい。あんなに調子に乗ってたのに、ごめんなさい、ごめんなさい」

小舞はひたすらに頭を下げた。ごめんなさいを連呼した。世間は受け入れてくれないと分かっているけど、悪あがきをするように謝り続けた。

小舞は九年の経験で魔獣災害を一度ならず切り抜けてきた。その経験から学んだのは、世の中が完璧を求めていることだ。

魔獣の異界化に一般人が巻き込まれたなら、一人の死者もけが人も出してはならない。現場にあるものを決して壊してはいけない。でなければ『誰が助けろと頼んだ』『こんなケガで生きていくなら死んだほうがマシだった』『これだけたくさんものを壊しておいてヒーローを気取るな』『修繕費用で何人か死んだ』などと叩かれることになる。

今回はどうにか死人は出さなかったものの、けが人はいるしモノは大量に壊した。ハンマーを投げ込んだ店だけでなく、鋭い踏み込みのたびに床には凹みができていたし、悪鬼の触手で床が崩れるし、極めつけはあの大型ディスプレイの落下だ。

世間は魔法少女に怒り狂っている。

その思い込みとケガの痛みが、小舞が配信から遠ざかっていた原因だった。

もうこれまでのような人気者は気取れない。フォロワーたちは軒並み手のひらを返したように罵詈雑言を叫んでいるだろう。それでも「やらかした」と思うなら、ごめんなさいをしなきゃいけない。ちっぽけな小舞のプライドは、逃げずに謝ることを選んだ。むしろリアルの方でも壊した店の女主人にはすでに謝りに行ったが話が噛み合わず、その他の破壊痕は広範囲につき誰に謝ればいいのか分からない。ゆえにバッシング覚悟で謝罪配信を始めたのだ。

とはいえその覚悟は空回りだった。

数え切れないくらいごめんなさいを言って、頭を下げて、鼻がツンとして目の奥が熱くなってくる。

ひと呼吸入れるために目元を拭い、顔を上げる。下から上へ濁流のように流れるコメント欄に目が止まり、言葉を失った。

・泣かないで

・誰もあーちゃんを責めようなんて思っていないよ

・もういいから頭を上げろ

・成し遂げた偉業に対して卑屈すぎるだろ

・1400人弱の人命を救った事実を誇れ！ 胸を張れ！

・けが人つつつても膝擦りむいたとか足くじいたとかのレベルだからな？

・つティツシユ

・テレビつけてみ？ 誰もひどいこと言うやついないだろーが

・今すぐエゴサしろ

・かわいいそう

・かわいい

・ごめんじゃない、どういたしましてだろ

・みんなありがとうって言ってるよ

「ほえ……っ？」

コメントの内容がしばし理解できなかった。ようやく意味を咀嚼すると、幻でも見たような気分になる。

夢でも見ているのかと呆然としてSNSを立ち上げ、エゴサしてみる。コメントの指摘通り、シャタードアースの頑張りを皆口々に称賛していた。承認していた。それは小舞の知る世間と比べてとても優しかった。

頑張ることは当たり前、完璧にこなすことも当たり前で誰からも感謝されない。ほんのわずかでも粗があると、嬉々として吊り上げて袋叩きにする。そんな世界とはかけ離れた優しさが溢れていた。

安堵と脱力を覚えた小舞は、緊張の糸が切れるのを感じた。目からとめどなく涙があふれる。

「何よこれ……いつからこんなに……優しい世界になったのさ。うるせーやい、泣いてないわ！ ちよつと、安心した、ただだもん……！」
・ちよつと男子ー

：泣ーかせた泣ーかせた

：いつものあーちゃんに戻って

：こんなに卑屈だとは思わなかった

：卑屈なところもかわいいよ

：今日だけはチャホヤしてやるよ！ オラ喰らえ！

：すごい、えらい、かわいい！

「どつてつけたように褒めやがってコノヤロー、ふふっ」

しばらくコメント欄に返答していると、小舞は胸がいつぱいになった。

世の中は昔よりも優しくなっている。それだけ胸に刻み込んで配信を切り上げようとしたところで、一つ思い出す。

魔獣の元へ向かう道中覚えた違和感。巻き込まれた一般人たちの冷静さ、被害の少なさ、そして魔獣のいる吹き抜けで完璧に退避が済んでいた都合の良い状況。あれについて配信で触れておきたい。

「あ、そうだ。この中にあるときパークに居た人いれば聞きたいんだけど。周りにやたら落ち着いてる人いなかった？ 冷静というか、そんな感じの」

：何のこと？

：あの状況で落ち着けるやつとかいなくね

：いや、居た。めちやくちや冷静で店に隠れろとか指示してた人

：メンタル超人かな？

：あのダンディおじには助けられた

：おじ？ 高校生くらいの女の子じゃなかった？

「やつぱり。それマスコットさんだわ。マスコットさーん、ありがとうねー」

：マスコット？

：都市伝説じゃねーか！

「都市伝説？ 何それ。マスコットはボランティアだよ。今回みたいな災害に巻き込まれたとき、率先して避難誘導とかして魔法少女が戦いやすいようにしてくれんの。死人が出なかったのはほとんどこの人たちのおかげかも。というわけでありがとー！」

：ありがとー！

：マジで!?

：陰の功労者をねぎらう英雄の鑑

：俺もマスコットになりたい、どこで応募できる？

：協会の対人戦闘暗部じゃなかったのか（驚愕）

「協会の？ あの人たちはタクシーみたいなものよ。マスコットになりたい人は、魔性存在と魔法少女の勉強してマスコットを名乗ってね。応募とかじゃなくて、みんな自称でやってるから」

：なるほどだからおじだったり女の子だったりなんか

：了解、勉強してきます！

：ネットに勉強できるようなソースあるかな？

：協会のHP使いにくすぎて草 平成初期かよ

：書籍もネット情報も異様に少ないのよな

：あーちゃんに教えてもらおう・いや教えるの下手だもんな

「下手じゃねーわ！ 下手じゃないけど、確かマジストのフレイムブレイズちゃんが講義みたいな配信してるから、興味あれば——」

マスコットのなり方を話題に、配信は結局小一時間続いた。

話が一段落したところで小舞のケガを心配するコメントが殺到し、たしかに無理はいけないので、今度こそ配信を切り上げたのだった。

――

さて、今回の魔獣災で小舞以上に凹んだ人物が一人いる。世間から袋叩きにされると思い込み、これまでのチャホヤ配信者生活を手放すことになる絶望よりもはるかに深く、どん底まで落ち込んだ人物。

「ごめんなさい、おししよー……」

「起きろーいー！」

「うきやあ?！」

デスヘイズこと、佳住しえである。布団にくるまってかたつむりになっっていたので、元気いっぱいの小舞は敷布団ごと引っくり返してやった。

小舞と同じマンション、同じ階で二つ隣の部屋がしえの転居先だ。小舞が死体みたいに落ち込んでいた一方でしえも消沈しており、実に一週間ぶりの対面だった。

ひっくり返ったしえはぼさぼさの髪を整えもせず、泣き腫らした顔で小舞を見上げる。小舞の頭と右目、右腕と右足の傷に松葉杖を見るなり、嗚咽を漏らし始めた。

「私は弟子失格です……やっとな固有魔法を覚えて、お役に立てると思っただのに、おししよーの足を引っ張って大怪我を……うっ、うう」「泣くなアー！」

「へみゅっ」

小舞はしえの頬を左手で挟み込み、強引に顔を上げさせた。

「失格かどうかは師匠の私が決めること！ 勝手に決めつけて落ち込むなバカモノ！」

勝手に決めつけて落ち込んでいた張本人とは思えない言いようである。チャホヤにより自信を回復した小舞には師匠らしい威厳があふれていた。

「でむお、でむお……！」

「デモもストもなあい！ このケガは私が初めての弟子の世話焼いて作った名誉の負傷だ！ お前が気負うな、私が誇る！ 落ち込むヒマがあつたらおししよー超かつこいいステキって称えろ！」

しえが小舞の右手を振り払う。

「た、確にかっこよかったしステキでした！ でもそれとこれとは話が別です！ 私が何も考えずに、慢心して出ていったからおししよーは……！」

「その何が悪いんじやい！」

「きやつ!？」

小舞はタツクルをかました。無事な左足で床を蹴るが、右足が使えないため倒れ込む前提だ。松葉杖が放り出される。

小舞の全体重がしえの身体を浮かせ、先程引つpegがされた掛け布団と敷布団の塊に押し倒す。

衝撃に目を閉じたしえがまぶたを開けて見たのは、間近に迫る小舞

の顔だった。調子に乗ってイキる子供っぽい小舞の顔は、しえにとつては自信に満ち溢れたステキな顔に見えた。

鼻先がふれあい、長いまつげが肌をくすぐり、互いの息遣いを感じる至近距離。

小舞はふつと表情を緩めて、ゆっくり言った。

「私を手伝おうとしてくれたんでしょ？　しかも土壇場で固有魔法まで覚えてさ。すっごいじゃん、天才じゃん、超えらいじゃん」

「そ、そんなこと……だって結局」

「結果はどうあれ、私は嬉しいよ。手伝おうとしてくれた。しえは頑張った。それだけは誰にも否定させない。しえ自身だろうと、否定させないよ」

しえに身体を預け、耳元に口を持っていく。無事な左手でしえの頭をあやすように撫でた。

「よく頑張ったね」

しえは息を吞んで絶句し、硬直する。数秒後に身体を震わせ、涙まじりに反論した。

「ひどいですよ。ずるいですよ。おししよーは、優しすぎます。ひどい人です……」

「そうねえ、そんなひどいやつの弟子なんだよお前は。気分は最悪かな？」

「分かってるくせに、もう、もう……っ！」

小舞の小さな身体に腕を回し、控えめに抱きしめるしえ。ケガを氣遣っているというより、繊細な身体を壊さないよう氣遣っているようだった。

ひとしきり小舞を抱いて嗚咽を漏らすと、しえは身体を離して、涙と鼻水だらけの顔で決然とこう結んだ。

「私はきつと強くなります。おししよーみたいに立派な魔法少女になつて、隣に立ってみせます。きつと、絶対」

「……うんっ！」

小舞も何か覚悟を決めた感じの顔で、それっぽくうなずいた。

(なんかよくわかんないけど、元気になつたからヨシ！)

実はこの女、何も考えていなかった。しえの布団をひっくり返した時点で、どのように元気づけるかまったくのノープランだったし、なんなら喋っている間も出任せだった。

すべては自信のなせる技。こんなにチャホヤされてる自分なら考えなしでも弟子を励ますくらいできるだろう、と。勢いと思い込みだけで生きているがゆえの暴挙であり快挙だった。

しばらく至近距離で見つめ合っていた二人だが、しえの視線が熱に浮かされたように陶然としたので、小舞はこれ以上刺激しないようにと立ち上がる。

するとその拍子に、ダボダボスウェットのポケットからスマホが転げ落ちた。現代っ子の小舞はたとえ隣の部屋へ外出するときでもスマホを携帯する。

すでに小舞は立ち上がっており、松葉杖をついた状態で拾うためにかがむのは実質片足スクワットなので面倒だ。

弟子が気をきかせて拾ってくれないかと期待すると、しえはその通りに動いた。

「おししよー、落としました、よ……」

「あ」

スマホを拾い上げたしえは絶句した。彼女の視線を追った小舞は思考が止まった。

落ちた拍子に画面が点灯したスマホには、待受にしていた『魔法少女デスヘイズが触手に捕まりあられもない格好になっている画像』が表示されている。ネットに出回っていたデスヘイズの放送事故部分スクショの一つである。

しえは性的に剥かれている自分に釘付けになったまま、かすれた声を出す。

「お、ししよー、これ、なんですか」

「いや、ちがうの。これはちがうのほんとに」

小舞の小さな脳みそが高速演算を開始する。考えるべきは師匠としての株を落とさず、かつ目前の事実と噛み合う最高の言い訳だ。まさか『自分がないものをたくさん持っている成功者がこっぴどい失敗

を犯している様は興奮する』などと真実を告げるわけにはいかない。しかし事実としてデスヘイズのエロティックな画像がそこにある。

そうした要素を勘案し二秒でひねり出した小舞の言い訳は、こうだった。

「しえが……えつちなことされてるしえがすつごくかわいくて、待受にしている。変な意味じゃなくて、しえに興奮しない日はないよ」

「変な意味以外に何があるんですかっ！ もうサイテー、さいってーですよおししよー！」

「それはどうかな」

「どうかなじゃないですよ！ 百歩譲って私に興奮するのはいいとしてもすぐそこに本物がいるのに、じゃなくて！ 違う、今のはナシナシ！」

「ん、んん？」

「あーもー分かんない分かんない！ 変態なのかカツコイイ人なのかはつきりしてくれないと、私の気持ちもよく分かんないですよー！」

「お前は何を言ってるんだ」

「とにかくその画像消して、今日はもう帰ってください！ いろいろ混乱してワケ分かんないですっ！」

顔を両手で覆ってぶんぶん頭を振る様は、まさしく混乱状態のお手本だった。小舞としてもいつまでも弟子の失敗画像を待ち受けにしているのは罪悪感がないでもなかったの、大人しく削除して待受は先日のフードコートでのツーショットに変えておいた。

それをしえに確認させると、彼女は枕に顔をうずめて足をばたばたさせ始めた。耳まで赤くなっている。

弟子のすさまじい感情の起伏に気圧され、小舞は逃げるように自分の部屋へ戻った。

「お昼にするか」

時間はちょうど正午を回ったところだ。弟子も元気すぎるくらい元気になった今、心配することは何もない。ごきげんに鼻歌を歌いながら袋麺を取り出し、お湯を沸かし、PCを立ち上げる。片手での作業は中々に手間だが気にならないほど良い気分だ。夏休みの女子高

生らしいぐうたら生活がそこにあった。

頑張った結果が認められ、世間にチャホヤされ、かわいくて面白い弟子もいる。小舞は楽しくて幸せだ。

器に入れたラーメンにお湯を注ぎ、ぼんやり湯気を眺める。すると何か意識するでもなく、視線がつい、と壁に向く。そこには画鋏が一本だけ刺さっていて、その出っ張り部分に、古い首輪が掛けられていた。

留め具の壊れたボロボロの首輪に、小舞は語りかける。

「ねえミーたん。きつと死に急ぐ必要はないよ。みんな魔法少女にかまってくれる。話を聞いてくれる。生きるのがすごく楽しい。だから——」

遠い目をして思い出す。かつての持ち主が死に際に語った言葉。せいぜい好きな死に方を。

「死に方じゃなくて、生き方を探すことにするよ」

誰にもどこにも届かずに、小舞の声は溶けて消えた。それでも返答を待つように小舞は沈黙する。ぼうつとしているうちに袋麺の三分間はとつくに過ぎた。

小舞は慌てていただきますをしてから、伸びた麺を豪快にすすって、顔をしかめた。

——

シャタードアースの登場により、魔法少女は一躍人気者の代名詞となった。

しかしまだまだブームは終わらない。

ネットの片隅から流出したある動画群によって、流行の火が途方もなく大きく成長しつつあるのにシャタードアースが気づくのは、まだ先の話だった。

掲示板3

マジスト総合スレ part 72

1 名無しさん@マジカル

マジカルストーリーマー全般を語るスレ。

推しを宣伝するもよし、魔関連の質問を投げるもよし。

ただし差別、荒らしはNG。次スレは>>950

あーちゃんの身長にかけて紳士的なカキコをしよう！

前スレ <https://zennsurenourl>...

マジストwiki <https://magicaltruth>.

com...

・
・
・

323 名無しさん@マジカル

分からん。

なぜこんなに面白いコンテンツが今まで埋もれてた？

女の子が変身してリアル魔法使うんだぞ。

もつと前から話題になってるはずだろ

324 名無しさん@マジカル

そこらへんの経緯知りたかったらフレームブレイズちゃんの配信
を見るといい。

講義形式で魔法少女の歴史解説してくれてる。リアル魔法って言
い回しの矛盾も含めてな

ただし黒歴史と胸糞があるから閲覧は自己責任で

325 名無しさん@マジカル

切り抜きとリアタイで時間が溶ける

マジで先陣切ってくれたあーちゃんには感謝してるけど恨む

326 名無しさん@マジカル

この前>>325と同じことコメントしたら「テメーの時間なんざ
知るか目一杯楽しんでけコノヤロー！」って言われたよ

327 名無しさん@マジカル
草

328 名無しさん@マジカル
突き放してんのか歓迎しているのか謎

329 名無しさん@マジカル

あの子さあ、声と見た目のせいで何言ってもかわいくなくなるのずるくなーい？

330 名無しさん@マジカル

つよい、かわいい、えらい、イキリメスガキ、マジスト創始者

デスヘイズちゃんのおししょー↑NEW

331 名無しさん@マジカル

最近のあーちゃん配信はさすがに退屈かも

デスヘイズちゃんの素振りと瞑想だけで二時間はさすがに

332 名無しさん@マジカル

そうか？ 俺はかわいいおにゃのこが画面に二人いるだけで幸せだが

333 名無しさん@マジカル

固有魔法中々習得できないねえ

334 名無しさん@マジカル

刹羽ちゃんによると、固有魔法はずつと習得できないままの子も多いらしい

というか仮にデスヘイズちゃんが習得したら、あーちゃんがまた拗らせるんじゃないか

歌と絵と性格とついに魔法の才能まであるんかよグギギとか言つて

335 名無しさん@マジカル

まーたあーちゃん専用スレになつてる

もう1億スレはあーちゃんの話題で使ったよ腹いっぱいだよ

・
・
・

(以下、スレチの是非議論)

・

・

853 名無しさん@マジカル

あーちゃんの闇がやっぱ深い件について

854 名無しさん@マジカル

「戦い以外に生き方を知らない」

七歳からずっと人知れず戦い続けてきた子が言うのと重い

855 名無しさん@マジカル

拙者普段明るい子が特大の闇を抱えてるのすこすこ侍だが不謹慎
につき切腹いたす

856 名無しさん@マジカル

やめろ、血が汚いだろ

857 名無しさん@マジカル

あーちゃんの専スレがとんでもない勢いになってて草生える

858 名無しさん@マジカル

ちよっと思っただけで、魔法少女のみんなってどうして戦うの？

みんなあーちゃんみたいに闇の子？

859 名無しさん@マジカル

人による、としか

マジストの子の中には配信だけして悪鬼退治はしないって子も多
いし

ちなみに刹羽ちゃんは「悪鬼が人を害することを、身をもって知っ
ているから」だと。まあ察するよね

860 名無しさん@マジカル

なんにせよありがたいことだ。

魔王が出たのも戦わない隠れが多くなって悪鬼が増えすぎたか
らって推測もある

861 名無しさん@マジカル

その推測のソースは？

862 名無しさん@マジカル

だけどモヤモヤしない？ いたいけな女の子が戦ってるのに大人が知らんぷりとか

俺が魔法中年になる方法ないかな

863 有識者志望

真面目な話、男でも三十路まで童貞を守れば魔法を使えるという仮説があった。

研究プロジェクトが立ち上げられ五年間大真面目に議論された。

プロジェクトの名は『童貞魔法中年プロジェクト』。

度重なる実験の結果、ついに判明したのは

童貞はやはり童貞だった。

864 名無しさん@マジカル

知らねえよww

865 名無しさん@マジカル

まずその仮説はどうやって出てきたんだよw

866 名無しさん@マジカル

有識者ニキの毒にもクスリにもならないトリビアすこ

・
・
・
(有識者ニキのトリビア会)

979 名無しさん@マジカル

速報、娯廷市で魔性災害

魔獣以上が出たっぽいな

980 名無しさん@マジカル

相変わらず災害が起きると撮影会になるのどうにかならんかね
対岸の火事撮っていいね稼いでうれしいのか？

981 名無しさん@マジカル
それはここで言ってもしやーない

パークを包んでる黒いモヤは異界化してるってことなのか？

982 有識者志望
多分そう

悪鬼は人一人を飲み込むので精一杯

建物ごと飲みこんでるってことはたぶん魔獣

983 名無しさん@マジカル

パークから中継してくれる猛者おらんかー！

984 名無しさん@マジカル

無理に決まってるだろと思っただけであーちゃんならワンチャン

985 名無しさん@マジカル

悪鬼をあしらせる実力と、魔法改造したスマホ配信があれば！

986 名無しさん@マジカル

ここで配信したら幻滅するわ

今魔法少女がやるべきは、さつさと中に入って浄化することだろj

k

987 名無しさん@マジカル

言いたかないけど娯廷市って、特定済のあーちゃんの住所と近いよね

これあるんじゃない？

988 名無しさん@マジカル

特定厨まーじ。。。

・
・
・
(災害発生、解決)

娯廷魔獣災情報交換スレPart 4

578 名無しさん@マジカル

んで助けられたお礼も兼ねて、配信みたいにすごい、かわいいって
チヤホヤしたんだわ

したら「出てこないで！ 隠れてて！ すぐどうにかするから
！」ってものすごい剣幕で言われてさ

配信とギャップありすぎてぽかーんとなった。

それ以来あーちゃんのことを思うと胸が苦しい。ふわふわ浮足立
つ気分になる。

これは精神汚染か？

579 名無しさん@マジカル

胸焼け

580 名無しさん@マジカル

貴重なあーちゃんガチ恋勢だ！

581 名無しさん@マジカル

ガチ恋するなら覚えとけ

あーちゃんはチヤホヤされるのに謎の流儀がある。

582 名無しさん@マジカル

悪鬼倒して魔獣倒して人命救助もして

ちよつと働きすぎじゃない？ おじさんちよつと心配だわ

583 名無しさん@マジカル

女王の凱旋

https://haishinsaito.shattered

earth...

584 名無しさん@マジカル

配信きたあああ

585 名無しさん@マジカル

待ってた

586 名無しさん@マジカル

お待ちかねのチャホヤタイムだ
一生分のすごいかわいいえらいを叩きつけてやる

587 名無しさん@マジカル

おや、あーちゃんの様子が

588 名無しさん@マジカル

おいカメラ止めろ

589 名無しさん@マジカル

放送事故？

え？ この子本気でごめんなさいしてる？
なんで??

590 名無しさん@マジカル

本気だな。あーちゃんは演技で泣けるほど器用じゃない
しかしなんつーか、度し難いな

591 名無しさん@マジカル

けが人が出たの気に病んでるのか。

全員死んでもおかしくない状況で全員生還させたのに、気にしすぎ
だろう

592 名無しさん@マジカル

この謝罪は的外れだ

でもあーちゃんは怒られるの前提で配信を始めた

その根性を評価したい、推す

593 名無しさん@マジカル

>>592どこから目線だよお前はww

594 名無しさん@マジカル

ごめんなさいから感じる闇の気配がやーばい

595 名無しさん@マジカル

よかった、持ち直した

そっだよあーちゃんはイキって強がってコメントとしばき合うの
が似合いだよ

泣きながら謝るなんてやめてくれ

596 名無しさん@マジカル

あーちゃん最強！ あーちゃん最強！

597 名無しさん@マジカル

これまでの魔性災害事例を考えると妥当な反応

598 名無しさん@マジカル

ちよつと俺もマスコットになつてくるわ

599 名無しさん@マジカル

協会をタクシー扱いは草

ふと思ったんだが、マスコットつてデスヘイズちゃんのスクショに
関係してるんじゃないか

放送事故のエ ロスクショ、今じゃネットのどこにいつても見つか
らない

600 名無しさん@マジカル

それはさすがに

マスコットが率先して拡散はしないだろうが、ネット民が個人で保
存したスクショはどうしようもないだろ

でもたしかにどこ漁つてもないのは不自然

601 名無しさん@マジカル

マスコットつて魔法少女スキ一の有志でしょ？

すーぱーはカーがマスコットになつて、デスヘイズの尊厳守ってる
んじゃないね

602 名無しさん@マジカル

気持ち分かるけどお前らスレタイ見な？

これ以上は専スレいけ

【かわいい】魔法少女シャタードアースを語るスレPart722【さい
いきよー】

844 名無しのマスコット
終わった

最後の方はいつもの調子でやりあってよかった

しかし最強のスターシリーズがあんな大怪我するってなよっぽどの強敵だったのか

845 有識者志望

スターシリーズのスペック的には魔獣までならワンパンのはず

何かどうしようもない事情があったんだろう

846 名無しのマスコット

有識ニキさあ、あんたはガキを買い被り過ぎなんだよ

どんだけ強い魔法を使ってもガキだぞ？ ちよつとした油断や不

注意でケガすることも普通にありえる

俺はこれを機にあーちゃんにはしつかり反省してほしい

847 名無しのマスコット

言い方は気に食わないがまあ実際、ボランティアで戦ってる普通の

女の子だものな

848 名無しのマスコット

死ぬほど重くなった

何これ

849 名無しのマスコット

あ

856 名無しのマスコット

祭りだああああ

860 名無しのマスコット

【流出】監視カメラが捉えた魔獣災【シャタードアース】

<https://dougasaito.28374...>

864 名無しのマスコット

これはひどい

監視カメラ映像漏洩とか普通に懲役もんやぞ

869 名無しのマスコット

毎秒千回再生されてんのえぐいww

877 名無しのマスコット

ご丁寧に編集してあーちゃんの戦闘シーンだけまとめてやがる

880 名無しのマスコット

あーちゃん最強過ぎて草草の草

悪鬼に近づいたと思ったらもう勝ってる

配信でよく見る倒し方だけど、この画質だとコマ落ちみたいだ

889 名無しのマスコット

確か発生当初いた東から西の魔獣のところに猛ダッシュしたんだっ
たか

オープンワールドのサブクエばりに道中で人助けしてるな

894 名無しのマスコット

ホーニータイプ出た！ 女の子が危ない！

と思ったらハンマーが飛んできて消し飛んだ

後ろの店は南無としか言いようがない

896 名無しのマスコット

これで壊しちゃうのは止むを得ないだろ。店の人は気の毒だけども

899 名無しのマスコット

あーちゃん物理法則無視してない？

あれだけ長いハンマーをあの速さで振ったら、先端が音速を超える
はず

なのに衝撃波も音もしないって不自然過ぎる

901 名無しのマスコット

核融合できる魔法少女もいるのに何を今更

905 名無しのマスコット

何度目の配信か忘れたけどあーちゃんが解説してたよ

空気をどかしてるんだと

909 名無しのマスコット

魔獣の眼光に震えた

夢に出てきそう

915 名無しのマスコット

苦戦というか鬼ごっこになつてるな

追付けば勝ち確

オートガードの鎧もあるのにどうやってケガするんだろ

945 名無しのマスコット

あーちゃあああん

960 名無しのマスコット

ラストの衝撃がやばい

965 名無しのマスコット

円柱広告が落ちる

なぜか落下地点にデスヘイズちゃんがいる

あーちゃんがデスヘイズちゃんを押し倒す

落下暗転

つまり・・・どうということ？

969 名無しのマスコット

つまりあのケガは弟子を庇って負った傷だつてこと。

あーちゃんはどこまでいってもあーちゃんだつてこと。

974 名無しのマスコット

この経緯を「私の不注意」で済ますあたり筋金入りだな

977 名無しのマスコット

言葉では言い表せないけど、なんかあーちゃんが好きになった。

なんか好きだ

979 名無しのマスコット

なんか好き、わかりみが深い

985 名無しのマスコット

まーた魔法少女ありがとーブームが再燃する予感

990 有識者志望

>>>985もうしてるよ

魔法少女の活躍をこれだけ客観的に証明する動画はない

もしかすると231より影響は大きいかもな

992 名無しのマスコット

動画投稿から二十分で魔法少女がグローバルトレンド一位

ブーム来てるねえ

995 名無しのマスコット

俺たちは今歴史に立ち会っているのかもしれない

ここの性癖語りカキコが後世の史料になりうる

考えただけで震えてくるぜ

あーちゃんの股間の布とデスヘイズちゃんの絶対領域！

999 名無しのマスコット

語ってんじやねーよ変態！

．．．
（以降次スレにて、性癖暴露及びお祭り）